
マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類

ヘタリア行進曲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類

【Nコード】

N4004M

【作者名】

ヘタリア行進曲

【あらすじ】

本来交わることの無い世界……

本来交わることの無い因果……

しかし、2人の因果が世界に入る時……

世界は緩やかに動き出す……

注意

オリジナルのMSや戦術機、オリキャラが多数出てきます。
そういうのが無理な方は回れ右してください。

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 プロローグ（前書き）

さあ、因果の扉は今、開かれた……

始めよう……

交わることの無かった異物の話を……

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 プロローグ

俺は死んだ……

そう、俺は死んだはずだった……

……ここは……

俺がそんな事を考えていると、頭から声が流れ込んできた……

『ここは因果の狭間、ありとあらゆる因果が交わる場所。そして因果の始まりにして終わりの場所、因果の始まりと最果てを司る場所…… ようこそ、連続時間の住人…… 私は君を歓迎しよう……』

因果？ 始まり？ 最果て？ ありとあらゆる因果の交わる場所？

『そう、ここは君達、連続時間の住人の思考や発想、或いは妄想、想像、if、もし、など歴史の分岐点の溜まり場であり世界の思考の溜まり場……』

とにかく解らない事ばかりだ……
しかし、何で俺はしゃべれないんだ？

『それは君が連続時間の世界から切り離され、思念体になったからだ……』

思念体……？

『意思や感情、魂と言った不確かなもの……君達連続時間世界の間がそう呼んでいるモノ』

ここは死後の世界か？

『いや、その表現は正確ではない……我々思念体の死の概念や定義は思念体の完全消滅にある……君達概念での死はあくまで肉体の死だけだ……思念体には肉体の死と言う概念は存在しない……その意味では君は死んでいるとも言えるし、死んでいないとも言える……何故なら、肉体の消滅後、思念体は切り離され、精神連続体となり、精神連続世界の一部となる……融合した思念は世界を形成する器に入る。それが人が草か石か動物かは解らないだがそうして因果はつむがれていく……』

まるでメビウスの輪の様だ……

『そうだ、世界は巡るのだよ……輪廻転生を繰り返し、姿を変え、

形を変え、命を変えながら遍く通じる三千大千世界を形成する……」

俺はここで疑問に思った、何故、俺はこの世界に因果の溜まり場にいるのかと言う疑問だ。

この人？　の話では俺は精神連続体になって精神世界の一部になる筈だが……

『それは、君が“唯一の存在”と呼ばれる存在になったからだ。君と言う存在は実際、125の平行世界に存在し、さらにそこから違う自分が分岐していたが君、いや“君達”は君を残し君に統合された。これは異端で稀なことだ……何故なら“君達”は125とそこから枝分かれしたifの自分が消滅し君と言う存在を定着している……つまり、君が消滅すれば君という存在はこの遍く通じる三千大千世界から完全に消滅する……つまり125と無限にあるifの存在にかかわりのあるモノ全てに因果の修正がかかる。そうなれば最悪億単位の世界とそこにいる生命は死滅するだからこそ君を世界に定着させ125のifを作り上げる』

話は解った……

俺のifを大量生産するために俺を生きていた世界から切り離し、別の世界に移植するのだな……

しかし、俺の世界でもそれはできる筈だが？

『君のいた世界は思念体が“君”しかいないと言う因果が形成され

ている……そこに“君達”が入り込めば因果の修正力が働く……一度形成された因果は改ざんは不可能に近い……アーカシクレコードがあれば別だがそれはすでに無くなってしまった……故に君の存在しない世界に“君達”を上書きし、因果を騙し定着する。そこから君のifを作り上げていく事になる。』

つまり自分のMSVを作れと言うわけか……

それはどうやって出来るんだ？

『自分の想像力と君が関わっていく世界にもよる。関わりや繋がりが増えれば増えるほど“君”のバリエーションも多く出来る』

なるほどな……話は解った。

問題は俺をどの世界に定着させるかだが……

『定着させる世界はランダムになる……こればかりは致し方ない……許せ……』

おいおい！！ 変な世界に飛ばされたら洒落にならんぞ！！

『その為に君には“唯一の存在の力”と君が生き残るための“箱舟”と“君の力を体現できる存在”と“君のパートナー”をあげよう……まずは、“唯一の存在の力”の説明だが、この力はあるとあらゆる世界の君達の知識、技術、才能、能力、素質、身体能力、その他の力が君に集約されている……しかし、普通の人間の体のスペックでは限界がある体が精神的、肉体的負荷に耐えられず廃人になってしまう。だからこそ、唯一の存在の為に器を私が作った。この中に入りたまえ』

俺は指し示した方向を見つめた。

そこには真っ裸の自分が横たわっていた。

俺には解る……

これは……俺の体だ……

……魂が……

……俺の魂がそう叫んでいる……

そして俺は魂と器たる肉体は融合した。

そして俺は“唯一の存在の力”の訓練をした。

そして、俺は“君の力を体現できる存在”を想像した。

その瞬間、ある“モノ”が俺の目の前に現れる。

それは、かつて俺が乗っていたH i - vガンダムだった。

師匠のアムロ・レイが乗るはずだった機体……

それはvガンダムを超えるモノ……

俺が想像する最高の力……

その名は……ガンダム……

なるほど……これ以上に最強のモノは俺は知らない。

これこそ、そう！ これこそが俺の力を体現する力だ！！

ガンダムだ！！

そして次に俺の相棒が来た。

そいつは女でコイツも“唯一の存在”だった。

名を王 ワシ・メイラー 梅麗と言っそうな……

そして、彼女の横には見たこと無い全身メタリックグレーのMSが規律していた。

「ガンダム……」

俺の言葉に彼女はニヤリとして言った。

「そう！！ インフィニットジャスティスガンダム！！ アスラン様の機体よ！！」

彼女はそう胸を張り誇らしそうに答えた。

このガンダム…… UCには無かったな……

俺のいたユニバーサルセンチュリーではなく旧暦の西暦にいた少女（俺と同じ年）だそうだ。

しかもこの子…… 腐女子だ……

何でUC世界の俺がそんな単語知っているかと言えば、西暦にいたヲタクの俺の知識だ……

なんか…… ヲタクの俺が反応している…… 彼女の容姿に……

何？ ヘタリアに出てくる台湾ちゃんだと？

さらに俺のいた世界はアニメの世界だと！？

オイオイオイオイ！！

何！？ その爆弾発言！？

サラッと言った！？

しかも俺がH i - vガンダムに乗ってると言ったら、興奮しながら叫び、『H i - vはゲーム設定か』や『今度は種運命のジャステイスか』などと口走りやがった……

ヲタの俺……自重……

ん！！ んん！！

俺は咳払いをしてとにかく忘れることにした……

いや！！ 忘れたい！！

「兎に角、これからよろしく頼む。梅麗」

俺がそう言いながら右手を差し出した。

その時、彼女は俺を品定めするように俺を眺める。
何だ？ 一体？

「貴方、中々いい男ね。気に入ったわ。よろしく、玲人」

どうやら俺は彼女の御眼鏡に適ったらしい……

俺達は訓練を開始した。

俺はH i - v の構造や操縦、戦い方を知っているからいいが梅麗は
実戦経験が全く無いずぶの素人だ。

正直、今の彼女では当てにならない。

いくら唯一の存在の力を持っていてもそれを完全に扱うことは出来ない。

つまり力や技術の使い方は理解できてもそれを刻一刻と変わる状況
に応じて素早くかつ的確に行うことは出来ない。

如何しても檻褻が出る。

俺は梅麗に技術や知識の扱い方を体で覚えてもらうことにした。

つまり、ガチの模擬戦でだ。

「遅い！！ そんな動きでは撃墜されるぞ！！」

やら

「接近戦に無駄が多い！！ サーベルは棍棒じゃないんだぞ！！」

やら

「射撃がへたくそだ！！ そんなんじゃ自分の居場所を敵に教えているだけだ！！」

やら

「支援砲撃はただ撃てば良いと言う問題じゃない！！ 味方と敵の位置を正確に把握しろ！！」

やら

「OSやロックオンに頼るな！！ マニュアルを多用しろ！！ オートじゃあ予測されるぞ！！」

やら

「一々止まるな！！ 撃ち落されるぞ！！」

などなど……

最初はボコボコにやられていた梅麗だったが、次第に動きが良くな

つていった。

俺もバズーカ、右手の機関砲やシールド内のビームガンを多用するようになり、ようやく五分五分の戦いが出るようになった。ただし、フィンファンネルは使っていない。

使えば瞬殺だからな……

次に俺は自分の機体を改良する事にした。

兵装の変更はビームライフルからハイパーメガライフを装備させた。このハイパーメガライフルは、ガンダムヘビウエポンシステムシステムの標準装備だ。

ヲタクの俺曰く、Gジェネで言うところのビーム射撃2×4らしい

……

さらに、バーストショットはビーム射撃3とのこと……

訳解らんが兎に角すごいらしい……

シールドには 世代のフィールドの技術が使われている。

その範囲は展開したら不可視のフィールドが100メートルまで延びる。

ツインサテライトキャノンまで
大抵の攻撃は防ぎきる。

フィンファンネルもこのフィールド技術が使われている。

それ故に地上でのファンネルの使用が可能だ……

さらに、フィールドによりビームを固定して刃を構築、相手に突撃して突き刺すことも出来る……

さらにフィンファンネル表面には 式のフィールドが展開されて

いる……ファンネル事態の撃破は難しい。

フィールドを越える攻撃を叩き込まない限りは破碎は難しい。

機体にはGジェネのオプションパーツのテレストリアルエンジンと出力リミッター解除ユニット？が装備された。

梅麗のインフィニットジャスティスガンダム（長たらしい名前なのでジャスティスとする）
の改良はビーム・ジェネレーターVとC・Aチップ搭載が装備された。

「さて、行くか……」

俺の言葉に梅麗が頷きながら答えた。

「ええ、行きましょう！ 玲人！」

俺ことレイジ・タカツキと王 梅麗は見知らぬ世界に旅立つ……

さあ、2人の物語は今ここから始まる……

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 1話

俺が目を開けるとそこはH i - vガンダムコックピットの中だった。

俺はとりあえず、コックピットから降りて、辺りを見回す。

そこにはただっ広い空間が広がっていた……

ひ、広い！！ MSが100機以上は置ける……

これが“箱舟”というヤツか……

俺が後ろを振り返るとH i - vガンダムの横にジャスティスがいた。

俺は急いでコックピットに戻り、ジャスティスに通信を繋げる。

「オイ！！ 梅麗！！ オイ！！ 応答しろ！！ 梅麗！！」

そう叫びながら通信すると梅麗はウザそうに答えた。

『何よ……聞こえてるわよ！！ 叫ばないでよ！！ 聞こえてるっ

て!!』

よかった……そこにいるのか……

俺は取り合えず話を進める。

「どうやらここが“箱舟”らしいぞ……」

その言葉に今度は梅麗が叫ぶ。

『ホント!? もう到着したの!?』

そう叫びながら梅麗は手元を操作しながらモニターをつける。

『何!? このただっ広い空間!? メツチャ広!!』

俺は彼女の驚きに答える。

「ああ、コイツはMSデツキだ……それも100機以上は収容可能なほどの広さの……」

俺の言葉に梅麗は更に驚く。

『何それ!? 無茶苦茶広いじゃない!? だとすれば、“箱舟”全体って……途方も無く広いじゃない!! ……全体像が掴めないし、想像も出来ない……』

俺もその意見に同意見だ。

「何時までも驚いていられない……兎に角、機体から降りて探索す

るぞ」

『ええ、解ったわ』

俺の提案に梅麗は頷きながら答える。

俺達はとりあえずコックピットから降りて探索していく。

色々調べて解ったこの“箱舟”……アクシズみたいな小惑星を改造した機動要塞みたいなものと判明する。

俺達はとりあえず“箱舟”の管理室に行く。

そのコンピューターをいじり、外の様子を外部カメラで観る。

そこは何と海の上だった。

全てが海、海、海の世界だった……

俺達は更にコンピューターを弄る。

外の大気の状態、この海の成分、などなど……

梅麗は搾り出すような声で呟く。

「該当する惑星にヒット……99・85%の確立で地球だよ……ここ……」

俺もその言葉に頷くしかなかった。

「……ああ……どうやらその様だ……だが、問題はここが何時で何処でどの世界の地球かだ……正直……見当もつかない……せめて梅麗のいた時代くらいならいいのだが……」

俺達は話し合った結果、工学迷彩を施した人工衛星を打ち上げることにした。

マストライバーの技術を応用した技術で打ち上げる。

これなら推進剤を燃やさないから発射がバレることなく打ち上げる事が出来る。

打ち上げてから暫くして、高度に暗号化された通信が届いた。

俺達はそのデータを解析していく。

暫く解析していくと梅麗が驚きを露にする。

「ここ……！ マブラヴオルタの世界！？ そんな！？ 何で……！」

俺は梅麗の言葉の“マブラヴオルタの世界”というキーワードが気になって唯一の存在の力の記憶にアクセスする。

するとヲタクの俺の知識に1件ヒットした。

またお前か……

それを探っていくとどうやらこの世界はゲーム（18歳未満お断り系のゲーム）の世界らしい事が解った。

どうやらこの世界、異星人、BETAの侵略を受けているらしい。しかも、唯でさえ劣勢なのに各国の思惑がしがらみとなり旨くいつていないらしい……

俺達UCの世界以上に混沌としている世界に来たらしい……

やれやれだぜ……

兎に角、梅麗と話し合い、今後の予定を立てる事にした。

正直、異邦人たる俺達が変に介入するのは明らかに世界に無用な混乱を引き起こすだけだ。

「なあ、梅麗、俺達は今後どう動くべきだと思う？ 正直、この世界は俺の知識では断片的なモノしかない。お前が頼りだ」

梅麗は顎を右手で押さえながら考える。

「うーん……セオリーとしては香月博士の所に行くのが一般的だけど……正直、コッチが隙を見せると危ないんだよねーかと言って日本帝國は正直、不穏な動きが内部で起こりそうだし、統一中華戦線はその領土がハイヴで厳しいし、ソ連はカナリ危険だし、アメリカはアメリカで腹黒いし、EUもその殆どがハイヴだし……マトモな所は殆ど無いね……」

俺は額に右手をやりながら答える。

「じゃあ何か？ この世界はそこまで切羽詰まっているのか？」

俺の悲観的な質問に梅麗は更に追い討ちをかける。

「そりゃ……食料は殆どの国では合成食品だし……」

……なんてこった……今日のメシすら事欠く有様かよ……

しかも……

「合成食品？　UC世界のサバイバル時の非常食じゃないか……」

俺の言葉に梅麗は更に悲惨な事を口にする。

「多分、玲人の世界より酷いと思うよ。味的にも見た見た目的にも……」

コイツは……“箱舟”の意義が大きくなっ たな……

この“箱舟”、自然食品（牛、豚、鳥、羊などの肉類や新鮮な野菜など）が生成できるし、ナノマシーン技術により鉄鉱石の生産も可能だし、海水をくみ上げ核物質の生成、そこからナノマシーンを使いヘリウム3を生成できるし。少量ながらMS生産や、その部品やパーツの生成も可能だ。

正直、ここまで至れり尽くせりは有難い。

俺はコーヒーを梅麗は珍珠？茶を太めのストローで啜りながらブレイクタイムを満喫していた。

正直、今の状況じゃあいい案も思いつかない。

時には頭を休める事も必要だ。

俺はカステラを摘みながら梅麗に語りかける。

「正直、何処へ行っても今の所、俺達は異端者で異物で異邦人なんだ。ならば、俺達からアクションを起こしていくしか無いわけだ……」

梅麗は豆花を蓮華ですくいながら質問する。

「で？ その具体案は？ 無計画に行動したら私達、全世界から叩かれるよ？」

俺は口の中のカステラを強引にコーヒーで流し込み口の中の物を無くしてから言う。

「とりあえずはオルタネイティヴ計画に左右されない部隊の編成、そしてそれが整えばオルタネイティヴ4にアプローチをかけていく。正直、今の状況じゃあ、俺達の技術も知識も力も安く買い叩かれる。」

なら……この世界での俺達の値段を實力により形成、相手に『俺達と組んでいた方が得だ』『俺達は高い。それ相応の対価が必要だ』と相手に思わせる」

俺の提案に梅麗は蓮華を咥えながら質問する。

「だから……私が聞きたいのはプロセスだよ。どうやってその評価を形成するの？」

俺は梅麗こう質問した。

「確か梅麗、この世界の国連はアメリカの隠れ蓑になっているって言うていたよな？」

「ええ、そうだけど……それが今の話とどう繋がってくるの？」

俺は意地の悪い笑みを浮かべながら言う。

「そんな国連に世界はどう思ってる？」

「正直、アメリカイコール国連と考えてるわね……表面上はにこやかでも内面はカナリドロドロした感情が渦巻いてるよ」

梅麗の回答に満足した俺は口を開く。

「そう、今の情勢は国連イコールアメリカだ。なら、アメリカを国連から切り離す。つまり、国連軍を一勢力にまで押し上げる。この世界の国連は各国に依存している。つまり、国連軍に独自の軍隊を持たせる事で国連を一勢力とする。まずは、国連の偉いさんにコンタクトする」

「その後は？」

梅麗の質問に俺は答える。

「俺達2人でハイヴを陥落させる！！」

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 2話

1997年……

俺達2人は国連軍最高司令官、グレンバルト・レイテ元帥の執務室にいた。

ドイツ系の顔立ちで中年の長身でくすんだ金髪をオールバックにした紳士が口を開いた。

「君達かね？ 私にこの機体の資料を送りつけたのは？」

俺はその言葉に何事も無く口を開いた。

「ええ、どうです？」

資料を見ながらレイテ元帥は口を開く。

「確かに……君達の考案した戦術機、いやMSだったか？ これは明らかに違う概念で造られている……私はこれでも衛士からの叩き上げだね。戦術機には詳しい積もりだ。だから解る……これは最早、戦術機ではない……第三世代型最強のラプターのカタログスペクより此方のジェガンの方が倍以上だ……」

レイテ元帥は資料を机に置き、尋ねる。

「それで……異世界の住人が私に何の用かね？　まさか、これを見慢する為に来た訳ではあるまい？」

俺はその言葉を聞き、話を切り出す。

「お話が早くて助かります。私達は正直、戸籍と言うものが存在しない……無くても生きていけますが正直不便です。その見返りとして国連にこれらの私のいた世界の技術を提供いたします」

それを聞き、レイテ元帥は此方を探る様に言う。

「高々戸籍を得る為にこれほどの技術を提供するのかな？　些か、気前が良過ぎると私は思うが？」

レイテ元帥の探る視線と言葉を俺は何食わぬ顔でかわす。

「ええ、無論、これらの技術を再現する為にはそれを生産する工場や人員、試験運用部隊が必要です」

俺の言葉に此方の意図が読めたのか元帥は確信に近い質問をする。

「つまり……君達の技術を再現する為に部隊を作れと……」

その言葉に俺は頷きながら話す。

「ええ、それも国連が独自に運用できる部隊……各国の軍隊に依存しない国連独自の軍隊、つまり、国連が各国に技術開発提供を行い、新技術を徐々に世界に浸透させていくのです。」

プロミネンス計画とは違う、この世界の既存の技術ではなく、私達

が持ちえる技術とこの世界の技術形態の融合を図り、この世界に徐々に浸透させ、人類の新たな力とする計画……

計画名……『プロジェクト・ラグナロク』……」

レイテ元帥は顎に手をやりながら言う。

「つまり、君達はこの世界でBETA大戦を優位に進める為に協力する……と……」

その言葉に梅麗が答える。

「ええ、どうせ私達は帰る当ても帰る場所も無いのです。なら、必然的にこの世界で生きていくしか無いのですよ……残念ながら……なら……思い切った事をしていくしかないんです」

俺は机に両手を付き頭を下げた。

「お願いします!! どうか!! どうか!! 俺達をこの世界に置いて下さい!! 今は貴方に頼るしかない!!」

「お願いします!!」

梅麗もまた、頭を下げた。

俺達を見たレイテ元帥は静かに口を開いた。

「全体的に信じるのは無理だ。だが……君達がこの世界に仇なす存在でない事は解った。なら、後は言葉では無く結果で示したまえ。今の所、私の信用は半信半疑だ。なら……それを結果で信用を勝ち

取り、私を信頼させて見せる」

俺はその言葉を聞き、頷きながら答える。

「勿論です。では？」

「ああ、まずは君達の戸籍と階級及び国連軍内での独立作戦行動を許可する」

こうして俺達はレイテ元帥の庇護の下、俺は大佐、梅麗は中佐の階級を貰った。

レイテサイド

正直、俄かに信じられない話だ……

2人の若者は私に極秘裏にコンタクトを取ってきた。

その方法は私しか使わない秘匿回線だ……

そして、彼等は自分達の置かれている現状を話した後、私に証拠を見せた。

それは彼等の言葉を借りるなら、我々の世界では実用化されていない技術の塊だった。

それを見て思った事は、“非常識”や“物理法則を無視している”だ……

何処の世界に約19メートルの機体に搭載可能な熱核反応路が存在しよう？

何処の世界にジェネレータ出力1、870kwを叩き出す機体があるだろう？

何処の世界にレーザー級のレーザー照射を30秒防げる臨界半透膜処理なるものがあるう？

何処の世界に36ミリ劣化ウラン弾を全弾マトモに喰らって傷一つつかないチタン合金セラミック複合材質なるものがあるう？しかも重さが19メートルサイズで21.3トンだと？

何処の世界に人間と変わらない動きの出来るムーバブルフレームなる技術が存在しよう？

何処の世界にビーム兵器なる高熱粒子兵器が戦術機サイズで実用化されていてよう？

……マトモじゃ無い……

どれもこれも私達の知る技術では再現どころか思い付きもない技術だ……

もう、これを見ただけで違う世界の途方も無く発達した技術だと言うことは理解できた。

なまじ知識があるだけに理解できる。

この機体に乗れば衛士の死亡率は下がる。

人類は勝てるかも知れない……

と……

そう、今、人類は劣勢だ……

オルタネイティヴ3の失敗とオルタネイティヴ4へ移行、早、第五計画が計画される始末……

しかも、その第五計画はG弾大量投入作戦……

確かに、第五計画なら勝てるかもしれん……

だが、問題は勝った後だ……

“ベータとハイヴは倒せました。変わりに人類が住める所はありません”

では、話にならない……

これでは、アメリカさえ良ければそれでいいと言う作戦だ……

それに私は余り、第四計画を信用してはいない……

“ベータ相手に諜報戦が成り立つのか？ 逆に此方の情報を盗まれるのではないか？”

と言う疑問が如何しても付き纏う。

そこに彼等、異界の住人の技術だ。

彼等の技術は明らかに我々の知る技術形態とは一線を画すモノだ。

更に、この“ガンダム”なる兵器……

人知を超えている…… たった1機でハイヴ陥落が可能だと！？

最早、驚きを通り越して呆れの域に達した。

私は彼等にこう質問した。

『君達はこんなふざけた兵器を使って一体何と戦っていたのかね？』
と……

すると彼等は悲しそうな目をして答えた。

『人間です。理由は様々ですよ…… ですが…… 人間同士で殺し合いをしていました……』

と……

私は考えさせられた……

結局、人間の敵は人間か……と……

どんなに世界が違おうが、どんなに技術が進もうが、どんなに状況が違おうが、人間は何処まで行っても人間でしかないらしい……

なら……私は、私だけは彼等を遠い世界から来た、帰る当ての無い彼等を信じて見たくなった。

人類の愚かさを知り、この世界の現状を知らながら、この世界で生きることを決断した彼等の強さを……

「私は軍人失格だな……理論ではなく感情で今動いている……」

だが、そんな自分が嫌いでない自分がいる。

私のボヤキは執務室に響き、そして消えた。

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 2話（後書き）

誤字脱字、設定の間違いや違和感を感じたらご連絡ください。

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 3話

あの会合から5日後……

大西洋の沖合い……

俺と梅麗はH i - vとジャスティスのコックピットの中にいた。

俺達の目的は勿論、リオンハイヴ殲滅作戦だ。

作戦は、作戦と呼べない様なモノだ。

それも仕方ない、たった2機のMSで行う作戦など余り無い。

それも要塞の様な敵勢力の密集している広範囲の拠点攻撃にたった2機で挑むなど聞いたことも無いし、無謀だと思う。

しかし、任務達成は敵の撃滅ではなく反応路と言う拠点破壊が目的だ。

当然、抵抗勢力の排除はしなければならないだろうが、後は無視しても問題は無い訳だ。

早い話が敵を無視して反応路を破壊すればいいだけだ。

楽と言えば楽だが、そうは問屋が卸さない訳で、問題になって来るのがレーザー級なるベータな訳だ……

コイツはレーザー級と重レーザー級の二種類いる。

レーザー級は全高が3メートル位の大きさで、38キロ離れた高度1万メートルの飛翔体を的確に捕捉し、3キロ以内の進入を許さない程の精度だが、臨界半透膜処理された熱、衝撃に強いガンダリウム合金製には蚊が刺した程で問題は無い。

また、ジャステイスのVPS装甲は物理攻撃ほとんどブロックし、耐熱性があるらしく、大気圏突入の摩擦熱や威力の低いビームマシンガン位なら傷一つつかないらしい。

俺はそれを聞いた時なんて夢の様な装甲だと思ったが、欠点もある。それはビームに対しては熱耐性により通常装甲に比べれば耐性があるが、ビームライフルのような高出力のビーム兵器の直撃に耐えることはできない事と関節部分や推進器の基部、カメラなど、構造上装甲で覆うことが不可能な部分までカバーできない点は従来の装甲と同様である事と例え実態弾の攻撃に耐えられてもその衝撃までは殺す事は出来ないらしい。しかし、ジャステイスはフレーム自体をPS装甲にしているので間接部は問題無いらしい。

つまり、レーザー級のレーザー位なら防ぎ切ることが出来るそうだし、問題は重レーザー級だ……

コイツのレーザーは天候による減衰を期待できないほど出力が高く、高度500メートルで低空飛行する標的に対しても約100キロ以上の有効射程距離を持つうえ、決して味方誤射はしないらしい。

コイツのレーザーを直撃すればH i - vなら1分で装甲が熔解してしまうし、ジャステイスに至っては20秒もてばいい方だ。

しかし、俺にはエフィールドシールドとフィンファンネルが梅麗にはビームシールドがある。

更に、俺にはニュータイプ能力があり、梅麗にはSEED能力と先読みの力があるらしいから問題にはならない。

回避すればいいのだ。

それを聞いた梅麗は呆れながらこう言った。

『ガンダムと私達のスペックって最早人知を超えてるわね……』

と……

しかし、ガンダムにも欠点はある。

その際たる例はコストだ。

超高級な装甲とパーツに現代で考えられる技術を詰め込むだけ詰め込んだ為、大量生産が出来ない、そのふざけたスペックを実現する為に整備費と整備の手間が馬鹿にならない。

ハッキリとした事は解らないが整備だけで武御雷やラプターが100生産可能なコストをかける。オーバーホールしようものなら……MSなら10から20機位のコストだ。

ブッチャケ、コストパフォーマンス？ 何それ？ 美味しいの？ と言うレベルだ。

だが、人類にベータ並みに頭数揃える力と余力があるかと問われればNOだろう。

正直、一年戦争の連邦とジオン以上に差があるのだ。

ベータと人類には……

そこに、俺達だ。

俺達の技術と知識をこの世界に与え、数の暴力に技術の力で対抗するしか無いわけで……

今なら、一年戦争時のジオンの気持ち解る気がする……

余談が過ぎた。

兎に角、人類勝利には先ずこの仕事を成功させなければ始まらない。

『後、2分で到着だよ。リオンに……でも行き成りフェイス5の大家物狙いつて如何よ？ 無謀じゃない？』

梅麗からの通信に俺は答える。

「高が小規模な標的を倒して喧伝しても仕方ないだろ？ こう言う喧伝は実際考えられない様なデカイ敵を痛快に倒して初めて意味があるんだよ。それに、EUには直接的な、間接的にはアメリカにも貸しが出来る」

俺の言葉に梅麗が疑問を投げかける。

『アメリカに間接的な貸し？』

「ああ、アメリカが初期に欧州戦線を支援した主な理由として、アメリカ本土東岸まではおよそ5500キロメートルと意外にも近かった為だ。詰まる所、自分たちの国にベータが攻め込んできたら堪

らないし、ハイヴを持ち込まれるのは以ての外だろう？ アメリカ
としたら」

俺の言葉になるほどと言う。

「お話は終わりだ。行くぞ!!」

『おう!!』

飛び続けて、ヨーロッパの大地が見えた。

さて、もうここからは遠足気分は捨てよう。

ここは敵の勢力圏内だ……

暫く飛んでいると、何か危険な気配を感じ、梅麗に通信を入れる。

「梅麗!!」

梅麗も感じたらしく、俺の通信に緊張感を滲ませながら答える。

「解ってる!! 何か危険なモノがいる!!」

その瞬間、プレッシャーを感じた。

くる！？

「当たるかよ！！」

俺はアームレイカーを操作し、即座に回避行動に入る。

横目で見ると梅麗も回避行動を取っていた。

その瞬間、無数の光の線や柱が横切っていく。

それでも飛んでくるレーザーの線や柱をかわしながら俺達は突き進む。

「いい加減シツコイ！！ その攻撃も飽きた！！ 堕ちろ！！」

俺はハイパーメガライフルを撃ち込んでいく。

レーザー級やその近くにいたベータを含めゴチャゴチャといった有象無象は高熱の粒子によって焼き払われていく。

正直、攻撃する必要は無いといったがここまで数が多いと攻撃して動きやすくするしか無い。

「行け！！ フィンファンネル！！」

俺はフィンファンネルを放出し、オールレンジ攻撃を開始した。

フィンファンネルは空を不規則に飛びながら標的にビームを叩き込んでいく。

レーザー級が優先的にファンネルとH i - v を迎撃にかかった。

プレッシャーを感じ取り、思考しながらファンネルを頭で操作していく。

俺は2機のファンネルを高速でドリフトさせながらレーザーを回避し、ビームを撃ち込む。

ビームが直撃したベータとその周りのベータを巻き込みながら焼き払う。

1機のファンネル上下左右に高速移動させながらビームを固定し、突撃させる。

要塞級に突き刺さり重たい音をたてて要塞級は倒れこむ。近くにいたベータは要塞級に挟まれ潰される。

残り3機は陣形を組み、その陣形を変えながら母機であるH i - v と共に攻撃を仕掛けていく。

それをH i - v を操縦しながら同時に行い、モニメントに向かいながら突き進む。

梅麗を横目で見てみるとビームサーベルを連結させ薙刀みたいに振るいながら切り裂いていく。

地上スレスレを飛びながら、ビームサーベルを振り翳す。

時にはビームサーベルを振り上げて、高速で変則的にビームの刃を

変えながら切り裂いていく。

突撃級が突撃をかけてきた時、ジャステイスは足の脛の部分からビームが展開し、突撃級を蹴る。

その瞬間、突撃級は切り裂かれ、真っ二つになった。

……相変わらず何て兵器だ……蹴りを斬撃にしてる……

エゲツネ

その時だった、背中のゴツイリフターが分離し、その先端から刃が出てきたかと思えば今度はその先端がビームで覆われた。更に主翼部分からもビームが展開する。

高速で飛びながらレーザーを回避しながら地上のベータを擦れ違い様に切り裂いていく。

本体であるジャステイスはシールドについてるグラップステインガーを要塞級に撃ち込み、挟んでワイヤーを巻き上げる。ジャステイスは引つ張られる形で要塞級に近づく。

そして……

グラップステインガーをシールドに戻し、シールドの先端からジャステイスの倍以上の長さのビームの刃を形成し下から上へ要塞級を切り裂いた。

切り裂かれた要塞級は左右対称にその体を泣き別れにされ絶命した。

着地して、戻って来たリフターを背中に装着し前進する。

暫く前進しているとモニメントの上空に到達し、その最上部に開いている穴に飛び込んだ。

フェイズ5にはベータが採掘した物資を打ち出す搬入口となっている。そこを俺達は侵入口とした。

5秒位落下していると、淡い光を放つ大きな物体に無数のベータが集っていた。

これが……反応路……

俺は梅麗に通信を入れる。

「梅麗、反応路に総攻撃を掛ける！！ 終わらずぞ！！」

『解ったわ！！』

俺はハイパーメガライフルを構え、最大出力に切り替える。

梅麗はハイパーフォルティスビーム砲とビームライフルを最大出力に切り替える。

「これで終わりだ！！ 堕ちろ！！」

『これで御仕舞いね！！ 堕ちなさい！！』

それぞれの最大火力を叩き込み、反応路を直撃し、粒子爆発を引き起こす。

俺達は機体を即時反転させ、飛び上がる。

反応路の反応は完全に消え去り、ベータはハンガリー方面に移動を開始した。

どうやらブダペストに向かうと俺は考える。

俺は梅麗に通信を入れる。

「梅麗、作戦終了だ。“箱舟”に帰るぞ」

『解った……』

そう言い梅麗は通信を切った。

俺はその様子を見て、思い当たる節があった。

それは新兵が戦場を始めて経験し、生き残った安堵だろう。

“箱舟”に帰還、ハンガーに機体を格納したはいいが中々梅麗が出てこない。

俺はジャステイスのハッチ緊急ロック解除を使いコックピットハッチを開いた。

覗き込むと、操縦桿を握り締めながら荒い息をしながら座っている梅麗がいた。

（無理も無いか……初めての实战……良くやった方だよお前は……）

俺はコックピットに入り込む。

そして、ヘルメットを取ってやる。

すると顔中汗だくで、憔悴しきった梅麗がいた。

俺は梅麗の手を解しながら出来るだけ優しく語りかけた。

「梅麗、もう終わった……よくやったよ……よく頑張った……今まで強がってたんだよな……無理してたんだよな……辛いのが怖いのが慢して戦ってたんだよな……もう終わったよ……梅麗……」

言葉を聞いた途端、梅麗は目に涙を溜め、俺に抱きついて泣き出した。

暫くそうしていると梅麗は顔を上げた。

その顔は目が真っ赤で涙の後がついていて、髪の毛はグチャグチャでお世辞にも可愛いとは言えないが俺はそれを可愛いと思ったし、守ってあげたいとも思ったわけで……

「……ゴメン……もう大丈夫だから……今から何時もの自分に戻る

から……」

その言葉を聞いた瞬間、俺は抱き寄せていた。

自分が何をしているか意味不明だ。

「梅麗……無理に何時も通りに振舞うことは無い……俺の胸くらいは貸してやる」

こうして俺達の作戦は終了をみた。

この後、レイテ元帥はリヨンハイヴ陥落の真相を記者団に質問され、こう答えた。

「これは国連独自の計画により開発された機動兵器、ガンダム2機によりリヨンは開放した」

と……

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 4話

世界は混乱の坩堝だった。

最早、ベータがいるだけで混乱の坩堝だが、それとは違う意味で混乱していた。

リヨンハイヴが陥落した……

このニュースは世界中を駆け巡ることになる。

先ず、これを聞いた人の大抵は『へ、今、なって言った』と聞き返すか、『ハ？ 何、言ってるの？』と言う言葉が返ってくるかだった。

そして、その言葉を理解した人はこう聞いた。

『どうやってフェイズ5のハイヴが陥落したんだ？』
と言う疑問が頭に浮かぶ。

しかし、レイテ元帥の発表とその発表を裏付ける映像が公開されたことで世界は混乱したのだ。

最初のレイテ元帥の言葉は誰も信じなかった。

『これは国連独自の計画により開発された機動兵器、ガンダム2機によりリオンは開放した』

前半の言葉は理解できたし、納得出来たが、後半の“2機によりリオンは開放した”の方は理解も納得も出来ない。

何せ、ハイヴ攻略戦は国家の軍事武力では足りないのだ。

それをたった2機でハイヴが堕ちたと聞けば誰もが与太話と思うだろう。

しかし、公表された映像を見た途端、与太話が真実味を帯びてきたのだから……

更に、世界を驚かせたのは、モビルスーツ、通称MSの技術を世界に公表することをレイテ元帥は発表したのだ。

しかも最新鋭MS、先行量産型ジェガンを日本の国連仮帝都基地に20機とアメリカに20機、ユーコン基地には先行量産型ジェガンと先行量産型ギラドーガを各10機、ヨーロッパのドーバー基地郡には先行量産型ギラドーガを20機配備のおまけ付でだ。

正直、気前が良すぎるこのレイテ元帥の行動に常任理事国はいぶかしんだ。

これほど大々的に動いて各国に対し、要求らしい要求をしてこない。寧ろ此方が欲するモノを与えるこの行動が各国には理解できなかった。

いくら国連の基地内限定とは言え、世界が欲しがる宝の山なのだ。

ビーム兵器やあの軽く頑丈な装甲技術、人間と変わらない動きの出来るムーバブルフレームの技術やミノフスキーヨネスコ熱核反応路などのお宝を大放ししてくれたのだ。

正直、戸惑う。

しかし、開放された技術を解析したはいいが生成が出来ないことが判明する。

つまり、これらMS技術は公開しても製造できないでは話にならない。

結局の所、現段階では“国連軍独立特務任務MS開発設計機関”、通称『ラグナロク機関』が独占している形となった。

そして、ラグナロク機関の最高責任者にして隊長として高月 玲人の名と、副隊長として王 梅麗の名と俺達のガンダムが発表された。勿論、ガンダムの技術は極秘とされた。

ラグナロク機関を立ち上げてから早半年が過ぎた。

しかし……レイテ元帥も中々の狸だ。

確かに約束通り技術は公開したが、その技術を体現する製造法や必要な機械が無いのではその技術は絵に書いた餅でしかない訳だ。

正直、オルタネイティヴ4と5に対する牽制と各国に対する国連の脱アメリカを印象付ける為だろう。

実際、オルタネイティヴ計画に参加している連中は焦りを見せている。

それもそうだろう……自分達の計画が不要のモノになりつつあるのだから……

オルタネイティヴ4の場合は、MSを戦場に置いただけでMSのセンサーが全ての地形や反応路の位置、ベータの数、配備が正確に丸解りなのだから……

オルタネイティヴ5の場合は、G弾は迎撃不能の兵器であると言われ、適切な量の減速材を搭載することで、G弾は完全なML機関と化し、超臨界前までラザフォード場を展開、制御する事が可能となり、光線級によるレーザー照射や人類による質量弾迎撃も、ラザフォード場の潮汐変形、重力偏差効果により無効となる。はずが、ビーム兵器のメガ粒子や荷電粒子、臨界まで圧縮されたプラズマがラザフォード場に干渉し、迎撃が可能と言う結果が判明した為、G弾の迎撃不能兵器神話が瓦解してしまったのだから……

兎に角、これら、MS機動兵器技術はラグナロク機関が事実上、管理運営している訳である。

唯、各国も黙っている訳ではない。

MS開発に必要な機械や技術力の協力を表裏関わらず国連に対して交渉などを行っているし、吸収できる技術は解析し、自国の戦術機開発に役立てようとしていた。

各国の戦術機に内蔵型バルカン砲CIWSや外付けのバルカン砲が装備されたのはその最たる例だろう。

また、高周波振動する長刀などの近接戦闘兵器が開発されたし、ムーバブルフレイム等も採用された。

世界に俺達の技術が少しずつ浸透していく……

そう感じた。

帝都大学……

香月　夕呼はハンガーに鎮座するある機体を見上げていた。

今日、午前9時頃到着したラグナロク機関が開発したMSだ。

「これが、ラグナロク機関の開発したMSね……」

香月　夕呼は考えを廻らす。

（全く……レイテ元帥もとんでもない機体を送りつけてくれたモノね……正直、帝國政府からの共同での技術解析する羽目になったじゃない！！それに、ガンダム？　だったかしら？　化け物ね……たった2機でフェイズ5のハイヴが陥落なんて無茶苦茶してくれるじゃない！！　何よアレは！？　角が付いてて二つ目で口がついてれば最強な訳！？　ふざけんじゃないわよ！！）

と、心の中で荒れていた。

世界は徐々に新たな力を手に入れようとしていた。

紆余曲折はありながらも……

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 5話

……正直、マスコミがウザイ……

特にアメリカと日本と統一中華のマスコミが……

アメリカのマスコミは極秘事項に踏み込んでくるし、日本のマスコミは何故、自国の為でなく国連などに手を貸しているのか。また、何故、経歴を抹消したのかを聞いてきた。
統一中華のマスコミは梅麗との関係をしつこく聞く。

いい加減、対応するのに辟易してきた。

俺はニューヨークから箱舟に帰り、ジェガンとギラドーガのバリエーションを増やす作業を梅麗と共に行った。

先ず始めに行ったのはUCとCEの技術のすり合わせを行い、新たな兵器と兵装、MSの作成を行う作業だ。

正直、CEの技術には目を見張るモノが中々にしてある。

何せ、CEのMSは高性能バッテリーで動いているのだ。

正直、バッテリーであればどの機体を動かすなど俺達の世界では想像できないすごい技術だ。

ストライカーパックに代表される装備の即時換装技術による戦術や部隊編成に合わせた兵装。

スラスター、バーニヤ技術、ヴォワチュール・リュミエールシステムなどの技術は80トン近い機体を重力下で高速飛行させることが出来るなど優れている。

俺達の世界ではUC100年代を待たないと登場しないビームシールドなどの兵装やミラージュコロイド技術やそれを応用したゲシュマイデイツヒパンツァー等の技術は目を見張るモノがある。

更にCE世界のビームシールドは外の攻撃は受け止めるが中からの攻撃は素通りし、センサーなどの精密機器にも影響しない優れたものだ。欠点としては対ビームコーティングされた兵装は素通りさせてしまうことだ。

兎に角、これらの技術をすり合わせ、新しい概念の兵器を生み出していく事からスタートした。

こうして誕生したのが、装備換装型ジェガンと装備換装型ギラードガだ。

このジェガンはD型ジェガンのランドセル型スラスターを廃し、スラスターを内部に埋め込み、作戦や戦術、部隊編成に応じて兵装の装備する形で作られたジェガンだ。

今までのUC世界でのMSでもそういった機能はあるもののあくまで外付けであり、即時換装や即時装備が出来ない欠点があった。

そこで外付けによる即時兵装の換装により、柔軟なMSの運用を目指した。

感じとしてはD型ジェガンに背部はストライクに近く、フロントスカートとリアスカートをくつつけて、ビームサーベルをサイドスカーートのギヤミック式からサイドスカート上部に装備する形になった。

ギラードガの場合は肩のアーマーをCE世界のザクファントムのようなフレキシブルアームによりマニピレーターを使わずに防御できるようにしたのが特徴だ。

その中に各国が使っている接近戦兵装を装備できるようにした。何故、そんな変更したかと言えば、国連軍欧州戦線からの強い要望があったからだ。

東西ドイツ仕様はビームホークとファルックスビームアックスの何れかを装備。

フランス仕様はフォルケイトソードを小型化、シールド内に収まるようにし、刃の部分にビーム発生デバイス搭載型にした。

イギリス仕様はテンペストビームソードを搭載した。

それと背部はCE世界のザクに似ている。

また、両機共、高軌道型でなくても長時間の飛行が可能な様にミノフスキーフライとセンサー系統にもレーザー級を瞬時に判別し、レーザー照射の瞬間の熱量を感知し、オート回避を行う機能が搭載された。

コックピット周りはアームレイカーは余り衛士から受けが良くなく全体の80%以上がスティック型に変更してくれと言う要望が出た為、縦スティック型に

バリエーションとしては……

高機動型、

狙撃型、

支援砲撃型、

早期警戒型、

とこんなものか……

ジェガンの場合は、

高機動型はスタークジェガンのランドセルみたいな形となった。テールバーニャもその上下稼動式を採用したものだ。

CE世界でのインパルスと同等のスラスタ―出力が出る為、インパルス並みの上空での高速機動が可能だ。

狙撃型はその名の通り、バグパックに狙撃用高性能照準機とビームスナイパーライフルが装備されている。

支援砲撃型は背中のランドセルに高性能スラスタ―とキャノンが2門搭載されている。

ビームタイプのキャノンとレールガンタイプのキャノンだ。

それと用途に応じてビームライフルやバズーカ、ビームバズーカ、ビームガトリング砲が装備される。

肩にはスタークジェガンやジム？のミサイルランチャーコンテナを

装備できるようになった。

早期警戒型はバックパックが大型のレドームと高性能スラスターが搭載された形だ。

これにより、戦場でのベータの進行状況やレーザー級の位置、反応路の場所など即座に現場の部隊に配信できる。

香月博士じゃないが情報戦は重要だ。

ギラードガの場合は、

高機動型はブレイズウィザードのスラスターをインパルス並みに改良し、機動性を確保した物を装備された。

狙撃型はガナーウィザードのタンク部分を狙撃用センサーに変更した。

支援砲撃型はスラッシュウィザードのガトリングの部分をビームキヤノンに変更し、兵装として、ギランチャードR1マルチプレックスとラインメタルMk-57をビーム使用に改造したラインメタルMk-57-2を装備。

早期警戒型はジェガンと同じで、バックパックが大型のレドームと高性能スラスターが搭載された形だ。

俺達は新型ジェガンと新型ギラードガそして、各種、換装兵装をくみ上げ、実機テストを行う事にした。

『それじゃあ、テストを開始するね〜レイジ〜』

俺はジェガンのコックピット内に響く梅麗の声を聞きながら静かに閉じていた瞳を開く。

「ああ、始めるぞ。レイジ・タカツキ、ジェガン！ 出る！！」

俺は操縦桿を全開に前に押し込んだ。

ジェガンは勢い良く前に突き進む。

俺は操縦桿を操作しながら考える。

（反応は悪くない……機体のセンサーも正確だ……）

旋回速度、機動性、回避運動、一般の衛士が使つのなら問題ない。

俺は梅麗に通信を繋げる。

「梅麗、次は兵装のテストを行う」

梅麗もそれを聞き、納得できるモノだと判断した。

『解ったよ。それじゃ、次の工程に移るね』

そついい梅麗は手元の端末を操作した。

その時、何も無かつた海面から標的が出現する。

そして、梅麗は支持を出した。

『それじゃ、指定したルートを通りながらターゲットの全機の破壊を行つて。制限時間は5分。良い？ いける？』

俺はそれを聞き、ニヤリと笑う。

「ああ、それだけ時間があれば上等！ それじゃ始めてくれ」

梅麗は手元のコンソールを操作しながら言う。

『開始、5秒前……3、2、1、開始！』

その言葉を聞いた瞬間、俺はフルストロールでジェガンを動かしていく。

操縦桿を操作しながらジェガンをルート通りに突き進む。

そして、第一のターゲットを視認し、右操縦桿の人差し指を動かす。ビームはターゲットの正確に真ん中を撃ち抜いた。

先ず、一つ！

俺はジェガンを指定したルートを通りながらターゲットを撃ち抜き、ある時は、ビームサーベルで切り裂き、また、ある時はバルカンで撃破していく。

「よし！ 到着！！ タイムは！？」

俺はそう叫びながら梅麗に通信を繋げる。

梅麗は驚いたやら呆れたやらの顔をしながら言う。

『ジャスト3分……相変わらずだね……それじゃあ換装兵装のテストに移るね』

「了解」

俺は簡素に答え、帰還した。

次に高機動型のテストを行う事にした。

しかし、ここで問題が出た。

確かに機動性や旋回速度、回避運動は俺達にしたらちよつと物足りない位だが一般の衛士が扱うには手に余るモノだと解った。

そこで俺達はスラスターに30%のリミッターをつける事にした。

これにより機動性は落ちるが一般の衛士が扱えるまでに落ち着いた。

次に狙撃型でも問題が出る。

確かに長距離での狙撃では最高の性能だが、乱戦が予想されるベータとの戦闘でそこまで長距離の砲撃が必要か？ と言う疑問が出てきた。

そこでビームスナイパーライフルのバレルを短くした。

最終的にはジムスナイパー？のスナイパーライフルクラスの銃身に落ち着いた。

これにより乱戦での取り回しを確保しながらも精密狙撃が可能になった。

支援砲撃型での問題は実体弾兵装が多い為、弾切れになれば役立たずになる。

そこで、ビームライフルを標準装備することにした。これで最低限の装備を確保することにした。

早期警戒型は不意の遭遇戦が予想される。そこで此方も最低限の兵装を持たせることにした。

次にギラドーガだが、ここでもジェガンと同じ事が上げられた。

俺達は欧州戦線の戦場や戦局、部隊状況やハイヴ攻略戦を参考に最適化していく。

次にベータ及びハイヴ戦闘に機体が耐えられるかの実戦テストを開始した。

俺達が試験場として選んだハイヴはウランバートハイヴを選択した。

俺達はウランバートルハイヴに進行する為に、ラーカイルム改に必要な物資を詰め込み、出撃した。

このラーカイルム改はラーカイルムを母体に装甲をラミネート装甲に変更し、二連装メガ粒子砲を三連装に交換、ミサイルランチャー格納庫を増築、底部対空機関砲も増強した。

それに乗り込み、作戦空域まで向かう。

操舵、通信はハロがしてくれる。

整備、補給、機体の生成もハロに手伝ってもらっている。

箱舟の家畜の世話や野菜の収穫もハロがしてくれる。

今の所、MSには乗せられないが大抵の事はハロがやってくれる。

ハロ便利だな……

モンゴル上空に到着した俺達は先ず、レーザー級の射程外からジェガンを発進させた。

二機のジェガンは戦場を舞う。

勿論、パイロットは俺と梅麗だ。

兵装は先ず、通常装備で行う。

「梅麗、ガンダムとは違う！ 侮るな！！」

俺の通信に梅麗は答える。

『了解！ 引き締めていくね！』

ジェガンは戦場に到着した瞬間、レーザー級の激しい歓迎を受けた。

「当たるかよ！！」

俺はシールドをコックピット付近もっていく。

頼むぞ……起動してくれ……

そう思った瞬間、ジェガンはオートで回避行動をした。

よし！！ 成功だ！！

俺は操縦桿を動かしながらジェガンのテストを行っていく。

結果としてはテストはジェガン、ギラドーガと共に成功した。

そして、これ等最新機をジェガン実戦配備型とギラドーガ実戦配備型として発表したのだった。

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 6話

俺は今、南アフリカにいた。

この南アフリカで新型ジェガンとギラードガの生産を行っていた。

何故、南アフリカにラグナロク機関の工場があるかと言えば理由は様々だ。

このアフリカ大陸はベータの進行はほとんど無く、豊富な資源が多く眠っている。

また、この南アフリカは多くの国家や企業が工場や企業を進出させていて、物資搬入、搬送の大きな港を完備している。

豊富な労働力を安い賃金で雇える事もあり、多くの戦術機関開発企業が多くその工場を抱えている場所である。

俺は工場長を見かけると、工場長に現在の進捗状況を質問した。

日本人の中年で気難しそうな顔をしたツナギ姿の男が横目で俺を見た。

「工場長、現在のジェガン及びギラードガの進捗状況はどうですか？」

工場長は作業を部下に任せ、俺の方に向き、進捗状況を報告した。

「今の所は機体開発部は納品の5割が完成、このペースで行けば1週間と言った所だ。材質管理部では材料の調達に時間が掛かっている。正直、ベータ大戦で何処も資源確保に奔走しているから……だが、完成には間に合わせる積もりだ。OS開発部は予定より早く完成した。戦術機での戦闘データをMSのOSに反映させる作業も完了した。兵装開発部はヨーロッパの兵装、特にフランスの接近戦兵装の改装に時間が掛かっているが後は完了している。これも期日までには間に合う」

それを聞き、俺は予想以上の速さで事が進んでいることに關心し、また、無茶な要求をしてそれに答えてくれる工場長達に感謝した。

「すまない。工場長、何時も無理な要求をする事になってしまったな……」

工場長は気さくに笑いながらかぶりを振る。

その顔には少しの疲れは見えているものの子供が新しい玩具で遊んでいるような純粋な笑顔だった。

「いってことよ。零細企業の我が社にこんな素晴らしい技術と資材を投入してくれたんだ。それによ、新しい技術を弄れる！ コイツは技術屋にとって最高の仕事だぜ！ コッチが感謝したいくらいよ！」

この工場長、日本の町工場から俺が拾い上げて起用した経緯がある。どうやら何処の世界でも日本の町工場は世界一の水準を持っている。

こうして、新たなジェガンとギラドーガはロールアウトしようとしていた。

その頃、梅麗は台湾にいた……

梅麗サイド……

私は台湾の台北、国連台湾支部の会議室にいた。

会議室には国連加盟国の軍開発局や兵器メーカーのお偉いさんを集めての新型ジェガンとギラドーガのプレゼンを行っていた。

「この様に、戦術や部隊編成、戦局に応じた兵装の即時換装を行う事により、より幅広い戦術形成が行うことが出来ます。以上で私のプレゼンを終了いたします。ご質問が御座います方は挙手にてお願いいたします」

その言葉にいち早く反応し手を上げたのは西ドイツ軍大佐のクラウド・ハルトウィックだ。

私はハルトウィックに発言の機会を与えた。

「Mr. ハルトウィックどうぞ」

ハルトウィックは此方を探る目で私を見ながら質問した。

「M S・ウン、発言の機会をいただき有難う御座います。私の質問といたしましては、何故、ジェガンとギラドーガと言う2つの違う設計思想で分けたのですか？」

私は、ハルトウィックの質問に淀みなく答えていく。

「その理由はアメリカ及び日本、ヨーロッパ及びソ連では戦闘や戦術のスタイルが違うからに他なりません。基本的に日本やアメリカのハイヴ攻略は海上からの強襲上陸及び、高速機動による即時展開が挙げられます。その為、部隊との連携は不可欠であると考え、高月が考案しました。そして、ヨーロッパ戦線はその領土を潰しながら戦う焦土戦。つまり、補給が続かない事を考慮して、拡張性の高い堅実な設計で量産性に優れ、稼働率の高さや使い勝手の良さで新兵でも扱える様、私はギラドーガを開発いたしました。勿論、スベツクの開きは御座いません」

ハルトウィックはそれを聞き、理解したらしく質問を終えた。

次に挙手をしたのは、巖谷 榮二帝國陸軍中佐だった。

私は巖谷に発言の機会を与える。

「Mr・イワヤ、質問をどうぞ」

巖谷はスツと立ち上がり質問した。

「有難う御座います。M S・レール砲やバズーカ等の大火力兵装をM Sに持たせたのはM Sでのハイヴ攻略戦を想定したモノでしょうか？」

巖谷の質問に私を答える。

「ええ、それは勿論の事、反応路を素早くかつ確実に長距離からの破壊を目的とした兵装をプロデュースいたしました。また、降下ポッドは衛士の安全性を考慮し、臨界半透膜処理を施し、強制冷却システムつける事によりレーザー級からの迎撃を少なくすることが出来ます。これにより、より、効率的なハイヴ内での戦闘と破壊が可能です」

などなど、各国のお偉いさんは私に質問していく。

お偉いさんとの会合が終わり、私は南アフリカに向かった。

梅麗が南アフリカに来てから1週間が過ぎた。

どうにか新型のジェガンとギラドーガが完成、積み込みを開始した。

大型輸送艇に機体を詰め込み、アメリカ方面、ヨーロッパ方面、アジア方面の三隻を各国の国連軍に譲渡し、俺達の仕事は終わった。

巖谷サイド

私は日本に舞い戻り、ジェガンの開発と技術研究を開始した。

正直言うが、ここまで技術的差が大きいと萎えそうになる。

彼等はジェガンやギラードガの発展型を僅か半年で世に送り出してきたのだ。

我々が開発した不知火は開発してから10年が来ようとしている。それなのに、発生型が生成できない。

それはこの不知火が余分な開発マージンを残さず突き詰めた設計をしたからに他ならない。

しかし、彼等、ラグナロク機関の開発したMSなる機動兵器はどうだろうか？

圧倒的なエンジン出力、そのエンジン出力から生み出されるエネルギーを使ったビーム兵器、機動性、運動性、人間と変わらぬスムーズな稼動、そしてあの軽量でありながら強固な装甲……

どれをとっても不知火どころかラプターすら相手にならない。

それどころか、今回のプレゼンで彼等は半年で機体の発生型を開発してのけたのだ。

しかも、戦局や戦術に対応した兵装システムまであるオマケ付だ。

正直、我々どころか各国の技術者達の立場が全然無い。

私を含む、各国の技術者達はこう思っただろう。

『高が2人に国家が開発力で負けている』と……

しかし、落ち込んでばかりもいけない。

彼等の開発した技術を吸収し、X F J計画に生かさなければ……

今の所、スピノフできる技術はオプション式の頭部バルカン砲とムーバブルフレームとチタン合金セラミック複合素材の生成は出来るようになった。

後は高周波振動発生装置の小型化にも成功、長刀と短刀にその技術が生かされている。

臨界半透膜処理も戦術機の92式戦術管制ユニットの装甲周りに施した。

正直、チタン合金セラミック複合素材のコストが高い為、92式戦術管制ユニットの装甲に採用するに留まっている。

武御雷には間接部のフレームと管制ユニットに採用されている。

兎に角、今の所の目標はビーム兵器の兵装使用だな。

私は報告書を纏めるべく机のパソコンに向かった。

俺達は箱舟に戻り、今後のスケジュールを考えていた。

「とりあえず、MSを含む機動兵器郡の開発は少し落ち着いた。正直、ここからだ、オリジナルハイヴが対策を考える前にこの撃破を考えなければならぬ……」

俺はコーヒーを飲みながら梅麗に言う。

「そうだね……いつその事、シャアがやった様な隕石落としとか、ジオンがやったコロニー落としとか出来たらいいのにね……」

と、とんでもない事をのたまいやがった……

「馬鹿か……？ どうやって、オリジナルハイヴを破砕する小惑星や建造物を確保するんだ？ それに、それらの問題をクリアしてまだ、オリジナルハイヴを破砕する質量のモノを落としてみる……成果もあるが被害も半端無い……」

俺は呆れながら呟いた。

コイツ……時々ブツ飛んでやがる……

今の話だけだと、イカレてるとしか思えない。

「いいか、梅麗、コロニーの質量は推定50億トンだ。それが空からおこちて来るんだぞ？

コロニー落しで広島型原爆の約300万発分だぞ？ オーストラリア大陸が16%消滅だぞ？

直撃後の地震がマグニチュード9.5の大地震だぞ？ 二次被害で23億人が死滅だぞ？ ドンだけヤバイか理解できるか？ 隕石落

しもオリジナルハイヴクラスを破壊となるとその二次被害が想像できないし、したくない！ G弾以上の被害を全世界に振りまく気が？」

コイツ解って言っているのか？

梅麗は冷や汗をかきながら呟く。

「……やっぱ止めよう。そこまでして勝ちたくない……」
解ればいい、解れば……

梅麗は木瓜牛？を啜りながらいい事思い付いたと言わんばかりの顔をする。

「じゃあ、コロニーレーザーやビッグキャノンで焼き払うのは？」

更に俺は呆れながら呟く。

「あのな……お前……いいか、ああいったモノは巨大建造物と相場は決まっている。唯でさえ俺等は監視の目があるのにそれを逃れて宇宙空間に馬鹿でかい建造物作ることが出来るかよ……物資搬入でバレルし、各国から止められるし、理由も無しに建造したら国連が非難されるし、了解を得る為にどれ程時間が掛かるか……」

まず、オルタネイティヴ計画の連中が俺達を叩く絶好の材料にしそうだ……

それを聞き、梅麗はブウ垂れる。

「……いい手だと思ったんだけどな」相手の攻撃射程外からの大出力砲撃……」

俺は梅麗の言葉に思い至る。

アウトレンジからの圧倒的な火力による敵拠点の破壊……

いいモノがあるじゃないか!!

H i - v ガンダムには!!

「あるぞ!! 梅麗!! H i - v には!! アウトレンジからの敵拠点攻撃オプションが!!」

その言葉に梅麗は驚く。

「あるの!? そんな物が!?!」

俺はその兵装の名を口にする。

「ああ、ハイパーメガバズーカランチャーがな!! それを大気圏外から最大出力でオリジナルハイヴのモニュメントにぶち込む!!」

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 7話

俺達は今、衛星軌道上にH i - vとジャステイスを待機させていた。

俺はH i - vのコックピットモニター越しに地球を見つめながら思
いふける。

（変わっていない……いや変わらない……何処の世界でも地球は青
くて綺麗だ……）

俺が始めて宇宙から地球を覗いたのはU C 0 0 9 3の2月だった。

今でも覚えている……

我が師、アムロ・レイに連れられて宇宙^{ソラ}に上がったのは丁度、シャ
ア・アズナブルを総帥とした新生ネオジオンが地球連邦政府に対し
宣戦を布告してきた時だった……

俺は18歳で地球連邦軍幼年士官学校を卒業、パイロットとして連
邦軍士官学校に上がる時だった。

その時、偶々、アムロ・レイとある事件で知り合い、彼の弟子にな
りパイロット候補生として、ロンドベルの部隊に配属される形と言

う異例の移動となった。

兎に角、そこで紆余曲折あり、実戦を潜り抜け、今に至る。と……

俺が物思いに耽っていると梅麗から通信が来た。

『見て!! 見て!! レイジ!! 地球だよ!! 地球!! うわ~~~~!! ホントに青くて丸~~~~い!! 綺麗~~~~!!』

と、浮かれた通信が入った。

そう言えば梅麗は宇宙^{ソラ}から地球を見るのは初めてか……

感動するのは良いがはしゃぎ過ぎだ。

俺はそう思い、梅麗をたしなめる。

「はしゃぎ過ぎだ。今は作戦行動中だぞ。気を引き締める」

そう言うと、梅麗は頬を膨らませ、ブウ垂れる。

『ブー! ブー! レイジ、淡白過ぎ! 地球だよ!! 丸いんだよ!! 青いんだよ!!』

俺は呆れながらいなす。

「あゝハイハイ……解ったから、作戦開始5分前だぞ? 気を引き締めてくれ」

そう言うと、梅麗は渋々了解してくれた。

『ハ~~~~~イ』

全く……遠足気分が抜けないヤツだ……

ま、でも仕方ないか……初めて宇宙^{ソラ}に上がったのなら頷ける。

しかも、梅麗の世界では宇宙^{ソラ}に上がる人間は宇宙飛行士ぐらいだからな……

でも、今は作戦行動中、気を緩めてもらっては困る。

俺はモニター越しに今回の任務の為に用意したモノを見る。

先ずはH i - vとジャスティスのコックピット周りだ。

超長距離照準機をコックピット内に装備した。

これにより、精密な狙撃と観測が可能になった。

そして、本日のメインウエポンにして、作戦の要、ハイパーメガバズーカランチャーだ。

コイツに外付けの高性能照準機と発射の為に莫大な電力を賄う為の大型核融合炉を持ち出した。

この大型核融合炉にケーブルを使ってハイメガバズーカランチャーの電力にする。

ジャスティスの場合は高性能観測用望遠レドームを携帯させている。

作戦開始まであと5秒……4、3、2、1、0！

作戦開始！！

俺はアームレイカーを動かし、ハイパーメガバズーカランチャーを構えた。

いや、これほどの大きさだ。構えると言うよりは担ぐと言った方が正しい。

俺は高性能照準機越しにオリジナルハイヴを見やる。

『高気圧、以前目標地域に停滞中！ 照準の誤差、0・15！！
重頭脳級までの距離を0・25ポイント修正、地球の大気温度の修正を確認！！ レイジ！ 機体が0・8ミリ流された！ 修正して
！！』

梅麗の主な任務は観測手として俺を補佐だ。

作戦前とは違い、切り替えて彼女は真面目に出来るからそこがいい。

「了解。修正に入る！ 梅麗！ スペースデブリと小規模な隕石の警戒を頼む！！ 石ころ一つで照準がブレる！！」

俺はそう指示しながらフットペダルとアームレイカーを微妙に操作

しながら姿勢の確保と狙撃のデータを頭で計算、補正を行う。

『了解！！ 機体姿勢保持は良好！ ハイパーメガバズーカランチ
ヤーの電力供給 85・25%！！ フルチャージまで 15秒！！』

俺はチャージまでの時間を待つ。

「チャージまで10秒!! 9、8、7、6、5、4、3、2、1、ハイーメガバズーカランチャーへのチャージ完了!! いつでも撃てるよ!!」

その言葉を聞き俺は右のアームレイカーの人差し指に力を込めた。

「いっけえええええええええええ！　ハイパーメガバズーカ
ンチャー！！！！！！！！」

俺の言葉と共にハイパーメガバズーカランチャーから信じられない位の野太いビームの柱が撃ち出された。

俺は機体姿勢を崩さない様にスラスターをふかす。

0コンマ1ミリでもズレたら数10キロずれる世界だ。
針の穴に糸を通す作業は続く。

1秒、ビームの柱はカシユガルハイヴのモニュメントに激突、カシユガルのモニュメントは一瞬で熔解する。

2秒、ビームの柱はドリフトとシャフトをぶち抜きながらそこにいたベータすらも焼き払い、地中に突き進んでいく。

3秒、オリジナルハイヴ、中央部に到達した。

4秒、重頭脳級がラザフォードフィールドを展開、ビームとラザフォード場が拮抗した。

『レイジ！！ 重頭脳級がラザフォード場を発生させたよ！！』

悲鳴にも似た梅麗の報告を聞きながら俺は狙撃に集中した。

徐々にラザフォード場に押されるビーム。

（糞！！ アッチの方が出力上かよ！！ こうなったら！！）

俺は左手で前のパネルを操作し、大型核融合炉の電力供給を操作し出力を上げる。

それだけでなく、銃身暴発覚悟で出力リミッターを解除した。

『レイジ！？ そんなことした核融合炉が持たないよ！？ それにハイパーメガバズーカランチャーの銃身も！！』

そんな事、解ってる！！

だが！！ ここ引くわけには行かない！！

すでに正射から20秒、冷却材がそろそろヤバイ……

ビームとラザフォード場との押し合いはビームがジリジリと押し込んでいる。

あと少し！！ と思った時だった。

コックピット内に警告音が鳴り響く！！

『冷却材の残量ゼロ！！ レイジ！！ このままじゃ！！』

いよいよ梅麗の報告も悲鳴に変わってきた。

俺は有りつ丈の思いを込めて叫んだ。

「いい加減貫かれる……………」

その時だった、オリジナルハイヴの広間の空間に満ちた粒子と熱で辺りが爆発した。

粒子が連鎖反応的に爆発を始め、モニュメントはが吹き飛び、その破片がカシユガルの大地に降り注いだ。

地表にいたベータはそれに叩き潰されていく。

下は正に地獄絵図に様変わりしていた。

俺はすぐさま電力供給をカットした。

ハイヴは！？

俺はスコープ越しにオリジナルハイヴを見た。

煙は徐々に晴れていく。

その時、梅麗が報告してきた。

『重頭脳級健在！！でも、被害は甚大』

糞！！ まだ生きてやがる！！

如何する！？

ハイパーメガバズーカランチャーのチャージまであと5分は掛かる。

たとえチャージが完了しても冷却材が無い。

予備の冷却材まで回しちまった。

こうなれば！！

俺は即座に梅麗に命令を下す。

「梅麗！！ 作戦を変更する！！ 今すぐ大気圏に突入！！ カシユガルのオリジナルハイヴの広間に乗り込む！！ 装備は破壊処理しろ！！ 大気圏突入シーケンスの起動を10秒で行え！！」

俺は素晴らしいながらキーボードを取り出し、大気圏突入シーケンスのプログラムを起動させる

『！？ り、了解！！』

梅麗も慌ててキーボードを取り出し、高速でタイピングしていく。

大気圏突入シーケンスのプログラムの起動を確認した俺は梅麗に通信を繋げる。

「梅麗!! まだか??」

梅麗は慌てて叫ぶ。

『待つて!! もう少し!! ……出来た!! いつでも良いよ!!』

俺はそれを聞き、叫んだ。

「よし!! 飛び込むぞ!!」

『了解!!』

H i - v のシールドのフィールドの出力を最大に降下する。

コックピットの色は大気圏の摩擦熱で赤く染め上がる。

暫くして、地表にいたレーザー級の生き残りがレーザー照射を開始した。

「コナクソ!!」

俺はそう叫びながらアームレイカーとフットペダルを全開にする。

コックピットの背景が赤から青に変わり、カシュガルの地表がその姿を現す。

俺達は迷わずモニュメントがあつた大穴に飛び込んだ。

暫く、突き進んでいると、虫食い状態の重頭脳級が見えた。

その時、無数の触手が俺達を襲う。

「その程度の攻撃で!!」

『私たちがやられるわけ!!』

俺と梅麗は叫びながら回避し、ビームサーベルとライフルで触手を落としていく。

「梅麗!! 撃て!!!!!!!!!!」

『解った!! 撃つぞ!!!!!!!!!!』

梅麗と俺は触手をやり過ごしながら持てる火力の有りつ丈を重頭脳級に叩き込む。

重頭脳級はビームを浴びてズタズタになっていく。

糞!! デカイから耐久性もある!!

「いい加減!! しつこいんだよ!! 落ちろつってんだろ!!」

重頭脳級は完全に沈黙した。

こうして、オリジナルハイヴ、あ号標的は陥落した……

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 8話

オリジナルハイヴの陥落で世界は大きく揺れた。

たった2機の機動兵器が陥落したのだ。

揺れないほうがどうかしている。

俺達は箱舟に帰り、暫く引き籠もっていた。

正直、俺達のガンダムのオーバーホールを行わなければならない。

オリジナルハイヴでの戦闘で、機体の限界稼動を超えた性能を引き出したのだ。

何がどうなるのか入念に問題点やOSの不具合、兵装への影響を調査し、これからの戦闘に活かさなければならぬ。

俺はH i - vのコックピットの中でキーボードを弄くりながら考え

る。

（あの現象……一体なんだ？ 確か、師匠がシャアとの戦いで行方不明になった時、アクシズの周りでも同じ事が起こった……アレがサイコフレームの共振なのだろうか……）

考えても解らない事を考えても解るはずが無い。

俺は思考を切り替え、整備を行っているハ口に声を掛けた。

「ハ口、オーバーホール完了までどれ位、掛かる？」

作業ロボットに乗ったハ口は作業をしながら言う。

「アト、5カゲツ！！ アト、5カゲツ！！」

そんなに掛かるのか……

「サンキューな、ハ口」

俺がそういつとハ口は作業しながら言う。

「キニスナナ！ キニスナナ！」

俺は休憩するために、リフトに乗り下まで降りる。

俺が居住区まで戻ると梅麗がソファに座りながらテレビを見ていた。

ポテチとコーラーが置いてある所を見ると大分前からいるようだ。

「あ、どう？ ソッチは？」

俺の気配に気づいたらしく、俺に機体状況を問いかけた。

「あと、5ヶ月は架かる。予備の部品や何やらは生産を行うから良いが、戦闘データの解析やら機体の不具合やらを調査するからそれ位かかるな……」

俺がそう言つと梅麗はヤッパリと言いたそうに言つ。

「ソッチも同じか……私も似たようなもんだよ……部品交換や装甲の張替え位ならそんなに時間は掛からないけど、戦闘での不具合や間接部の疲労が特に酷かったからそこからかな……」

俺は梅麗の隣に座りテレビを見た。

丁度、アメリカの午後のニュースが流れていた。

美人のキャスターが原稿を淀みなく読み上げていく。

『今回の国連軍独立特務任務MS開発設計機関、通称、ラグナロク機関のオリジナルハイヴでの作戦で世界に波紋が広がっています』

その言つとVTRが映し出された。

『今、私はニューヨークにある国連本部ビルの前に来ています！！
ご覧下さい！！ 正面エントランス前は各国の報道陣が詰めかけ
本部ビルエントランス前は非常に騒然としております！！』

確かにVTRのリポーターの言うように、ビルの前にはゴチャゴチャと報道陣が詰め掛けていた。

『今回、ラグナロク機関からのコメントや声明、レイテ元帥からの発表の予定はまだありません！ 国連安保理は、今回のラグナロク機関の独断作戦を大変遺憾であるとし、安保理での査問会を開くことを検討しているとのことですよ！！』

キャスターがリポーターに質問を投げかける。

『常任理事国の反応はどうでしょうか？』

その質問にリポーターは興奮気味に答える。

『ハイ！ 常任理事国はこれまでラグナロク機関が開発した新技術やMSなどの機動兵器郡の国際技術提供は大変望ましいとしながらも、それを実験する為に他国の領土に無断で作戦行動を取るのはいかなるものか？ という声がありながらも、彼らの作戦を黙認して来ました。しかし、ここに来て、非常任理事国からの常任理事国がラグナロク機関の技術を開放しろと言う強い突き上げと、統一中華の許可無く衛星軌道上からの兵装実験などの問題もあり、常任理事国もようやく重い腰を上げたと言ったところです』

ヤレヤレ……結局、常任理事国や一部の持てる国が技術の開放を行わなかったか……

だが、問題は、常任理事国が今になって俺達の査問審査会を開くかだ……

もしかして…… 査問は建前で俺達の独立作戦行動の権利を返上させ、国連のいや、常任理事国の管理下に置く事が目的か？

梅麗はぼやくように言いながらテレビのリモコンでテレビを消す。

「ヤッパ、そうなるか…… オリジナルハイヴが陥落したんだもんね」

俺は梅麗の言葉を聴きながらポテチをつまんで口の中に放り込んだ。薄塩味のポテチを噛み砕き、胃に流し込み落ち着いた所で俺の考えを述べた。

「ま、そんなモノは建前で中身は色んなモノが混じっているだろうな…… 安保理の非常任理事国としては常任理事国が独占していた俺達の技術を自分達のモノにしたいだろうし、常任理事国としては常任理事国が俺達を管理、運営したいんだろう。オルタネイティヴ計画側は自分達の計画の存在意義を賭けて俺達の技術をオルタネイティヴ計画の権限が及ぶ範囲に置いておきたい。と、色々な要因が絡み合い俺達の査問が開かれる。と……」

梅麗は呆れながら口を開く。

「その混じったドロドロとした怨念の中にある共通の思いは“戦後”か……」

俺はボヤキながら言う。

「ま、来るか如何か解らん出口の無い“戦後”とやらに巧妙がさしたんだ。誰だって“戦後”と言う名の明日を夢見てみたくなるだろうよ……」

ただ、問題なのは、妄想するのが一個人でなく国が妄想している所が問題だ……

正直、国が妄想しだしたら危険だよ。国は現実的思考で運営してもらわないと困る」

俺達があらかた話し終わるとレイテ元帥から通信が入った。

俺はその時、来るものが来たという思いでその通信を繋げた。

『さっしの良い君達なら、この通信の意図が理解できると思うから挨拶も前置きもしない。君達に査問会が開かれる』

俺はレイテ元帥の言葉に申し訳なさと悔しさを隠した声が印象に残った。

「ええ、予想はしていましたが、遅いと思った位です。で、査問の罪状は？」

俺の質問にレイテ元帥は答える。

『……各国での無断作戦行動及び、開発技術独占の疑いだ……すまない……私のミスだ。安保理がここまで強引な行動に出るとは予想できなかった……』

俺はため息を吐きながら言う。

「仕方ありませんまい……各国とて我々の技術が欲しいのでしょう。常任理事国とて我々を管理、運営したいと考えているのですから……それに軍隊は上からの命令には従わざるおえない訳です……誰も貴方のセイだとは攻めません。常任理事国から圧力もあつたのでしよう?」

俺達は今後の予定を話あつた。

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 9話

俺達は国連本部ビルの中を歩いていた。

俺達はマスコミを避ける為、車を地下駐車場に止め地下入り口から入る。

暫く、控え室で待っていた俺達に、いよいよ呼びが掛かった。

俺達は会場に到着する。

両扉を俺が両手で力強く押し上げる。

ガチャという音が会場に響き渡り、喧騒とした会場は忽ち静寂に包まれた。

俺と梅麗は静寂の中を悠然と、淀みなく堂々と歩いた。

俺達は用意された椅子に座り、その時を待つ。

暫く待っていると、議長席から木槌が叩かれる音が会場に響き渡る。

俺は静かに瞳を開いた。

「これより、国際連合安全保障理事会による臨時査問審査会を開催する」

俺は脚を組みながら聞く。

「まずは起訴状を読み上げる。国連軍独立特務任務MS開発設計機関、通称、ラグナロク機関による行き過ぎた独断専行及び、他国の領海、領土、領空侵犯、MSを含む機動兵器開発技術の独占の疑いが拳がつている」

（何処からその起訴状があがったか知りたいな）

俺はそんな事思いながら起訴状を聞いていた。

「まずはラグナロク機関最高総司令官であるレイジ・タカツキより弁明を行ってもらおう」

そう言われ、俺は静かに立ち上がり、壇上上がる。

俺の方を世界各国の代表が一斉に見つめた。

「我々、ラグナロク機関はその名が示す通り、独立特務任務の為に作戦行動が国連軍として許されています。確かに我々の行動に著しく領海、領土、領空の侵犯があった事を認め、作戦行動を行った国に対して、心からの謝罪を申し上げます。」

しかし、我々ラグナロク機関の創設目的は私と王が開発したMSを含む機動兵器郡を世界に対し公表を行い、このベータ大戦に人類全

体が勝利する足掛かりにすべく創設された組織である。しかし、常任理事国やその他の持てる国がこれら技術を独占、運用しているのである。我々は世界にこれら兵器郡を拡散させる事を望んだ。しかし、常任理事国の軍事企業が技術独占を目論み、我々を常任理事国管理下に置くこうとしている！！ 私はこの事から我が組織を常任理事国管理運営ではなく、国連の非常任理事国を含む国連安保理の管理下に置くことを我々は要求いたしたく、今回の査問会に参上いたしました」

俺の弁明が終わり、各国から質問を受ける形で俺と梅麗が答えている。

とりあえずの査問が終了した。

この査問会で決まった事は……

ラグナロク機関は作戦行動を行う時はその国の許可を取ること。

開発した技術は全て国連に公表すること。

ガンダムを含む、機動兵器郡のデータの公表。

国連の重要作戦の参加及び、重要作戦での独立行動権の返上。

が、言い渡された……

ここまで処遇が軽減されたのは非常任理事国に対する技術提供とジエガンやギラードガの優先配備をちらつかせ交渉したからだ。

常任理事国としては独占したかったのだろうが、俺達がそうさせない為に根回しを行った。

ちなみに箱舟の存在はレイテ元帥と俺達が何とか隠し通した。

この査問で俺達のガンダムが公開された。

しかし、世界はこの技術を見たとき戦術機開発企業の技術陣ですら理解できない所が多々出てきた。

ガンダリウム合金？ VPS装甲？ サイコミュ？ サイコフレーム？ ビームシールド？ エフィールド？

何だそれは！？ が連発したのだ。

最早理解できない技術群の塊だ。

先ず、各国はどういう経緯でガンダムが開発されたのか理解する所から始まった。

そして、ガンダムが如何言ったモノかを理解した。

ガンダムの名を冠する機体郡は特徴がある事が理解できた。
その特徴は……

その時代の最先端、最高技術の粋を凝らした機体郡である事、
試作機、先行量産機、エースパイロット専用機など、一品物である事、

双眼式サブカメラ、額のV字型ブレードアンテナや顎部分、独特の口などがある事、
などが挙げられ、ラグナロク機関の象徴的な機体である事を世界が認識した。

そしてガンダムの名の由来も理解する。

先ず、Hi-vガンダムの場合は、

General purpose Utility Non-Di
scornitivity Augmentation Maneu
vering weapon system、
日本語に略すと全領域汎用連続増強機動兵器、GUNDAM systemとなる。

インフィニットジャスティスガンダムの場合は、

Generation Unsubdued Nuclear D
rive Assault Module
Comp

l e x

日本語に略すと核駆動を使った世代の強襲モジュール兵装複合体、
GUNDAM ————— C o m p l e x となる。

そこら辺を理解して次は兵装の説明を行い、ありとあらゆる説明を行ったが、結局、各国が理解できた事は、途方もなく最先端の技術を詰め込んだ化け物機体で、通常の衛士が扱える代物ではなく、1機でラプターが大量生産できると言う事くらいだった。

夕呼サイド

私はラグナロク機関が公表したガンダムの書類を見ながら辟易していた。

「何よコレ……無茶苦茶じゃない……」

何処の世界に1機辺りの単価が武御雷が大量生産できるコスト掛ける組織があんのよ……

幾ら試験機や象徴機であってもここまでコストが掛かるのも異常だわ……

それにこの兵装の贅沢さ……

通常のMSのビーム兵器の出力を軽く超えてるわよ……

それに、高月の旗艦、ラーカイラム……宇宙、地球の両方で運用が可能な高速機動戦艦？

もう無茶苦茶ね……

それにサイコフレーム？

パイロットの知覚や思惟を介した相互情報伝達システム？

敵の脳波をサイココミュで強化し受信するシステム？

コンピューター・チップを、金属粒子レベルのサイズ？

私を馬鹿にしてるの！？ ふざけんじゃないわよ！！

コイツ等、私より効率的でとんでもない技術をサラッと戦術機サイズに収めんじゃないわよ！！

まあ、良いわ……コイツ等の技術をスピノフしてやるんだから！！

アメリカでは……

ボーニング社会議室ではラグナロク機関が開発した技術郡の検討が行われていた。

「コレは……とんでもないな……コレ1機でラプターが大量生産？
正気かね？ ラグナロク機関は？」

ボーニング社の重役の一人が口を開いた。
その言葉に侮蔑的なものが混じっている。

「フン、所詮は軍人の考えたこと、コストのことなど考えてもいないよ。高が実験機や象徴機にこれほどの予算をつぎ込むなどナンセンスだ」

また一人の重役も馬鹿にしたように口を開いた。

「だが、これほどの技術、正直、ナンセンスと切り捨てるには余りに早計だ。コレだけの技術ならこれほどの金をつぎ込んででも釣ってくる」

開発部の重役がそう口を開く。

「我々は企業、つまりは利益追求集団だ。投資とそこから得られる利益に差がありすぎると言っている。こんな物作ったら我が社が破綻してしまう」

その言葉に開発部は自嘲気味に言う。

「開発も生産もできませんよ。こんなオーバーテクノロジー。現在じゃガンダムを開発できるのはラグナロク機関だけだ」

その時、一人の重役が口を開いた。

「政府からガンダムとまともな戦闘を行える戦術機を要求されてい

る。資金も政府が大半を出すそうだ。今の所ガンダムとラプターとのキルレシオは1対100と冗談みたいな状況だ。MSのでさえ1対10と言うキルレシオが叩き出されている。正直、彼らの開発能力はマトモじゃない。これからアメリカは戦後を睨んで行動していく。その中でガンダムとラグナロク機関は大いなる脅威だ」

会議はMSとマトモな戦闘ができる戦術機の開発を行う事で同意した。

俺と梅麗は国連本部ビルに来ていた。

その一角にある、レイテ元帥のオフィスで元帥からある作戦に参加するようにとの要請を受けた。

「朝鮮半島ですか……？」

俺の言葉にレイテ元帥は頷いた。

「ああ、朝鮮半島にて我が国連軍と大東亜連合軍の撤退支援作戦に参加してもらいたい」

レイテ元帥がそういうと俺は質問を投げかけた。

「大陸の戦局はそこまで旗色が悪い……と……？」

俺の言葉にレイテ元帥は頷いて肯定した。

「ああ、今の大陸は我々国連軍及び大東亜連合軍が押し止めてはいるが防衛線が瓦解するのは時間の問題となりつつある。日本帝國も参戦を決定したが正直、焼け石に水だろう」

梅麗は自分の疑問を口にした。

「私達が開発したMSはちゃんと運用されてるのですか？」

レイテ元帥はため息を吐きながら言う。

「今の所、前線に参加した報告は受けていない。コレは私の私見だが、大東亜連合諸国は戦後を睨み、自軍のMSを温存したいのだから。あえて負け戦の撤退戦に投入はしないと思う。」

加えて、君達ラグナロク機関への戦闘参加の打診だ。撤退までの時間稼ぎを君達にさせる意図が見え見えだ」

俺はその作戦参加要請を受ける事にした。

「……ようは前線を押し上げ、撤退を支援すると言うのが今回の作戦趣旨……なら、ベータの殲滅。それしかない。ハッキリ言って前線を守つては数の少ない俺達がジリ貧、前線を維持或いは押し上げるしかない……という事か……」

梅麗は呆れながら呟く。

「結局、ガンダムの性能による力押しか……でも、ま、解り易くて良いわ。それに、正直、他の部隊には悪いけど足手まといですもの」

レイテ元帥は疑問を呟く。

「最終的にはそうなるか……だが、殲滅戦を行うにしてもホネだと思ふが？」

俺はその疑問にニヤリとしながら答える。

「試したい兵装があるのですよ」

俺の言葉に梅麗が反応する。

「ビームバズーカ？ でもアレはハイヴや拠点攻撃オプションじゃなかったけ？ 高速で動きまわりながらの機動戦には向かないと思うけど……」

俺は梅麗の言葉に反論する。

「改良して拡散ビームも撃てる様にすれば機動戦を行いながら広範囲での面の攻撃が行える。それに、梅麗、バズーカ、イコール拠点攻撃兵装と考えるのは思考が狭いぞ」

確か俺の記憶が正しかったなら師匠が一年戦争でバズーカ使いながら高速戦闘やってたし、グリプス戦役で機動力に劣る機体が機動力に勝る可変MS対策でバズーカの弾薬にベアリング詰めた奴を使っていた記憶がある。ロンドベルでもネオジオン残党のNT専用MS対策やファンネル対策で使っていた。

俺はそう考え、今回の兵装は大軍戦闘用兵装オプションを選択した。

俺達は箱舟に戻り、兵装の準備を行い、ラーカイラムに予備パーツや部品、弾薬やらを積み込んだ。

ラーカイルムを太平洋から日本海にコースを取りながら進行する。

光州作戦……ヲタの俺と梅麗の知識では、国連と大東亜連合が朝鮮半島撤退を支援する事を目的とした作戦……

光州作戦の悲劇が起こった戦場……

俺は考える。

元いた世界、UCの世界の事を……

膨れ上がった人口、排民政策とも言われるスペースコロニーへの人類移住、ラプラス事件、一年戦争、デラーズ紛争、グリプス戦役、ベズンの反乱、第一次、第二次ネオジオン抗争……宇宙世紀という時代が起こり94年……

人々は地球を食い潰し、宇宙に捌け口を求めてきた……

地球連邦は膨張、肥大化し、地球から宇宙を支配するようになった

……

俺はその尖兵だったのだが……

何処の世界でも一緒だ……

人は身勝手で愚かで、それでも暖かく、慈しみの心を持っている……

アムロ・レイはその事を一番理解していたんだと思う。

そして、人の愚かさや汚さを知りながらも愚直なまでに信じていた

のだろう……人の心の光や温かさや慈しみを……

だからこそ、あれほどの奇跡を……アクシズを押し返す奇跡を起こせたのだろう。

俺は……俺は、そこまで人の未来に希望を抱けない。

でも、それでも俺はその希望を諦められない。

俺の思考は梅麗の通信により妨げられた。

『レイジ、そろそろ作戦エリアだよ』

俺はその通信に軽く答えた。

「ああ、解っている」

『ならいいよ……それと、余計な事かもしれないけど、言うね。大丈夫だよ。人は、人類はそんなに弱くないから』

その言葉に俺は萎えそうな心が再び奮い立った。

「ああ、俺達はそれを証明する為に戦っている。止まらずいくぞ！」

『おっ！』

梅麗サイド

相変わらず眉間にしわ寄せて考えているレイジに語りかける。

正直、レイジは考えすぎる癖がある。

私には何を考えてるか何となく解る……

アレは多分U.C世界、自分の世界の事を考えていたんだと思う。

時たま、レイジは辛そうな顔をする時は大抵がU.C世界を考えている時だ。

無理もないか……レイジ、人間同士の戦争してたもんね……

平和に生きてた私には理解できない領域……

それでも、私はレイジと一緒にいたい……

だからあんな顔して欲しくない……

だから私が頑張る。

レイジの記憶が楽しい事で一杯になるように……

でも、何で私、こんな事してるんだらう……

……ああ、そうか……

今まで疑問だったけど、私……

……レイジのことが……

……好きなんだ……

レイジと過ごす時間が、レイジと一緒にいる時間が、レイジの仕草が、レイジの思いが、レイジの優しさが……

たまらなく好きなんだ……

如何しよう……何だかドキドキしてきた……

何か中学生の初恋みたいな感情抱いてるけど……

まだ、自分の中にこんな純粋な感情がまだある事がどうしようもなく嬉しい……

さて、レイジとの楽しい未来の為に戦いますかー!!

俺達は日本海沿岸にラーカイルムを停泊させ、MSでの上陸を開始した。

なぜ、ラーカイルムを戦線に参加させず沖合いに停泊させたかと言えば、艦を動かせる人員が確保できなかったからだ。

未だに八口に頼った状況だ……

人員補充の要請はしたが結局、補充がこなかった。理由は様々で例を挙げるなら俺達の眼鏡に適った人材が得られなかった事と各国が俺達に出し渋りをした為だ。

まあ、国連軍自体が各国に依存した軍隊である上、各国も自分の所でも衛士が不足している状態だ。

俺達が求めるエースクラスの衛士をポンと出す訳がない。

兎に角、俺達は前線を押し上げることにした。

綾峰サイド

此の俣では前線が瓦解する。

今の所、予備の部隊も回して前線を維持してはいるが、前線が瓦解するのは時間の問題か……

しかし、前線をこれ以上下げれば避難民と救助を行う将兵の命が無
い……

国連軍は撤退命令をだした。

冷静に判断すれば、指揮官として判断するならここで前線を下げるのは当たり前だろう。

今、前線で戦っている衛士達も命懸けなのだ。

しかし、私達の後ろには無辜の民衆がいる。

ここで下がれば彼らを見殺しにしてしまう。

私は……それだけは出来ない！！

力無き人々を守る為に、罪無き人々を、日本帝國を守る為に私は軍人になった！！

私は折れそうな心を奮い立たせ、命令を下した。

「全軍！！ここは何としても死守だ！！我等の後ろには多くの力無き民衆がいる！！ここで下がるは帝國軍人の恥と心得よ！！」

私が命令を下した時、ベータ郡が撤退する国連軍の方向に向いた。

不味い！！ 此の俛では、後ろからベータに国連軍が叩かれる！！
私は頭の中で最悪のシナリオを予想した。

その時だった……

高速で近づく飛行物体がレーダーに感知されたのは……

「2つの熱源飛翔体、接近！！ コレは！？ 速い！？」

司令部のオペレーターは驚きながらも報告してくる。

「何だ！？ 一体何が……！？」

私が疑問を口にする前にオペレーターが叫んだ。

「望遠カメラの映像、出ます……！」

オペレーターがそう叫びながら手元のコンソールを操作する。

モニターに映し出されたモノを見て私は驚き、搾り出す様にその2機の名を口にする。

「ガン……ダム……」

間に合った！！

辛うじてだが前線は持っている。

「梅麗！！ 前線を押し上げるぞ！！ お前は大東亜連合軍の前線
を押し上げる！！ 俺は国連軍に転進したベータ郡の排除に回る！
！」

『了解！！』

通信で梅麗は答えながらジャスティスを方向転換させ加速させた。

俺も機体を戦場に向ける。

H i - v をベータ郡と国連軍の間に割って入る。

右マニピレータにはオリジナルハイヴを叩いた時にデータを収集
しそこから新たにH i - v 専用の大出力ビームライフルを設計した。

外見はH i - v のビームライフルに似ているが、火力、射程距離、
破壊力はハイパーメガビームライフルより此方が上だ。

フィンファンネルも改造してある。

ハイヴの反応路を確実に沈める為に大出力ビームを撃てる様にし、
それに伴う電力消費を賄う為、梅麗の知識にある。S E E D 世界の

パワーエクステンダーと言う大容量バッテリーパックをファンネルに搭載できる程小型化に成功、それをフィンファンネルに積んでる。そして、左マニピレータにはビームバズーカを担いでいた。

このビームバズーカは集束ビームモードと拡散ビームモードの切り替えが可能だ。

「おおっと！！　ここは通行止めだ！！」

俺は両方の兵装を撃ち込んでいく。

ビームバズーカの砲口から桃色のビームのシャワーが吐き出される。

右のビームライフルの銃口からも野太い桃色のビームが撃ち出される。

桃色のシャワーはベータの大群に満遍なく当たり、ベータ郡をズタにした。

ビームライフルのビームはベータ郡を縦に貫き、大群は樹海のように割れた。

俺は次々に敵を沈めていく。

梅麗サイド

私は前線を押し上げるべく右マニピレータにビームライフルを左マニピレータにはビームバズーカを担いでいた。

さて……撃つぞ!!

私はハイパーフォルティス ビーム砲を展開し、ビームライフルとビームバズーカを構える。

そして、私はコックピットの中にあるマルチロックオンシステムを起動させる。

半球型のマルチロックオンシステム対応球体型立体表示パネルがせり上がる。

その瞬間、数えるのも馬鹿らしい位の無数の光点にロックオンされる。

ロックオンの数、ざっと40以上。

そして、私は両方の人差し指を同時に引いた。

その瞬間、緑のビームと桃色のビームがフルオートで吐き出された。

「……中距離戦での高速機動戦がジャスティスの売りなのに……特にインフィニットジャスティスは格闘武装を搭載、接近戦時における戦術バリエーションの拡大を図っている機体なのに……まさか、砲戦する羽目になるとはね……あゝあ、新兵装……試したかったな……」

私は一人愚痴りながら時に、レーザー級のレーザーを回避しながら

ビームを撃ち込んでいく。

ジャステイスの改良はビームサーベルの最大出力の向上とビームライフルの銃口にビーム刃を形成するビームバヨネットとしても使用が可能な様に改良したただけだな

は……仕方ない……今回は砲撃戦に徹するか……

俺達は何とか前線を押し上げる事に成功したが、負け戦なのは変わりが無い。

朝鮮半島から人類は撤退、コレでまた、ベータの支配地域が拡大した。

此の份では不味い……幾らオリジナルハイヴを叩いてもこれじゃ意味が無い。

各国の前線へのMSの出し渋りや人員の問題……

どうにかしなければ……俺達が動くにしても2人だけでは行動が限られてくる……

何としてでも、各国の目を掻い潜り、人員を集めなければ……

最低でも俺達の自由に出来る小隊は欲しい……

そして、多くのMSを世界に提供する必要が出てきた……

この思いは日に日に俺達の心の中で強くなっていた。

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 10話（後書き）

光州作戦の悲劇は何とか避けられたけど……

戦闘描写が微妙です……

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 11話

1998年の夏、この時、俺達は忘れていた。

日本にベータが上陸することを……

思い出した時には遅く、1998年の春だった。

俺達は、レイテ元帥を通じて、日本帝国政府に対し、ベータ上陸の危険性を伝えた。

しかし、日本帝国政府の反応は余り、真剣では無かった。

そして、1998年、夏……重慶ハイヴから東進してきたベータ郡が北九州に上陸した。

俺達は日本政府に対し、防衛の為に俺達を派遣するように愚進したが、日本政府との同盟関係にあったアメリカ合衆国が難色を示した為、日本政府は俺達の戦線参加を拒否した。

これにより、俺達の戦線参加交渉はかなり難しくなった。

そして……九州、中国、四国エリアが陥落した。

その死者、行方不明者は3600万人に上った。

これは、確認できるだけであり、実質はコレよりも多いだろう。

この時、首都京都が陥落、東京に首都を遷都、アメリカは一方的に日本帝國とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約、通称、日米安保条約を一方的に破棄し、在日米軍は全軍の撤退を開始した。

コレにあわてた日本政府はここに至り、ようやく俺達の出撃と戦線参加を打診してきた。

アメリカの軍事力を当てにしていた日本は自国での防衛が難しくなった。

その為、俺達が戦線に参加した時には既に佐渡島が陥落、ベータが横浜に迫っていた。

俺達は上空から横浜に侵入するべく進撃を開始した。

俺はレイテ元帥に衛星経由での通信を行う。

「レイテ元帥、関東エリアには避難勧告は出ていますか？」

俺の質問にレイテ元帥は悲痛な顔をした。

『西関東が制圧された。白陵基地は陥落した』

もうそこまで状況が最悪なのか!?

『ベータ郡はその後、首都直前にして伊豆半島を南下した。避難勧告も御座なりだ。司令部も混乱の極みとの報告もある。現在は多摩川を挟んで膠着状態が続いている。多分、お決まりの24時間の間引き作戦を展開するだろう』

梅麗はため息を吐きながら通信に割り込む。

『日本政府の当ても外れましたね……米軍が一方的に条約を破棄するとは思いません、まさかホントにするとは思わなかったでしょうね。ま、何処の国も我が身が可愛いと……』

梅麗の通信にレイテ元帥も渋い顔をした。

『日本政府にも考えはあるだろうが、今回は当てが外れたな……兎に角、君達の任務は多摩川の膠着状態の埒を開けると横浜の救援だ。良いな?』

俺達はその任務にそれぞれ答える。

「了解」

『了解』

俺達が多摩川に到着したときには間引き作戦が行われていた。

夜の多摩川には黒煙と火花が多摩川の夜闇を照らしていた。

そこは正に地獄の鬼火の様な世界が広がる。

「コレは……中々の地獄だな……梅麗、切り込むぞ!」

『了解!』

俺達は地獄に舞い降りた。

狭霧サイド

今の所、彼奴等との戦闘は膠着状態が続いている。

終わりの見えない戦場、次々倒れていく戦友や部下。

疲弊しきっている……

今の所、回せる部隊はすべて回した。

何としてもここで食い止める!

その決意も鈍りそうになる……

しかし、私達の後ろには帝都がある。

殿下やその臣民たる日本帝国国民が……私達の後ろにいる！！

引くわけにはいかない！！

その時だった……レーザー級が一斉に空に向かってレーザー照射を始めたのは……

「な！？　なんだ！？」

私や部隊はレーザーが照射された方向を見たが何も無かった。

しかし、次の瞬間、桃色の光の柱と緑色の光の柱が一斉にベータの大群に降り注いだ。

まさか……

そう思った瞬間、急速に何かが接近してきた事を管制ユニットのレーザーが捉えた。

私はその正体は何なのか理解した。

レーザー級により駆逐された飛行能力を有する機動兵器を持ち、熱光学兵器を扱う部隊……

国連軍のラグナロク機関、ガンダムか。

しかし、アメリカは撤退したはずだ！！

なぜ、アメリカの隠れ蓑たる国連が我が国にいるのか？

私の中でそんな疑問が沸いた。

その時だった、ガンダムからオープン通信で通信が入った。

『此方、国連軍所属、ラグナロク機関だ。ココの現場指揮官はだれか？』

私は慌てて、通信に出た。

俺がオープン回線で呼びかけると眼鏡を掛けた男が通信に出た。

『私がここの現場指揮官、帝国本土防衛軍、狭霧 尚哉大尉だ。貴官は？』

俺は自分の名と階級を言う。

「私はラグナロク機関所属の高月 玲人大佐だ。日本政府の要請で貴官等と共同戦線を張る事になった」

狭霧は驚きの顔をしながら言う。

『まさか……ラグナロク機関の最高司令官自ら参陣するだ！？
しかも日本政府からの要請！？ 馬鹿な！？ アメリカは我々を見捨てたのだぞ！？ その飼い犬たる国連が今更何用だ！！ 忘れ物

でも取りに来たのか！？ ふざけるな！！」

やはり、アメリカの一方的な条約破棄でココまで言われるとはな……

「貴官等が如何思おうが勝手だ。我々は我々の任務の為に来ている。大尉、今は主義主張を語る時間では無い。ベータ叩く時だ。貴官等の気持ちは解らんでも無いが今は目の前の敵に集中しろ」

狭霧は悔しそうに歯を食いしばり呟いた。

『解っている……貴官に言われるまでも無い……』

俺はそれを聞き、H Qに連絡を繋げた。

「H Q、此方、国連軍ラグナロク機関所属、高月 玲人大佐だ。コレより我々ラグナロク機関は多摩川に進行したベータ郡との戦闘に入る。我々の撃ち漏らしを貴官等の部隊に掃討して貰いたい」

俺の通信に驚きを見せる司令部のH Q要員。

『H Q了解。世界最強の部隊の戦線参加を歓迎すると共に戦果を期待する』

俺はオペレーターの言葉に笑顔で答える。

「了解した。精強なる日本帝国軍との共同戦線、楽しみにしている」

俺がそういい通信を切り、今度は梅麗に通信を繋げる。

「梅麗！ 聞いての通りだ！ 戦線を押し上げるぞ！」

『了解!!』

俺達は戦闘を開始した。

俺達は戦闘を開始してから1時間が過ぎた。

「いい加減に多いな……フィンファンネル!」

俺はボヤキながらフィンファンネルを放出し、敵を蒸発させていく。

『ホント、ヤニなるよね〜っと!』

そういいながら梅麗はビームサーベルをアンビデクストラス・ハルバードモードにして突撃級を切り裂く。

狭霧サイド

何だ? あの強さは?

あの2機はたった3分で前線を押し上げたばかりか、数十万のベータ郡が全滅だと？

尋常じゃない！！

「アレが……世界最強の部隊の実力……」

彩峰中将、いや今は少将が言われた通りだ……

強い……

「何故だ！？ 何故貴様は日本人なのにその力や技術を日本の為に使わない！？」

私は叫んでいた。

叫ばずにはいられなかった。

もし、高月が国の為にその力を振るってくれれば……

この考えは私の傲慢であり、欺瞞だと言うことは解っていた……だが、私は悔しかった。

オリジナルハイヴすら打倒できる彼等の力に嫉妬していたのかもしれない……

そして、彼等は横浜の非難支援の為に横浜に向かった。

私達は彼等の撃ち漏らしを掃討しに掛かった。

??? サイド

糞！！

糞！！

くそ！！

クソ！！

死ねない！！

俺は、まだ！！

こんな所で死ねない！！

俺はあの世界で！！ 多くの仲間の犠牲の上に生きてるんだ！！

冥夜や！！

委員長や！！

彩峰や！！

美琴や！！

タマや！！

まりもちゃんや！！

伊隅大尉や！！

速瀬中尉や！！

涼宮中尉や！！

晴子や！！

A - 01の皆や！！

そして……純夏の！！

多くの犠牲の上に俺は生かされてるんだ！！

ここで俺が死んだら！！

全ての死んでいった人達が！！

俺達の為に笑って命を差し出した人達の意味が！！

無駄になっちまうだろうが！！！！！！

こんな訳も解らず！！ 何も出来ず！！ 唯、状況に翻弄されて！！

死んでたまるか！！

A - 01のヴァルキリーズのモットーを思い出せ！！

「死力を尽くして任務に当たれ！！ 生ある限り最善を尽くせ！！
決して犬死するな！！」

俺は叫んでいた。

折れそうな心を繋ぎ止める為に、

倒れそうな体を支える為に、

逃げたい思いを払う為に、

「戦術機があれば！！ こんな奴等に！！」

俺の愚痴は虚しく夜空に響く。

その時だった…… 兵士級の群れが押し寄せてきたのは……

ああ……俺もここまでか……

「皆……ゴメン……純夏……ゴメン……」

その時だった……

耳を劈く様な連射音が俺の鼓膜を振るわせた……

「な！？ 何だ！？ 何が！？」

俺は訳が解らなかった……

そして、辺りを見回すが戦術機の姿は無い。

「一体何が？」

俺がそう呟いた時、野太い桃色の柱が空から降り注ぐ。

降り注いだ場所を見回すと、そこには……

熱で溶かされた様に前方装甲を溶かされ、焼け焦げた突撃級の死骸、

3分の1が消滅した要撃級の死骸、

最早、炭しか原型を止めない無数の戦車級の死骸、

戦場ではお目に掛かれない光景だ……

小高い丘から見た光景は正にベータが地獄の業火に焼かれた惨状だけが目の前に広がる……

「あ……ああ……」

俺は上擦った様に口を開いた。

そして桃色の光を放った方向を見た。

その機体は空に浮かんでいた……

大きさは戦術機とほとんど変わらない。若干大きい位で、

機体色は白を基調とした紺に近い青のツートンカラー、

顔はどの戦術機にも無い顔立ちで頭部左右に砲門が1つずつに額に白色の4本の角……

目のカメラアイは2つで黄色く光っていた……

口元に当たる部分はへの字の排気口が3つに青い口……

肩の部分は戦術機よりも小型で肩にスラスタノズル……

足回りは戦術機よりも少し太めだ……

右手には戦術機が持つには大きな突撃砲……

左手には92式多目的追加装甲よりも直線的な追加装甲……

そして一番その存在感を表していたのは、背中の左右3枚の羽の様な6枚の放熱板。

その背中の後ろでは力強いスラスターが夜空を明るく染め上げていた。

スラスターの強い光の熱でその機体を確認することが出来る。

だからこそ余計にこの機体が戦術機でない事を印象付けていた。

それにレーザー級がいるのに戦場で空を飛び続けるなど自殺志願者のする事だが……

この機体からはそんな感じは受けない。

むしろ力強さや暖かさすら感じる……

「アレは……何だ!? あんなの記憶に無いぞ!!?」

それが俺、似て非なる世界に来た、白銀 武と『ガンダム』の初めての出会いだった……

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 11話（後書き）

タケルちゃんのガンダムは何がいいだろうか……

難しい……

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 12話

この出会いは必然なのか偶然なのかは俺にも解らない……

だが、俺達は出会った……

俺はコックピットの中でアイツは地獄の只中で……

俺はアイツを見下ろし、アイツは俺を見上げていた……

コレが俺と白銀 武との最初の出会いである。

俺は外部スピーカーで少年に呼びかけた。

「少年！！ 無事か！？」

俺の呼びかけに、18そこ等の少年はビビりながらも答えた。

『だ、大丈夫です……！！』

收音マイクが少年の声を拾い上げる。

俺はH i - vを柔らかく着地させるとビームライフルをリアスカー
トに装着させ、右マニピレータを少年の前に差し出した。

「来い！！ それともこんな地獄に長く居座りたいか？」

俺の呼びかけに少年は慌ててマニピレータに飛び乗る。

それを見た俺はアームレイカーを操作し、左手でコンソールを弄る。

正面の制御パネルが右に動き、コックピットハッチが開く。

開けた途端、日本の夏特有の暑さが頬を刺激した。

「乗れ！！」

俺の叫びと共に少年は飛び上がり、コックピットに入り込んだ。

俺はそれを確認するとハッチを閉め、機体を立たせた。

「少年、邪魔だ。悪いが後部に移動してくれ」

俺の言葉に少年は弾かれる様に驚き、イソイソとシートの後ろに移
動した。

「行くぞ！！ 掴っている！！」

俺はアームレイカーとフットペダルを操作し、機体を空へと押し上
げる。

「何だ？ この機体……ジャンプユニットフカしてるのに静かだ……それにこのモニター……CG？ 画像が荒い……管制ユニットは球体式？ それに何だ？ あの操縦桿？ 丸いぞ……一体……」

後ろでブツクサ五月蠅い奴だ……

独り言が駄々漏れた。

「五月蠅いぞ。独り言なら静かにしろ」

俺がそう言つと少年は黙り込んだ。

俺は梅麗に通信を繋げる。

「梅麗、生存者1名を発見、保護した。ソッチはどうだ？」

梅麗は目を伏せながら横に首を振った。

『私の方は生存者なし……此の俣長く搜索しても多分生存者を見つける事は出来ないわ……』

俺はココで決断をする。

「撤退する。これ以上、ココに留まることはベータとの戦闘を意味する。俺も民間人を乗せたまま戦闘はしたくない」

『了解』

俺達はラーカイルムまで戻り、彼を下ろした。

「お疲れ様、レイジ。その子が？」

梅麗の呼びかけに俺は答える。

「ああ、君もお疲れ様。そう、この子があの町の唯一の生き残りだ。事情聴取をした後、日本帝国政府に引き渡す」

そう言う少年は俺に慌てて質問してきた。

「あ、アンタ達は何者だ！？　そして、あの機体は何だ！？」

少年は何か焦っていた。

何に対して焦っているかは知らないが俺は取り合えず落ち着かせることにした。

「落ち着け、少年。ココで騒いでも君の為にもならない。座って話そう」

そう言う少年は何か声が喉まで出かかり、それを飲み込み、俺の提案を了承した。

「……解りました……」

俺は頷くと、軽く背中を叩き、彼に歩くよう諭した。

武サイド

訳が解らないまま俺は戦艦らしきモノに収容された。

機体から下ろされ、2人に前後を挟まれて歩いた。

到着した場所には金属の扉があり、前を歩く男が暗証番号を入力し、カードを翳した。

すると、ドアのロックが解除され扉が横にスライドした。

俺達はその部屋に入る。

その部屋は簡素だが、戦艦にしては広く、落ち着いた雰囲気の部屋だった。

応接用のテーブルとソファがあるという事は艦長室なのだろうか？

俺が疑問に思っていると男は俺に言う。

「座りたまえ。君も大分疲れただろう？ 梅麗、私はコーヒーを、君は何か飲むかね？」

男の言葉に俺は考えてしまった。

すると男はヤレヤレといった態度でいう。

「彼にもコーヒーを」

そう言うと、メイリーと呼ばれた女性はにこやかに答えた。

「はい」

本当にこの人達、軍人なのだろうか……

目の前に座る男からは軍人の感じを受けるが……
女性の方はその感じが薄い……

「さて、自己紹介でもしようか？ 正直、君を呼ぶのに少年では何かと不便だ。私の名前はレイジ・タカツキ。ご覧の通りの軍人だ。君の名前は？」

レイジ・タカツキと名乗った男は、フレンドリーに語りかけた。

「……白銀……武……です」

白銀……武……だと……

予想外の少年の名に俺は内心驚いていた。

気配を探るとトレーを持っていた梅麗も驚いている。

「白銀 武君だね？ 少し待っていてくれ。身元を確認する」

俺はそう言つと立ち上がり、執務用のデスクの前に移動する。

PCの電源を入れ、PCを起動させキーボードを暫く叩く。

「……これは……」

俺は呟く。

その呟きに白銀が反応した。

「如何したんですか？」

俺は白銀を呼ぶとPC画面を白銀に見せた。

画面を見た白銀のその顔は驚愕に包まれた。

「この意味が解るかね？ No Data……つまり、この世界にシロガネ・タケルという人間は存在しない……国連の戦死者リスト、死者、行方不明者リスト、更には世界の戸籍謄本たるworld copy of a person's family registerにいたるまで君のデータは存在しない……」

俺の言葉に白銀は食い付く。

「じゃあ……城内省や日本の戸籍はどうなんですか!？」

俺は溜息をつきながらキーボードを叩く。

「……日本国籍……該当者無し……城内省、戸籍管理部のPCにルート権限……該当データ……無し……残念ながら君は存在しない存在……言わばゴーストだ……」

俺の言葉を聴き、白銀はよろめきながら背中を壁にぶつけた。

「そんな……そんな!？」

俺は溜息を吐きながらいう。

「残念ながら事実だ……白銀 武君……時に現実とは残酷なモノだ……そして、このPCの画面にある画像が君が存在しないことを無慈悲にも証明している……」

白銀は叫びながら言う。

「そんな!？ そんな馬鹿なことが!？ 俺はここにいる!! コにいるんだ!! 白銀 武としてここにいる!! 皆の命の犠牲の上に俺は生きているんだ!! それを!! それをこんな形で否定されたくない!!」

俺は取り合えず、白銀の話を聞くことにした。

「君の身に何があった? そして、君は何をして、何を考え、何を成し、何を得て、何を失ったのか……話せ……少しくらいは気が楽になると思うが?」

白銀は下を俯きながら呟く。

「俺をスパイと疑わないのですか？」

俺は溜息を吐きながら言う。

「もし君がスパイならあんな所にはいないさ……あそこは最前線だ……スパイは後方で諜報活動を行うからこそ意味がある。それに、私達を嗅ぎ回るなら国連本部で嗅ぎ回る方が効率的だ」

白銀は尚も食い下がる。

「それでも、あの機体を探るよう送り込まれたのかも知れませんか？」

俺はそれを聞き、笑った。

白銀は不機嫌になる。

「少年、あの機体、MSはすでに世界に公表されている。データ全てだ」

それを聞き、白銀は驚く。

「あの機体ですか！？でもあの機体は正直言っただけだ！！あんなのが世界に公開されたら……」

俺は笑いながら言う。

「ああ、その事なんだが、世界に公表したは良いが、世界はそれを

再現できなかった。香月博士でさえ再現が不可能と言わしめた程の技術だ」

それを聞き、白銀が驚く。

「そんな！？ 夕呼先生が再現不可能！？ 一体アレは！？ それにアンタ達は一体！？」

俺はこれまでの経緯を彼に話した。

まあ、少し、改竄した所はある。

例えば箱舟は神様が作ったから俺達が作ったとかをだ……

白銀は随分と驚いていた。

そして、白銀も自分の身の上を語り始めた。

アンリミ、つまり一順目の記憶。

オルタ、つまり二順目の記憶。

「俺は光に包まれて元いた世界に帰るはずだった……でも……」

俺は補足する様に言う。

「この世界のあの場所に飛ばされていた……と……だが、解らんない……一順目と二順目の世界に君を呼んだのは“カガミ・スミカ”の思念ならこの世界に君を呼び寄せたのは何だ？」

俺の言葉に武も考え込んだ。

呼び寄せる要因が無いのだ……

G弾の重力異常と脳味噌のカガミ・スミカの強い思念が相乗効果で
合わさった訳でもない……

未だにG弾が日本で使われた形跡が無いのだ……

しかも、時期が変だ……白銀がこの世界に放り込まれるのは200
1年の10月22日の月曜日だったはず……

この3年のズレは何だ？

それに白銀の体だ……明らかに18、19の体つきだ。とても15、
16に見えない……

もしかしたら……コイツは俺の仮説だが……

シロガネ・タケルは俺や梅麗と同じ“唯一の存在”になってしまっ
たんじゃないか？

コイツの強い意志が思念となってありとあらゆる世界のシロガネ・
タケルを吸収し、この世界に転生させたんじゃないか？

それに俺達の時期も何故かランダムだった……

つまり、並行世界のシロガネ・タケルはコイツ一人だ……

だが、コイツから“唯一の存在”の力が感じられない……

まさか……カガミは平行世界のありとあらゆるシロガネを無造作に取り出したのではないか……そして、死ぬたびに、彼と結ばれないたびに平行世界のシロガネを次々と使いつぶしていった……

そして、ココにいるシロガネは本当の意味で唯一の存在になってしまった……

俺達の場合は俺に融合して一つの存在となったがシロガネは融合する素材が無いのだろう……

と言うことは……コイツは……本当に唯一無二のシロガネ・タケルという事が……

そして、世界は安定する方向に向かう……つまり、ベータのいる世界でシロガネ・タケルが存在しない世界……

この世界に舞い降りた……

そして、転生は時間や場所を選べない……

多分、座標固定が出来たのは白銀の強い意志だが、時間軸までには干渉は出来なかったといった所か……

まあ、コイツはあくまで俺の予想で予想の範疇を出ない仮説だ……

考えても仕方ない……

「まあ、解らんことを考えても解らんモノは解らん。コレからの事を考える方が有意義だ」

俺の言葉に白銀も頷いた。

「そう……ですね…… 今が1998年という事は俺はやり直せるチャンスをしかも準備期間を与えられたと考えるべきですね」

コイツ、思いのほかポジティブだ。

「如何する？ これから？」

俺の質問に白銀は考えながら答える。

「そうですね…… 横浜ハイヴは完成してませんし…… ああ…… 純夏…… 純夏はこの世界にいるのですか!？」

俺も梅麗もその言葉を聞き、思い至る。

「そうだよ!! レイジ!! この世界に鑑 純夏がいるかどうかで変わってくるよ!!」

俺も頷く。

「調べてみる!!」

俺は急いでキーボードを叩いた。

「いるよ…… 鑑 純夏…… 仙台に家族と疎開している……」

その言葉を聴いた瞬間、白銀は泣き崩れた。

「ズビカが……ズビカがイギデル……」

おいおい、涙と鼻水で発音が変になってるぞ。

「で？ どうすんの？ これから？」

梅麗の質問に白銀は答える。

「貴方達に……ついていきます……純夏には会いたいです……でも、この世界の純夏は俺の知ってる純夏じゃないです……赤の他人なんです……悔しいけど、覆すことの出来ない事実です……だから！！横浜を奪還できる力を俺にください！！今の俺じゃあ、世界を変える力なんか無いんです……悔しいけど自分の身分すら表現できるモノすらない状態です……だから！！俺に存在と戦う力を下さい！！！！ お願いします！！」

俺の気持ちは嬉しい。

白銀はこの世界ではエース級、しかもオルタを経験したのならこれ程、力強い援軍はいない。

そこら辺の衛士を入れるより遥かにいい。

「良いだろう……貴官の入隊を許可する」

俺がそう言つと梅麗が号令する。

「白銀少尉！！ きおつけ！！」

白銀はその声に直立不動になった。

そして梅麗は続ける。

「国連軍独立特務任務MS開発設計機関、ラグナロク機関の入隊を許可する！！」

そして、白銀は敬礼した。

この瞬間、白銀 武はラグナロク機関の衛士となったのだった……

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 13話

さて、武が俺達の部隊に入隊してから早1ヶ月が過ぎ去った。

俺が最初に行った事は、武がどの分野に適したパイロットであるかを調べる事から始まった。

最初は量産機たるジェガンに乗せえ訓練させた。

武曰く、「何だ、これ！？ 不知火の10倍以上の出力だ！！」との事……

最初は通常のジェガンから開始した。

1週間くらいで乗りこなせる様になり、間引き作戦を含む実戦訓練を行う。

そして、俺は武に最初のガンダムを乗せてみた。

武サイド

俺は隊長達に連れられて箱舟の工場区に来ていた。

「隊長……今日の訓練は中止ですか？」

俺がそう言つと前を歩く隊長は振り返る事無く言う。

「いや、今日も訓練はある」

ですよね~~~~~……

この人達が訓練を止めることなど有り得ない。

隊長達の訓練は恐ろしく地味で辛くて肉体的にも精神的にも辛かった。

最初は10キロ行軍を完全装備で行い、次にMSに乗り、初期過程の機動、つまり、MSを立たせる、歩かせる、走らせる等の基礎中の基礎をさせられた。

10キロ完全装備で全力疾走した後、直ぐに行い、10時間休み無く、ぶっ続けで行う。正直、疲れが出る。

そして、それが終わったら操縦で出た俺の欠点を的確に指摘し始める。

つまり、疲れが見える時に基礎を行う事で俺の癖や欠点を洗い出し、無駄を徹底的に省いていく。

正直、地味だが言われた通りやって見ると俺がいかに無駄の多い操縦をしていたのが良く解った。

それにその無駄は長期戦が多いベータとの戦いで戦術機の機体負荷による内部損傷という結果に結びつくし、更に自分の体力を無駄に消耗している事を実感した。

それが終わると応用を行う。応用は色々で隊長達との模擬戦や各国の間引き作戦に参加したり等の実戦的なモノまで様々だ。

同じジェガンなのに未だに軽くあしらわれる。

正直、化け物だ……

俺の攻撃は悉くかわされるわ、防御してもその裏をかいてくるわ、アチラの攻撃は面白いくらい当たるわの状態だ。

正直、あのコックピット越しに感じる強烈な殺気や闘気は心が折れそうになる。

何を如何間違えばあんなバケモノが存在するのは是非とも知りたい。

そんな事考えていると、目的地に到着した。

隊長は大きなスライドドアの前で止まり、暗証番号と身分証兼用のバスカードをかざした。

その瞬間、軽快な音が響いた。ロックが解除されたのだ。

そして、スライドドアは静かに開いた。

真っ暗な何も無い空間。

そして、後ろの副隊長が電気をつけた。

その瞬間、眩しい光が辺りを白く浮かび上がらす。

そこは工場区のハンガーだった。

そして、ハンガーにある機体に俺は目を奪われる。

高さは20メートルを少し超えたくらいの大きさ……

機体の高さもさることながらその大きさにも圧倒された。

頭部には赤く、大きな砲身と2本のアンテナ……

機体色は白を基調とした青と黄色のトリコロール……

「形式番号、MSZ-010、ZZガンダム……君の乗る機体だ……」

隊長はそう言いながらこの大きなMS、ZZガンダムについて説明を開始した。

「この機体の開発コンセプトは全領域での運用能力、機動力の強化は勿論のこと、一方で重装甲、大火力志向の強い機体でもあり、これらの要素を同時に成立させた機体だ」

俺はそのコンセプトを聞いて、自分の耳を疑った。

こんなメタボな機体が高速機動できるのかよ!?

「本機は大出力エンジンと機動デバイスによって優れた空間戦闘能力を有している。飛行能力もあり、ミノフスキーフライトを採用しているのも特徴だ。レーザー級のレーザーすら回避可能なほどの旋回能力や高速上昇、下降能力を有している」

何だそれは！？ レーザーをかわす？ マジかよ！？

「更に兵装は大出力、大火力を実現している」

確かに見た目、強そうだ……

「今日はこれを使った訓練を行う」

正直、乗ってみたが……

普通の衛士じゃ扱えない……何だこれ！？

機体の操縦はピーキー過ぎる。

どれだけピーキーかと言えば、ホンのチョコツと操縦桿を動かしただけでギュワン！！ と力強く動くのだ。

俺は何とかなれて操縦することが出来た。

多機能性を追求した結果、操縦システム自体も複雑化しているから

余計に操縦性は劣悪だ。

しかも、兵装も詰め込むだけ詰め込んだ様な設計だ……

ハイメガキャノンにダブルバルカンが2つ、ハイパービームサーベル兼用のダブルキャノンが2つ、21連装ミサイルランチャーが左右1つずつ。

固定武装でこの火力……

更に兵装はダブルビームライフル……

最早、この世界の戦艦を超えた火力だ……

恐竜的進化だな……

更にコストが半端ない……武御雷が100機オーバーが生産可能？
コスト度外視するにも程があるぞ……

そして、俺は理解した……ガンダムがどんな機体か……

ふざけた機動性、ふざけて軽く頑丈な装甲、半端無い火力……

そしてガンダムの欠点も解った……

一般の衛士じゃ扱いきれない機動性、火力が強すぎて味方を誤射しかねない程の大火力、国が採用を断念する程のコストの高さ。

そりゃ〜各国が要求しないわけだ……

開発できないのも大きな要因だろうが、それより更に大きな要因だ

……

扱えない、下手したらフレンドリーファイヤー、ふざけたコスト……

中には本当に試作量産機な機体もあるがそれでも火力と機動性と装甲とコストが戦術機の比じゃない……

つまり、ガンダムを乗りこなすという事は、超人的な操縦能力が要求される訳だ。

俺……とんでもない部隊に入隊してとんでもない人達から訓練受けてるのか……

今更ながら隊長達の凄さとガンダムの異様さが解った瞬間だった……

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 13話（後書き）

タケルちゃんの機体がZZになっちゃいました〜〜〜!!

俺は武のZZの完熟航行訓練に付き合っていた。

「おーお、ふりまわされてますな」

梅麗は茶化すように言う。

実際、武はZZの高速機動能力を使いきれていない。

流石にかのジュー・アーシタの様にはいかないらしい。

彼は第一次ネオジオン抗争の折、このZZでキュベレーのファンネルのオールレンジ攻撃を高速機動で回避しながら高度な接近戦をハーマン・カーンと演じている。

まあ、武をジュー・アーシタと比べるのは酷な話ではあるが……

だが、これだけ扱いきれば頼もしい戦力も無い。

俺はそう思いながら考える。

（今の所、ZZ専用サイコミュはリミッターを掛けている。ただでさえ武はこの機体をもてあましているのにリミッターを解除したら扱いきれるモノじゃない……これは……俺の選択ミスかな……武にジュー・アーシタと同じモノを求めてしまった俺の……）

言うなれば、運転初心者にF-1カーを運転させる様なモノだ。

俺達がどれだけ無茶を武に強いているかが解るだろう……
それに拙いながらも答えれる武もたいした才能だろう……

正直、高い所を要求し過ぎたな……

しかし、ジュード・アーシタはこの機体を数回の出撃で乗りこなしているのもまた事実……

そして、完熟航行訓練が終了した。

武サイド

クソ……

ZZが乗りこなせない……

今は、操縦訓練を行っているが、正直、違いすぎる……

俺が考えたXM3より遥かに進んだOSは凄いと思うが、扱えないでは意味が無い！

俺は考える。

（俺に何が足りない……？ 機体は完全だ。正直、凄すぎるくらいだ。だが、俺は隊長達のようにあんなに凄くうまい操縦は出来ない……あの人達の操縦を映像や横に乗って見せてもらったが真似できない……）

こんなので実戦に堪えられるのか？ こんな拙い操縦で俺は実戦に生き残れるのか？

そんな事ばかりが俺の頭を駆け巡った。

武の実戦当日……

俺達はヨーロッパ戦線の間引き作戦に参加していた。

ラーカイルムに俺達3人が乗り込み、ヨーロッパに進軍した。

「戦闘ブリッジ開け！！ 対ベータ戦闘！！ ミノフスキー粒子戦闘濃度散布！！ アンチレーザー爆雷発射と同時にダミー放出！！ メガ粒子砲、ミサイル、ターゲットをレーザー照準に切り替え！！」

「了解！！ ミサイル、メガ粒子！！ 撃て！！」

俺の命令を梅麗は着実に素早くこなす。

「正射！ 後、3秒！！ MSを発信させる！！」

「了解！」

俺は梅麗に命令すると手元の端末を操作し、

横の受話器を掴む。

俺はZZの中にいる武に通信で呼びかけた。

「いいか？ 武。今回の任務は間引きだ。余計な深追いや現地の軍との接触はなるべく避ける。いいな」

武は通信で答える。

『了解！』

梅麗は次々に発信シーケンスを行っていく。

「カタパルトオンライン。ZZ！！ 発進どうぞ！」

その声と共に武は発進する。

『白銀 武！！ ZZガンダム！！ 出る！！』

さて……俺は俺の仕事をしますか……

武サイド

正直、戦艦の主砲で大多数のベータが沈黙している。

戦艦が空を飛び、ビームを吐き出すその光景は正にSFの世界だ。

そして、俺もMSなどと言う兵器に乗っている。

「リアルバージャンかよ……」

俺は忘れかけていた元いた世界の記憶を思い出した。

その時、レーザー照射警告がコックピットの中に鳴り響いた。

「ツッ!? とー! あぶね……当たるところだった……」

俺は横型の操縦桿を動かしながら回避運動を行った。

正直、隊長達の世界の科学力は俺達の元いた世界ですらあり得ない程進んでいる。

それもそうか……隊長達の世界は西暦が過去の年号に成り果てているのだ。

UC……日本語に直せば宇宙世紀……人が宇宙にその生活圏を移してから既に1世紀が来ようとしている……そんな世界……

正直、スペースシャトル打ち上げるのにヒーコラ言っている俺達の

世界とは訳が違っ……

しかも、MS……モビルスーツなる兵器で人が殺し合いをしている時代……

そんな世界で実際、大きな戦争を体験した人達……

あの穏やかな笑顔からは想像も出来ない……だが実際、訓練の時の殺気は本物だ……

実際、自分が殺されるかと思っただほど……

俺はそんな事思いながら操縦桿を操作しながらダブルビームライフルとダブルビームキャノンを撃ち込む。

ベータの群はビームの高熱粒子に焼かれ、或いは爆風で吹き飛ばされる。

明らかにオーバーキルだ。

「スゲエ……これが……ガンダムのか……」

俺はレーザー照射をかわしながらベータを片付けていく。

戦いは始まったばかりだ。

イルフリーデサイド

戦場はあのデブなガンダムで出現でガラッと此方に有利になった。

たった1機、たった1機が参戦しただけで戦場はまるで変わる……

「これが……ガンダムの力……」

私は空を見上げる。

空ではメタボなガンダムはその巨体に似合わぬ高速機動で大空を支配していた……

その時だった……急にガンダムは急降下しながら背中 of 砲身を掴んだかと思えばそれを引き抜いた。

そして、引き抜いた根元から野太いビームの刃を出したかと思えばそれを横薙ぎに振るう。

桃色の刃は更に拡張し、前にいたベータの大群を一瞬で切り殺した。

そして、高速で飛び上がり、要塞級の上に躍り出てビームの刃を上から下に振り下ろす。

要塞級は切り裂かれ、真っ二つになった……

最早、接近戦とは呼べない……

バケモノだ……

そう思った瞬間、突撃級が突進してきた。

不味い！！ 回避が間に合わない！！

『『イルフリーデ！！』』

ルナとヘルガが叫ぶ。

ああ……私、ここで終わりか……

そう思った瞬間、ガンダムが私の前に踊り出て、突撃級を蹴り倒した。

突撃級は前部装甲が砕け散り、内部の汚いモノを吐き出す。

「あ……あ……」

『ボーとするな！！ 死にたいのか！？』

回線でガンダムが語りかけてきた。

「あの……」

私がそう言おうとしたとき、センサーがそれを遮った。

『まだ来るか……いいだろ……纏めてZZが火に焼いてやろう……』

そう言うとガンダムはベータの正面に対峙した。

何をする気だろう？

そう思った瞬間、ガンダムの額から馬鹿みたいに大きなビームが吐き出された。

『いつけ~~~~~~~~!! ハイメガキャノン砲!!』

そしてガンダムは首を右から左に振る。

そこには最早、更地しか存在していなかった……

何だ！？ これは！？

それしか頭に無かった……状況が理解できない。

頭が付いていかない……

そして、ガンダムは空高く舞い上がった。

戦闘は終結したのだった……

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 15話

武のガンダムでの初出撃から1ヶ月が過ぎた頃だった……

俺と梅麗は国連本部ビルに来ていた。

「元帥、我々がここに呼ばれたのはやはり任務ですか？」

俺の質問にレイテ元帥は静かに頷く。

「ああ、香月 夕呼博士は知っているかね？」

香月…… 夕呼…… ね……

「ええ、存じております。しかし、その香月博士と今回、我々が呼ばれた理由が如何結びつくのです？」

俺は自分が白々しいと内心思いつながら聞く。

「その香月博士が国連に横浜ハイヴを奪還して欲しいとの要請があった。そこで、君達の出番なのだが……」

元帥が苦い顔をした。

「元帥？ 何か問題でも？」

俺の言葉に苦い顔は更に苦い顔になった。

「ああ、アメリカが君達の作戦参加に難色を示して……安保理は君達を出す、出さないで揉めている……」

アメリカ……ねえ……

元帥の言葉はまだ続く。

「日本帝国としては君達の戦線参加を是非との声が世論から出てきている。しかし、アメリカを含む、オルタネイティヴ5推進派は君達の戦線参加は是非とも避けたいらしい」

梅麗は皮肉って口を挟む。

「結局、私達に動かれるのが目障りなんでしょう。あの国……自分達が絶対と信じるG弾神話が私達で否定されるのが、G弾が無用の長物と成り下がるのが……」

梅麗の言葉に溜息をつきながら答えた。

「実際はその通りなのだが、国とは自分達の信じるモノや非は中々否定せんよ」

俺は溜息を吐きながら答える。

「それが国というモノですから……」

俺は考える。

ここで、俺達が出ないと言う選択肢が出てくれば武は絶対出撃する

だろうな……

これはあくまで俺の予想だがZZで武は出るはずだ……

気持ちは解るが……俺達は軍人である以上、命令には従わねばならない……

どんなに馬鹿馬鹿しい命令でも……

俺は気を取り直して元帥に次の質問をした。

「現在の安保理の状況は？」

元帥は静かに答えた。

「現状では常任理事国の日本が非常任理事国や他の常任理事国に根回しをしているな……アメリカに反発する国は以外に多い。それをうまく利用している。しかし、アメリカも黙ってはいない。オルタネイティヴ5推進派や中立派を引き込んでいる。今の所、日本が優勢だがどう転ぶか解らんのが現状だ……」

相変わらずだな……国の思惑は……

俺はそう思いながら次の質問をした。

「各国でのMSの配備数はどうなっています？ 正直、何処の前線でも見かけませんか？」

元帥は呆れた様に言う。

「配備数は世界各国で見ても十分とは言いが順調だよ……ただ……各国は戦後を見越してMSの保有数を多めに確保しておきたい

のだよ……」

俺はそれを聞いた瞬間、キレそうになった。

それを何とか押さえ込むのに苦労しながらも内面は平静を装う。

正直、苦労した……

「……自分達がMSを要求しておいて、前線に回さないとは……MSはお飾りでは無いのですよ？ 使われない兵器に何の意味があるのですかね？」

俺の言葉に元帥も呆れながら言う。

「日本の諺に取らぬ狸の皮算用と言う言葉があるが……ハイヴとベータがまだ沢山いるのにな……国が現状を見ないで未来を見るとは……正直、神に祈りたくなったよ……」

梅麗は呆れながら言う。

「この神の死んだ現状で祈っても祈りがいありませんけど……」

俺は梅麗の皮肉にこう言うしかなかった。

「だからと言って努力を放棄するのは馬鹿のすることだ。人事を尽くして天命を待つしか私等に選択肢は無い訳だ。なら、自分がやるべき事は全力を傾けるしかあるまいよ」

俺の言葉に2人は頷く。

「まっ、それしか無いのも事実だけだね」

「結局、我々、人類はそれしか出来ないか……いや、それをまだ出来る段階だな……手遅れになって後悔するよりは遥かにマシだな……」

俺達は箱舟に戻り、次の作戦の準備を行う。

今、ブリーフィングルームにて、梅麗と武を交えての作戦説明を行っている。

「今回の作戦はソ連政府からの要望により、アルダン高原を越えてオリョクミンスクに進行するベータ郡の撃破が今回の作戦内容だ」
俺はレーザーポインターで地図を指しながら説明していく。

「俺達の侵入ポイントはココ、オレニョク湾から侵入、南下し、オリョクミンスクに進行する。ノギンスクハイヴ側はソ連軍が押さえる事になっている」

梅麗はそれを聞き、質問してきた。

「ノギンスクの方を私達に当たらせると思ったんだけど、ソ連はどう出てくるのかな？ 後ろを気にしながら戦うの？」

正直、梅麗の疑問はもつともだ。

あの国が何もしないで俺達を作戦参加させる訳が無い。

何か裏がありそうだ……

「今の所は元帥が色々調べてくれてはいるが、何も出てこない。まあ、ソ連が何かするならするでその時に対処するしかない」

梅麗が溜息を吐きながら言う。

「正直、対応したらしたで国際問題にしそつだよね〜あの国……」
確かに、否定は出来ない。

「まあ、俺達は余り各国政府からは好かれていない。事実、国連安保理のせいで独立作戦行動を制限されたからな……仕方あるまい」

梅麗は愚痴る。

「結局の所、国家の利権が絡んでくるのか……」

突如、黙っていた武が口を開いた。

「隊長、結局、国連軍として動くのは俺達だけなんですか？」

俺は武の疑問に答えていく。

「ああ、俺達だけだ。正直、他の部隊と合同になると他の部隊との連携を考えて行動しなければならない。正直、ガンダムが3機いるのに頭数増やした所でかえって足手まといだ。なら、俺達、3人が前線に出て叩いた方が効率はいいいからな」

梅麗も頷きながら言う。

「そ〜そ〜、よく考えてみなよ。高速機動が出来て、ベータを多数なぎ払えて、レーザーを防げる機体を各国が配備できると思う？ソ連がMSを出すなら話は変わるけど、まず出さないわよ。戦術機でノロノロ出てきてボコられるのがオチよ？」

武は尚も言う。

「でも、部隊が増えればそれだけ作戦がうまくいくと思うのですが……」

俺は武の言いたい事は解るが正直それは理想だ。

「悪いが武、お前さんも知つての通り国家や組織は様々な思惑で動いている。更に国家間や組織内での足の引っ張り合い、潰し合いなんてザラだ。夫々が夫々の思惑を抱いてこの世界は回っている。確かに、皆で協力すればうまくいくだろう。しかし、それは夫々の思惑が合致した時だけだ。今、国連は近いうちに大反抗作戦を行う予定だ。後方もそう言った配備で動いてる。ソ連は迫り来るベータの脅威がある。国連は一兵たりとも出したくない。ソ連は一兵でも多く確保したい。そんな思惑の食い違いを俺達は調整しているのだよ」

尚も食いつく武。

「なら後方が何とかすれば……」

俺達は呆れる。

「あのな……お前……後方が一作戦立てるのにどれだけ苦労してるか理解できるか？兵員の配置から弾薬やら将兵のメシやら予算やら戦争の大本を決めるんだぞ？特に国連軍は各国に依存した軍隊

だ。僅か数日でガリりとドラスチックに変更できると思うか？」

梅麗が付け加える。

「まあ、オルタネイティヴ権限なんかの強い権限を振り翳せば何とかなるだろうけど。各国は余りいい顔はしないよね」

武は押し黙ってしまった。

「つまりだ……軍を動かすのは時間が掛かるということだ。その為に俺達は各国に依存せずに少数精鋭を即時展開できる軍を作った訳だけど。国家の思惑でその独立行動も制限されている訳だ」

俺は余談を切り上げ、作戦準備を開始するよう支持した。

俺達は当初の作戦通り、ラーカイルムにてオレニョク湾から進出した。

俺達、3人はそれぞれのコックピットの中で待機していた。

『アト、5フンデサクセンチュウイキ！！ アト、5フンデサクセンチュウイキ！！』

ハ口の機械的な声が聞こえてくる。

「さて、もうソロソロ行くか……」

俺は通信を各機に繋げる。

「各機、準備は？」

梅麗が答える。

『ラブナロク2、オールグリーン！ 何時でも行けるよ！！』

武が続いて答えた。

『ラグナロク3、此方も準備万端です』

宜しい、結構だ。

五分が経過！

「全機！！ 発進しろ！！」

俺は通信越しに叫んだ。

『了解！！』

カタパルトからジャスティスとZZが飛び立つ。

さて……俺も行くか……

H i - v はカタパルトに押し出され、オリョクミンスクの空に舞い上がる。

武サイド

隊長が戦場に加わり、いよいよ戦場はベータの殺戮ショーに成り下がった。

ガンダムが3機……鬼の様な戦力だ……

俺はそう思いながらもダブルビームライフルを撃ち込み、ミサイルをばら撒く。

粒子の熱とミサイルの爆風で無数いたベータ郡は簡単に吹き飛んだ。

俺は余裕で勝てる。

そう思った。

しかし、考え事に没頭する余り、レーザー照射警告が鳴り響くまで気付かなかった。

我に返ると無数のレーザーが殺到してきた。

「な！？　しまった！！」

俺はとっさに両腕についているシールドを展開したが遅い。

俺は幾らガンダムの装甲でも之だけのレーザー喰らったら!!

俺は初めて死の覚悟と恐怖を味わった。

その時だった……俺の体を赤い光が包み込んだのは……

「な!?! 何だ!?! 何だこの光!?! レーザー級の光じゃない!
こう……どう表現していいか解らないけど……暖かい!?! これ
は一体!?! これもガンダムの力なのか……」

俺は訳が解らなかった……

(……け……ん……)

声!?! 何だ!?! 何だこれは!?!

ZZから感じられるあの力……あのオーラ……

この感じは武のモノじゃない……

これは……

この思念は……

『カガミ……スミカ……』

梅麗は驚きを露にする。

当然、だいたいはずの思念が武の中にいる。

「何だ！？　どう言うんだ！？　何故、武にカガミ　スミカの思念が！？」

『解らないよ！？　そんな事！！　大体、ZZのサイコミュはレイジがロックを掛けたんでしょ！？　何でロックが外れてんの！？』

梅麗は解らない事を怒鳴りながら言う。

正直、俺も意味不明だ。俺が知りたいくらいだ。

「詮索は後だ！！　まずは目の前の敵を排除する事を考えろ！！」

『了解！！』

俺はビームライフルを撃ち込みながら武を見る。

その時、武はリミッターが外れたが機体を操っていた。

「リミッターが外れて益々ピーキーなはずだぞ……それを武がああも扱うか……？　これもカガミ　スミカの思念の力なのか？」

カガミ　スミカ……お前は死して尚、武を守り、導くか……

??? サイド

何だ……？ 何だ！？ この色は！？

解る……これは人の感情だ……

だが、ココまで強烈な感情は見たことが無い！！

あのメタボなガンダムから感じるあの暖かな色は何だ！？

あんな物！！ 不要だろう！！ 戦場には！！

不要だろ！！ あんな！！ あんな！！ 私達が貰えなかった暖かさは！！

そんなドロドロした感情が溢れ出てきた。

止められない感情、これは悔しさなのだろう……

私は国からはあんな感情を教えるはもらわなかった……

後ろからイーニアの悲しい色を感じた……

悲しみと言う表現が適切かどうかは解らない。

だが……イーニアは泣いていた……

武サイド

解らない、解らないけど……

今は目の前のベータを倒す事だけを考える。

俺は操縦桿を操作する。

「何だ！？ 俺の思い通りに動く！？ ジャジャ馬だったコイツが！？」

俺の驚きはそれだけでは無かった。

「見える！？ レーザーの動きが見える！？」

俺はレーザーをかわしながらダブルビームライフルを撃ち込む。

しかし、その威力も上がっていた。

「何なんだ！？ ビームの火力が上がってる！？」

ベータが近づいてきた？　なら接近戦で叩く！！

「切るぞー！！　この野郎ー！！」

俺はビームサーベルを横薙ぎに振り払いベータを切り裂いたが……

「な！？　何で！？　ビームサーベルの一振りであれだけいたベータ郡が死滅した……？　何がどうなってるんだ……？」

こうして、俺達の戦いは幕を閉じたのだった……

俺にはZZが何であんなったのが解らないまま……

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 16話

俺と梅麗は今回のZZに起きた現象について調査する為、ZZをオーバーホールしていた。

「ZZのOSのロックは武側から解除されたモノだと解った。サイコミュのリミッターに武とは別の脳波が感知された事を考えるとやはり“アレ”は力ガミ スミカの可能性が高い」

俺の言葉を聴き、梅麗も報告を行う。

「それから、機体のフレームはガタガタ、砲身もカナリ痛んでる……無理やり最高出力のリミッターを強引に解除した事による急速な過重負荷が原因だよ……それに、ZZのサイコミュはオーバーロード一歩手前で正直、あの戦闘でよく持ったと感心したくなるくらいに……あの時のタケルは凄かった……私達には及ばないけど少なくとも私達といい勝負は出来る位凄かった……機体をオシャカ一歩手前までするのは大減点だけど……」

梅麗は資料を見ながら顎に手をやり考えながら言う。

「この分だと新しく用意したフルアーマーが早速登場か……まあ、明星作戦までには間に合うわね。武の完熟航行を加味しても……」

俺はその話をこれまでとし、新たに出てきた問題を片付ける事にした。

「だな……後は武に起きた現象だ……コイツはハッキリ言って予測に予測を重ねた俺の推論だ当てにしないでくれ……」

梅麗は無言で頷きながら俺の話を聞いた。

「カガミ スミカが死んだ時、その思念体は武の中に何らかの原因で取り込まれた。或いはひつついてきた……そして、武が危機の時、強い感情がZZのサイコミュのロックを解除した。或いは思念体のカガミがロックを解除した……そして、武にニュータイプの力を与えた……」

梅麗は呆れながら呟く。

「何か……突拍子も無い話な上に信用性に欠ける話ね……」

俺も自分がヘンテコな話をしている事くらい理解している。

「悪いが予測の上に予測を塗り固めた推論だ……当てにするなど言っただろ……」

「結局、解らずじまいか……」

梅麗の言葉に溜息を吐きつつ俺は話を変えた。

「解らん事を何時までも考えていても仕方ない……この件については後回しだ……梅麗、ニューヨークに行くぞ」

「了解！」

俺達は話を切り上げ、ニューヨークに飛ぶことにした。

俺達2人は元帥のオフィスに到着し、今回の作戦の報告書を提出した。

「……以上が今回の任務の報告です」

元帥は報告書を読みながら顎に手をやりうなる。

「ウム……今回のシロガネ少尉の件……やはり、ソ連に漏れていると考えるべきか……」

俺は頷きながら言う。

「ええ、私のHiveやジャスティスのレーダーにもチェルミナートルが確認されています」

梅麗も続けて言う。

「今回の作戦でソ連は我々の戦力の把握が目的ではないかと推測いたします」

元帥は考えながら言う。

「ソ連は今の所、静かだよ。正直、不気味なくらいだ……多分、裏ではKGBとGRUが君達の調査を強化している……まあ、もつとも何処の国の諜報機関も君達を嗅ぎ回つてはいるだろうが……だが、今の所、私も君達も尻尾を捕まれてはいまいよ。このベータ大戦においても人間同士のイザコザは堪えない……お互いの弱みを犬も驚く嗅覚で探り出し、それをネタに自分達を有利にする……変わらないよ、人は……」

俺はいよいよ呆れてきた。

「まったく……この忙しい時に暢気なモノだ……」

元帥は自虐的に口を開いた。

「私も君達と同じく宇宙から地球を見たことがある……再突入型駆逐艦の窓からだがね……その時だ……ユーリ・ガガーリンの言葉を出したモノだ……『地球は青かった、されど神はいなかった』と言う言葉を……今は駆逐艦に乗るたび君達の言葉が頭から離れない……『地球の重力に魂を縛られ地球の大きさと重さを理解できない人々』だったか……今の人類は正にそれだ……しかもその事を大抵の人間は理解していない……地球が当たり前のように半永久的に人類の支配下あるとか勘違いしている……アメリカのG弾運用が正にそれだ……これは我々、人類の傲慢だな……」

俺はこの元帥の考え方はスペースノイドの考えに近いと驚いた。

宇宙に生活圏の無いこの世界でココまでの発想が出来る人類が要るだろうか？

正直、少ないだろう。

この柔軟さこそがこの元帥の最大の武器なのかもしれない……

これ以上萎えてくるらしく元帥は別の話をしてきた。

「MSの各国の受注数はどうなっているのかね？」

元帥はようやく鬱な気分から少しは楽になったのか声のトーンを変える。

俺も少し明るい声で言う。

「日本帝国と大東亜連合、極東国連軍からの大量受注が相次いでいます。それと、一番の売り上げはエネルギーCAP型ビームライフルと戦術機対応型射撃OSが売れてますね例の大反抗作戦の為に動因されるのかと……多分、我々の出撃が出来なくなった時の為に……」

元帥もあの作戦について話す。

「やはり、な……だが、君達の出撃は決定しそうだ。アメリカも日本政府の要請であり、アメリカが口を出すのは内政干渉だと訴えてきてな……」

やはり、明星作戦は俺達の出撃に傾くか……

「それと君達3人の階級が上がる。君は准将に、バイレイは大佐に、そしてタケルは大尉にそれぞれ本日付けで昇進だ」

俺達は元帥に粗方の報告を終え、箱舟に戻った。

大きな戦いが始まる……

人類の反撃が今始まろうとしていた……

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 17話

1999年、8月5日、世紀末……この時、俺達は日本本土奪還作戦、明星作戦に参加していた。

8月の日本独特の暑さが肌を刺激する。

編成はアメリカを主力とする国連軍、そして日本を主力とする大東亜連合軍である。

俺達はレイテ元帥の計らいで国連や大東亜とは違った命令系統で動ける独立部隊として参戦していた。

よくもまあ、アメリカや日本が許したモノだと感心する。

日本は兎も角、アメリカはG弾ぶち込む気満々だからな……

俺等の出撃を許可はしないだろう事を見越しての措置だと言っことは理解できる。

「指令、国連旗艦、アイオワから通信です」

梅麗がそう言い、艦橋スクリーンに映す。

スクリーンにはいかにも権力の為なら何でもしそうな男が映し出さ

れた。

『今作戦の国連軍の指揮を取る合衆国海軍ライベル大將だ。貴官等ラグナロク機関は我々の後方につけてもらう。別命あるまで待機だ』

上層部の命令だろう……

それを唯再生してるだけだろう。

ミュージックプレーヤーの様に……

予想通り過ぎて笑える。

俺達を遠のけたいらしい……

ココまであからさまだと呆れを通り越して笑えてくる。

「提督、ご存知とは思いますが我々、ラグナロク機関は今作戦においてはレイテ元帥の許可により独立権限を得ています。」

俺は事実を提督に突きつける。

提督は鼻白む。

仕方がないだろう。指揮官として駒が自由に動かせないでは話にならない。

更に政治的な思惑が蠢いているこの状況下で自分の目的たるG弾の発射とそのデータを取らなければならない。

彼等とて政治的な思惑抜きにしても自分と自分の部下の命が掛かっている。

彼等米軍とて好き好んで地獄めぐりをしたい訳でも無かるうちに……

「では、提督、よき戦いを……」

俺はそう言い此方から通信を切る。

俺は頭を切り替え、梅麗と武に指示を出す。

「さて、諸君！！ 行こうか！！ 地獄めぐりに……」

「了解！！」

さて、闘争の時間だ……

孝之サイド

少尉に認可して初めての任務がこの横浜奪還作戦だった。

俺は不知火の管制ユニットで初めての実戦の空気と緊張を味わっていた。

神宮司軍曹が言っていた“死の8分”を乗り切る！

そう意気込んで来たはいいが、正直、緊張で胃が変になりそうだ。

『孝之、いよいよだな』

通信で同期の慎二が語りかけてくる。

「……ああ……」

俺はそう答えるのが精一杯だった。

これ以上何か言えば胃液が口から漏れちまう。

『生きて帰ろうぜ。待ってるんだろ？ 2人共……お前の答えを聞く為に……だったら、生きて帰ってお前の思いの丈をぶつけて来いよ。2人共否定しないよ……お前が悩んで出した答えなら……』

俺は慎二の言葉に勇気付けられた。
コイツとのコンビは長い。

あの二人と慎二と俺とは幼馴染だ……

『HQより全部隊へ通達、ただ今をもって明星作戦を開始する！！
繰り返す！！……』

『全機！！ 行くぞ！！』

指揮官の命令が下った！！

俺達は正面のベータ共を片付けていく。

「慎二！！ 援護！！」

『あいよ！！！！』

慎二は景気よく36ミリをばら撒く。

「はあ~~~~~~~~！！」

俺は要撃級を長刀で切り裂いていく。

『あゝあ、ビームライフルがあればもっと楽なんだがな』

ばやく慎二に俺はつつこむ

「あのな……あんな高級品、俺等新人に持たせてくれるかよ……それを言うなら俺だってビームサーベルを持ちたいよ」

慎二のばやきは止まらない。

「俺、一度でいいからジェガンに乗りたいて……」

俺はそのばやきに呆れる。

「……幾らA-01でも乗れる訳無いだろ……帝国軍や予算豊富なアメリカ軍でさえこの作戦に乗ってる奴余り見かけないだろ……」

「確かに……ああ……ジェガンに乗りたいて……!」

「俺だつて乗りたいよ……ジェガン……確か日本での呼び名は“隼”だけ……」

「でもジェガンの方が名前の通りはいいだろ?」

「……ああ……何で日本的に名前変えるかな……上の連中?」

「アメリカとの差別化をしたいんでしょう? 噂じゃ斯衛部隊がジェガンのカスタム機をラグナロク機関に要求する噂があるらしいぜ」

「アレ、噂だけだろ? あの城内省がそんなマネするかね?」

俺達は会話しながらもベータを叩いていく。

割と余裕だなと思ってしまつくらい今の自分はいい感じた。

その時だった、センサーが接近する機体を捕らえる。

「何だ！？ 何か来た！？ しかも速え！！ 何だこの速度！？」

慎二もまさかと言う口調で言う。

『噂をすれば、ってやつか？ お出ました。ガンダムが……』

慎二の言葉に俺も思う。

ガンダムがこの戦闘に参戦するのか？

正気か？ バケモノ集団降臨だな……

『HQより、各部隊に通達。現在ラグナロク機関が戦線に参加した。各部隊、後退せよ！！ 繰り返す！！ ……』

俺達は一応下がる事にした。

さて、一般兵が下がってくれた所で俺は2人に命令を下す。

「梅麗と武は前衛！ 俺は後衛に付く！ 2トップだ！！ 全機！
ギャラリーが沢山いるんだ！ ドジはするな！！」

『了解!!』』

梅麗と武を前に出す。

その時、俺は疑問が生まれた。

何で国連軍も大東亜連合軍も兵を下げた？

国連は兎も角、日本が兵を下げるのは余り考えられない……
自国奪還の為に動いているのだ。
彼らが参戦しないのはおかしい……

誰だ？ 誰の命令だ？

俺はアームレイカーを操作し、レーザーを回避する。

「……考えても解らんか……なら……俺は俺の仕事をするさ……」
そう呟きながらアームレイカーを操作し、ビームライフルをフルオートで撃ち込んでいく。

数多いたベータの塊は粒子の高熱で蒸発し、横にいたベータすら掠めただけで蒸発した。
爆風でベータ郡は吹き飛び四散する。

さて、仕事を続けるか……

夕呼サイド

私はオルタネイティヴ権限で日本帝国の旗艦最上のCICにいた。

CICのスクリーンにはガンダムが映し出されていた。

3機のガンダムは最早理解不能な強さでベータを片付けていく。

予想外だ……幾ら機体がバケモノでもここまで強い連中だったなんて……

正直、キルレシオを修正しなければならない……

私の中では不知火との戦力差が1対1000から1対1万位に修正された。

ここまで凄いと機体の性能なのか衛士の実力なのか理解できない……

アイツ等、ラグナロク機関にしてみたら、オルタネイティヴ計画を不要と言つのも頷ける話だ。

アイツ等の前では戦術が意味を成していない……

それもそうだ、アイツ等はそんなの不要な強さの領域にいるのだ。

もし、アイツ等、ラグナロク機関が戦術を練るときは自分達と同等か或いはそれ以上の敵との対峙位だろう。

そんなバケモノと対等かそれ以上が存在するかどうかは果てしなく疑問だが……

「……ウム……ラグナロク機関のガンダム……まさかこれほどとは……」

小沢提督がそう言いながらモニターを見つめる。

私は考える。

此の俁、アイツ等の独断を許す訳にも行かないわね……

「小沢提督……お願いしたいことが……」

私は小沢提督に進言した。

武サイド

俺がレーザー級を叩いている時、日本帝国から全部隊に通信が入る。

『この作戦に参加している将兵に告ぐ！ 何時まで観戦している積もりだ！ この作戦は我等の作戦ぞ！！ 国連の一部隊に任せるなど言語道断！！ 直ちに戦線復帰せよ！！』

その通信を聞き慌てて帝国軍を含む大東亜連合の軍が動き出す。

次いで国連軍も動き出す。

その時、隊長から通信が入る。

『武、撤退だ』

俺はこの通信を聞いた時、愕然とした。

「何故です！？ 俺達は勝っている！！ この状況下で撤退なんて！？ 正気ですか！？」

俺は有らん限りの怒りを口から吐き出した。

しかし、隊長は静かに言い放つ。

『アメリカの無線を傍受した。アメリカがG弾を発射した……』

俺はそれを聞いた瞬間、愕然とする。

「そんな！？ それじゃあココは！？」

『綺麗サツパリ吹き飛ばす』

益々怒りが胸の内に湧き上がる。

「日本や大東亜連合の事前通告無しに！？ 何考えてるんですか！？ アメリカはあそこには多くの兵がまだ沢山いるのですよ！？ それをハイヴと共に吹き飛ばすつもりですか！？」

それでも隊長は冷静だった。

『だからこそ撤退だ。それにアメリカの野望に焼かれたいかな？ 手は打つ』

そう言いながら隊長は手元のコンソールを操作した。

『現作戦に参加中の部隊に告げる！！ 此方、ラグナロク機関、指令、高月 玲人だ！！ アメリカ軍がG弾を2発発射した！！ 周辺が確実に重力異常を引き起こす代物が2発だ！！ 我等のレーダーとのデータと現在のG弾の位置、制限時間を各部隊に送る！！ 急いで撤退しろ！！ 迎撃も考えたが迎撃時の被害が日本の帝国艦隊を巻き込む恐れがある！！』

そう言いながらデータを転送した。

来た！？

な！？ もう5分と無い！？

それを見た瞬間、各部隊は大慌てで撤退命令を開始した。

隊長はコンソールを操作し、通信を終えると俺に通信を繋げる。

『解ったか？ 全機、引くぞ！？』

『了解』

「……………了解……………」

副隊長は簡潔に答え、俺は渋々了解した。

しかし、俺等に共通している事は、理解は出来るが納得はしていない。

そんな感じだった。

俺が機体を反転させようとした時だった……

一機の不知火が高速起動で戦場突っ込んでいた。

「な！？ 何やってんだ！？ 死ぬ気か！？」

俺は急いで不知火に通信を入れる。

「撤退命令は下った筈だ！！ それ以上突っ込むな！！ 死ぬぞ！！」

その時、不知火から男の声が響く。

『ウオオオオオオオオオオオオオオ！！ 死なせない……これ以上……俺達の町で死なせたくないんだ！！』

俺はその不知火に追従しながら接触回線で呼びかける。

「馬鹿野郎！！ こんな所で前が死んだって死人が蘇る訳が無いだろうが！？」

孝之サイド

慎二が…… 慎二が死んだ…… 俺のせいで……

俺があの時……

敵は…… 敵は俺が取る！！

そう息卷いた瞬間、通信でアメリカのG弾発射がラグナロク機関により発覚した。

部隊は大慌てで撤退していく。

それでも俺は逃げる事なんてできなかった……

気が付いたら俺は……

前進していた。

87式突撃砲を乱射しながら突き進む。

その時だった、ガンダムから通信が入る。

『撤退命令は下った筈だ！！ それ以上突っ込むな！！ 死ぬぞ！
？』

それでも俺は叫びながら突き進んだ。

ガンダムの衛士それでも俺に接触回線で通信を試みてきた。

『馬鹿野郎！！　こんな所で前が死んだって死人が蘇る訳が無いだろうが！？』

俺はその言葉を聞き、冷静にはなった。

それでも怒りは収まらない。

俺が叫ぼうとした瞬間、レーザー級がレーザーを上空に向けて撃ち出した。

『不味い！！　此の俣では！！』

そう、ガンダムの衛士が叫んだ瞬間、俺の不知火に衝撃が走る。

「うわ！？！？」

俺は急激な揺れに歯を食いしばり耐える。

そして俺が見たモノは……

大きなガンダムが両手を前にやりながら俺に背を向け、

黒い光に挑む姿だった……

武サイド

クソ！！

不知火を庇ったは良いけど、その後の事を全然考えてなかった！！

如何する！？

如何する！！

俺！？

フルアーマーZZでもこの2発のG弾爆心地からマトモに耐えられるかどうか……

俺もこの不知火の衛士も終わりかな……

そう思った時だった……

俺の目の前で突如、G弾の暗黒の光が消えうせ白い光が俺を包み込んだ。

「な！？ 何だ！？ 一体何が！？」

そう叫んだ、瞬間……

目の前に半透明の女の後ろ姿が現れる。

俺は……知っている……

この後ろ姿を……

赤いロングのポニーテイルの髪型……

黄色い大きなリボン……

「……す……みか……」

俺の眩きはコックピットの中に染み渡る……

『大丈夫……大丈夫だよ……タケルちゃんは私が守るから……』
そう聞こえた気がした。

「純夏……」

俺は叫んでいた。
叫ばずにはいらなかった。

『ホラホラ、タケルちゃん！ 駄目だよ！！ しつかり前を見ないと！！ でないと私……タケルちゃんのところから離れられないよ……』

俺はそれでも良かった……

純夏といれるなら……

たとえ幽霊でも、思念体でも純夏といれるなら……

『駄目だよ……タケルちゃん……私を困らせないでよ……何時からタケルちゃんも弱虫になったの？ 大丈夫！！ 私の力、タケルちゃんにあげるね。これからは私の力がタケルちゃんを守るから……だから……私が出るのはここまで……』

そんな力いらない！！

純夏！！ 俺は……お前に貰ってばかりで守ってばかりで……

何も返せていないんだ！！

頼む！！

返させてくれ！！

『うん……いっぱい……いっぱいもらったよ……タケルちゃんから……優しさや愛情や勇気を両手じゃ抱えきれないくらいのいっぱい……の想いを……だから……約束して……今度は私の力で私以外の多くの人にその優しさや力を使ってあげて……』

解った……約束する……だから！！

『ありがとう……タケルちゃん……そして、バイバイ……』

そう言い純夏は消えた……

目を開けた瞬間……コックピットの画面に映し出されたのはG弾により荒廃した不毛の大地だけだった……

「純夏……違うだろ……そういう時は……『またね』……だろ……」

俺の声は虚しくコックピットの世界に響くだけだった……

俺は静かに武を見つめていた……

ZZはフルアーマーが壊れ、所々の装甲が剥がれボロボロだが原型は止めていた。

「カガミ スミカは逝ったか……武に自分の力を与えて……」

もうZZは修復不可能だろう……

外部装甲は兎も角、内部は所々壊れている……

新しいガンダムを作る必要があるな……

俺がそう思った時、梅麗から通信が入る。

『……この後、如何するの?』

俺は梅麗の質問に答える。

「武と不知火を回収、ラーカイルムに戻るぞ」

俺がそう命じると梅麗が静かに問いかける。

『了解……ねえ、本当にカガミ スミカは幸せだったのかな? 本
当にあの子は幸せだったのかな? 私には解らないけど……』

俺は静かにそして答えた。

「それは結局、逝った本人にしか解らんことだ……冷たい言い方だ
が俺達にはアレコレ詮索する権利はないよ……彼女の感情は彼女だ
けのモノだ。誰のモノでもない……」

だが……俺達は死んでいった者達の想いを継いでいかねばならな
い……武はそれを背負う義務が生まれた……そして俺達もそれを見
届ける責務が出来た……俺達がこの世界に放り込まれた時点で、俺
達はこの世界の重みを背負い、世界をよりよい方向にする努力をす
事こそ俺達が生きた証になる……梅麗……共に変えよう……世界を
……」

俺の言葉に梅麗は静かにだが確実に頷く。

『ウン』

横浜ハイヴ攻略戦はこれにて閉幕した。

だが……俺達の戦いはまだ続く……

武の新しいガンダム如何するかな？

俺はそんな事考えながら、ZZを担ぎ考えた。

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 17話（後書き）

タケルちゃんの新しい機体……

如何しよう……

明星作戦の評価は成功に違いない。

しかし、その作戦と勝利方法が賛否両論なのだ。

日本帝国及び、大東亜連合は今回の作戦は成功だがアメリカに講義した。

当然だ。何ら通告も事前報告も無くG弾を落としたのだ。

しかもご丁寧に迎撃したら日本艦隊に被害が来るコースに向けて撃ち込んだのだ。

特に日本帝国の民意は怒り狂った。

周辺諸国や他国でもG弾脅威論が巻き起こった。

一方、アメリカを含むG弾推進派は世界に一定の成果を示す事が出来たのと賛同国を得られたのでご満悦だ。

しかし、それでもなお異常な存在感を放ったのがガンダムだった。

G弾爆心地にいても原型を留めている。

それは正に脅威だった。

その事にアメリカを寒からしめた。

アメリカ政府の中にガンダム脅威論が巻き起こる程に今回の事態は恐ろしかった。

世界各国でもガンダムは最強、と言う『ガンダム伝説』が言われるようになる。

曰く、ガンダムがいればハイヴが陥落する。

曰く、ガンダム1機で国家を打倒することが出来る。

曰く、ガンダムの衛士は化け物。

などなどが世界各国で囁かれ始める。

一方、『ガンダム伝説』を作り上げた当事者達はある事に頭を抱えていた。

国連軍からの待機命令は正直、今はありがたい。

俺と梅麗は武が助けた少尉の様子を見に行く事にした。

さて、どんな人物か……

俺が室内に入ると武が立ち上がり、俺と梅麗に敬礼した。

ほう……この少年が……

少年の年齢は18、9歳ぐらいか……

若いな……新兵か……

俺は静かに口を開く。

「さて、少尉、先ずは自己紹介からだな。私の名は高月 玲人。階級は准将だ。ラグナロク機関の指令をしている。君は？」

少年は静かに答える。

「……国連軍、A-01部隊所属、鳴海 孝之、階級は少尉です……」

鳴海……孝之……ね……

俺はその名前が頭の知識で解った。

『君が望む永遠』の主人公か……

まさかこの新米少尉が……

俺は静かに口を開く。

「A-01、なるほど。かの香月博士の部隊か。と言うことはオルタネイティヴ4管轄の部隊だな……」

面倒な部隊の隊員を助けたものだ……

「准将、質問を宜しいでしょうか……？」

鳴海はオズオズと質問の許可を取ってきた。

俺はそれを許可する。

「許可する」

鳴海は静かに頭を下げた。

「有難う御座います……貴方は先ほど私を助けてくれたガンダムの衛士ですか？」

俺は静かに首を横に振りながら言う。

「いいや、君を助けたのはそこにいる白銀大尉だよ」

鳴海は静かに武に礼を言うと次の質問に移った。

「私は何時、原隊に復帰できるのでしょうか？」

俺は考えながら言う。

「ウム……現時点では掃討戦やG弾での各国家の指揮系統の混乱は続いている……流石に今すぐには難しい……この作戦が終わり次第だな……それに君は左腕を骨折しているし、機体は駆動系が滅茶苦茶だ。正直、新しく作っただ方が早いくらいだ……今すぐ戻っても戦

力外だ……それでも戻りたいなら私なりに手は打つが？」

彼は落ち込みながら言う。

「そう……ですか……」

俺は静かに言う。

「まあ、ラーカイルムも暫く滞在する。極東国連軍と連絡が取れるまで静養したまえ」

孝之サイド

俺は色々考えた。

正直、人生でこれほど思考に没頭したのは初めてなのかもしれない
……

俺のせいで親友は死んだ……

更に、白銀大尉は俺のせいでガンダムを廃棄処分にまで追い込まれた……

結局、俺は何も出来なかった。

俺がガキだったせいで親友を失った……

更に白銀大尉や高月准将にまで迷惑を……

俺は……ただ守りたかった……

俺の町を、俺の故郷を……

結局、故郷はG弾とか言う爆弾で吹き飛んだ……

俺は如何すればいい……？

俺が頭を抱えている時だった……

白銀大尉が肩を静かに叩く。

「鳴海少尉……余り自分を責めるな……あの時のお前の気持ちは痛いほど解る……」

俺はこの人の言葉を理解できなかった。

俺と1歳しか変わらないヤツがガンダムに乗って、あんな凄い活躍しているんだ。

きつとこの男は挫折や敗北とは縁遠い存在なんだ。

俺はそんな事思いながら言う。

「アンタに俺の何が解るんですか……？ 知った口叩かないで下さい……アンタみたいに国や故郷を捨ててガンダムに乗って戦っている人間に……」

白銀大尉は静かに、しかし、悲しそうに言う。

「故郷……か……懐かしい響きだ……友達がいた。尊敬できる恩師たちがいた。幼馴染がいた。俺の全てがそこにあった……今でも思い出せる……あの時の事を……俺が当たり前と享受していた、そこに何時も当たり前にあるものを……しかし、何時もそうだ……俺はその当たり前の大切さを無くして初めて思い知らされる……俺が当たり前に享受していたモノがいかに尊いモノか……俺はその事を理解するのに多くのモノを失った……何もかも……」

その時のアイツの顔は一気に老け込んだ気がした……

人間はあそこまで老け込めるモノなのか？

人間はあそこまで故郷に思いを馳せる事が出来るのか？

俺はアイツに言う。

「アンタの故郷は一体……」

アイツは静かにしかし、ハッキリと言う。

「横浜さ……」

俺は愕然とした。

「何だつて……？」

アイツは微笑む。

「だから解る……確かに俺はどこの国に忠誠を誓ってはいない……ただけだな……俺はこの世界が好きだ。この地球を愛している……だから……お前が守りたかったモノが解るんだよ……」

俺は叫びながら問うた。

「何故、経歴を抹消してまで!？」

アイツはそれでも静かだった。

「ベータとの戦いで俺は思い知った。G弾では人類は勝てない。かと言ってオルタネイティヴ4でも僅かな希望しか得られない……完全勝利とは程遠い……しかも俺が出来る事といえば戦術機やMSを操縦する位だ……なら俺は如何すべきか……そんな時だった……今の准将と大佐と出会ったのは……俺が今、人類や地球に出来る精一杯が人類の完全勝利に化けようとしている……だから俺は賭けたのさ……俺自身をチップにして人類の勝利に……」

「……ZZがオシャカになってしまった……武の新しい機体を如何しよう……」

俺はばやく様に言いながらコーヒーを飲んだ。

「機動性と火力と接近戦、この3つを旨く融合した機体……」

梅麗の言葉に俺は深く考え込んだ。

幾ら武がニュータイプの力に目覚めたとは言え俺達には到底届かな

い。

俺は自分の知識の中から、武の戦闘データと照らし合わせ、ありとあらゆる機体を検討してみた。

そもそも、ZZは高速機動戦、MSでの戦闘、大火力、爆撃能力と詰め込むだけ詰め込んだ機体だ。

俺等のどの機体には無い設計思想だと言える。
逆に多くを求め過ぎる機体でもある。

そんな設計思想の機体があっただろうか……

俺の記憶をUC世界の古い順に検索していく。

ガンダムでヒットあり……

これは……

俺の知らないガンダムだ……

UCの105年……シャアの反乱から12年たつて……

頭頂高が26メートル？

サザビーと変わらない大きさだ……

かなりデカイ……

俺はその名を口にした。

「……………三ガンダム……………」

梅麗が顔を上げて俺に問う。

「何？」

俺はその名を再度、口にした。

「三ガンダムだよ……………三ガンダム……………思い当たる機体が1件ヒットした」

梅麗は驚いた顔をしながら問いかける。

「何でレイジが三を知ってるの？ 世代的に知らないはずじゃあ？」

梅麗の質問に俺は答えた。

「ああ、俺の中の知識にあった……………ハサウェイの事も……………マフティの事も……………」

アイツ……………テロリストになってしまったのか……………

アイツとは面識があるし、色々あった……………

俺の知識の中ではシャアがアイツを駆り立てたのだとしているが……………

アイツ……………死者に引つ張られたのだな……………アムロさんの言うように……………

俺はやり切れない気持ちで一杯だった。

兎に角、俺は武の機体をミガンダムにすることにした。

武装も充実している。

ビームサーベルが2本、バルカンが2門、ビームライフル、シールド、肩部メガ粒子砲が2門、ファンネルミサイル、腕部ミサイルランチャー、脚部大型ミサイルと兵装も充実している。

コイツはいけるぞ……

ZZを扱った武だ、使いこなしてくれる筈だ。

俺はすぐに頭の設計図を具体化していく。

正直、全高が28メートルと大きすぎる……

俺は頭の中の資料を検索していき、ガイア・ギアのミノフスキークラフトをスピノフシミガンダムの全高を20メートルまで小型化することが出来た。

シールドにも表面に俺のHi-Vと同じように のフィールドバリアを展開できる様、改良した。

しかし……ビームライフルの火力が桁違いだ……改造なしでユニコーンのビームマグナム並みかよ……

兎に角、設計図が出来た。

その時だった……鳴海少尉が俺と梅麗を訪ねてきたのは……

「准将……お願いがあつて参上いたしました……」

「願ひ？ 何だ？ 一体？」

「私に出来る事かな？」

その問いかけに静かに彼は頷く。

「はい……私をラグナロク機関の一員に加えていただきたいのです
！！」

俺と梅麗は驚いた。
予想外もいい所だ。

「理由を聞こう……」

彼は頷き、理由を述べた。

「私は自分が衛士になれば故郷を救える……そんな思い上がりをしていました……ですが現実とは違いました……私の未熟で親友を戦死させてしまい、あまつさえ、白銀大尉にご迷惑を掛けました。そして、白銀大尉とお話をさせていただき、自分が進むべき道が見えてきました。俺は、掛けて見たくなりました……貴方達の人類の完全

勝利に……」

俺は答える。

「いいのか？ そんな事をすれば君の経歴は死んだも同然だぞ？
M I Aになるのだぞ？ 白銀と同じように……下手をすればA W O
Lになる。射殺されても文句は言えんぞ？ それでもか？」

彼は強く頷く。

「はい」

俺は梅麗を見る。

すると彼女の顔は俺の好きにすればいいと言う顔だった。

俺は決断を下す。

「良からう……決意は固いようだしな……鳴海 孝之少尉！ 貴官
を我がラグナロク機関の一員とする！」

彼は敬礼し答える。

「ハッ！！」

俺は武に命令する。

「白銀大尉！ 少尉の面倒は貴官が見ろ！ いいな？」

武も敬礼し答える。

「了解！」

まったく……この世界の人間は思いっきりがよすぎるぞ……

今度は孝之の機体を考えなければならなくなった……

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 18話（後書き）

ヘタレ・オブ・ヘタレの鳴海 孝之が生存……

あゝ速瀬中尉と涼宮中尉がドロドロしそうで怖いよ……

タケルちゃんの機体が三に決まったけど、今度はヘタレ・オブ・ヘタレの機体を如何しよう……

孝之がラグラク機関に入隊してから早1ヶ月が過ぎた。

俺と梅麗は武の報告を聞いていた。

「現在、孝之の訓練プログラムのメニューを実戦的なモノに変更し、訓練を行っています」

梅麗は武に対し質問する。

「と言うことはジェガンによる兵装の変更を行いつつベータとの散発的な戦闘？」

武は頷く。

「はい、やはり、正確なデータは実戦でしか得られませんから」

俺は静かに武に問う。

「と言うことは、段階的に見てガンダムに乗せる時期か……武。詳細な資料と戦闘の記録映像を頼む」

俺がそう言つと武はDVDロムを2つ俺の机に置く。

「そう言われると思い、詳細なデータと戦闘記録映像を用意してお

きました」

俺はそれを受け取る。

「すまない。引き続き孝之の訓練を頼む」

「ハッ！」

俺がそう言つと武は敬礼して去る。

俺は梅麗と共に映像を見ながら梅麗が口を開く。

「レイジ……今回は私がこの子の機体を作るわ」

梅麗の言葉に俺が驚く。

「いいのか？」

梅麗は頷く。

「レイジばかりに苦勞はさせられないでしょ？ それにレイジ、今辛い時期だし……」

梅麗はこういう所があるから俺も助かっている。

「頼めるか？」

梅麗は微笑みながら言つ。

「任せなさい！」

と……

俺は梅麗に孝之の機体を任せる事にした。

梅麗サイド

とは言つたものの……

私、何時もレイジのサポートで殆どMSを1から設計したことないんだよね〜

私は頭の中にある設計図を引っ張り出す。

レイジが何時も使う常套手段だ。

私の場合は何故かCE世界の技術が多い。

まあ、好きだけどSEED……

孝之は基本的には武と同じだ。

万能型だが接近戦が比較的突出している。

ん〜……

あ、一件ヒット。

あるじゃん！ いいヤツが！

ストライクノワール。

これは使える。

万能機だし、比較的接近戦に傾いてる所とか孝之にピッタリ。

私はすぐさま設計図に書き込んでいく。

書き込んでいったはいいいけど問題が所々出てくる。

その1番の問題はバッテリーによる稼働時間の短さ。
これに尽きる。

私は頭の中にあるUC世界のミノフスキー・イヨネスコ型熱核反応炉に変更し対策を取った。

そして、私が次に着目したのはノワールストライカーパックだ。
ユニット自体に推進力はないが、ウイングは総重90tを超すノワールを飛行させるのに充分な揚力を生み出すのだが……正直、空中戦は苦手だ。

そこで私はアンカーランチャーを潰して、中央のユニットにインパルスのフォースシルエットのメインスラスタをつけてみた。
これで空中での高速機動戦と即時戦線参加が可能になった。

次にMAU-M3E4 2連装リニアガンの改造に掛かった。
正直言ってリニアガンでは弾数が限られる。ハイヴ戦やベータの戦

闘は基本的に長丁場が多い。弾数気にしながら戦う訳にもいかない。そこで私が着目したのはフリーダム・バラエーナ・プラズマ収束ビーム砲だ。

ミノフスキー・イオネスコ型熱核反応炉により豊富で安定した電力を確保できる。

外見はMAU-M3E4 2連装リニアガンだが中身はバラエーナ・プラズマ収束ビーム砲になった。

次に私が改良を加えたのはストライクEの防御力だ。

正直、低すぎる私はアレコレ頭の中の知識を検索してみる。

確か……連ザでスターゲイザーがビームシールド使ってたよね……

アレを装備させてみるか……

と言うことで連ザで使われていたスターゲイザーの腕部装甲を参考にしてビームシールドが追加された。

コックピット周りも改良し、SEED式の球体型コックピットにした。

それと、センサー類の中にレーザー照射感知システムを組み込んだ。これはレーザー級がレーザーを撃つ時に体内のエネルギーを感知して警報するシステムだ。

私はこの設計図を元にホワイトストライカーと命名した。

孝之サイド

俺は司令と副司令の後に続いて歩いていた。

2人曰く、俺の新しい機体が受領されるとの事だ。

正直、ジェガンでも持て余すのにこれ以上何が出るのか……

俺達が大きなエアロックの扉の前に来た。

隊長が身分証を端末に翳すと扉のロックが解除された。

そして隊長が端末を操作すると扉が開く。

そして、空間に入るといきなり視界が眩しくなる。

俺は目を細めながら見た先には1機のメタリックグレーのMSがいた。

「ガン……ダム……」

俺が目にしたそれは正にラグナロク機関の象徴にして世界最強の機動兵器郡、ガンダムだった。

「これは？」

俺は司令と副司令に質問した。

俺の質問に副司令が答える。

「GAT-X105ER ホワイトストライクガンダム……貴方の新しい機体よ」

コレが……俺の機体……

俺はホワイトストライクを受領し、その完熟航行を行ってはいるが……

正直、難しい……兵装の使い分けが途轍もなく難しい。

その最大の扱い辛さは万能機であるが故の扱いの難しさだ。

刻一刻と変わる戦場で即座に判断し、兵装を選択していかなければならない。

更に言えば速度が滅茶苦茶速い。正直、隊長や指令や副指令の機体速度には負けるがそれでもジェガンが話しにならないくらい速い。

何だ！？ この扱い辛さは！？

「クソ！ 何だよ！？ この機体！？ 扱い辛過ぎるぞ！！ オイ！！」

俺はビームライフルショットイーを引き抜きターゲットに撃ち込んでいく。

クソ！！ バレルを短くしてるから余り当りが悪い……

5発のうち1発外した……

あの3人なら全弾当てられるのに……クソ!!

武サイド

あゝあ、振り回されてるな……

俺もZZを乗り始めた時はこんな感じだったな……

正直、ガンダムタイプは往々にして扱い辛い。

全てにおいてズバ抜けた機動性、全ての作戦を優劣無く行える万能性、撃墜が難しい防御力と兎に角、凄いが扱い辛い機体だ。

玲人さんや梅麗さん達曰く、ガンダムタイプの中には専門分野の機体があるらしい。

今の所、ミの完熟航行は完了し、実戦テストも済んでいる。

しかし、ファンネルミサイルな……

思念制御のミサイル……確かにレーザー級からの撃墜率が限りなく減るのは有難い。

しかし、世の中解らん事ばかりだ。

まさか、速瀬中尉と涼宮中尉の想い人を助けて、部下にするとは夢にも思わなかった……

予想外だ……

今頃、あの2人は泣いてるだろうな……想い人が公式記録じゃあMIAだもんな……

全く……コレも純夏の導きなのか……

兎に角、完熟航行は終了。後は実戦あるのみだな……

俺はそんな事考えながら次の作戦に向けての準備を開始した。

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 19話（後書き）

ここに来てオリガン登場~~~~~！

万能機か接近戦の機体が多い気がする……

俺と梅麗は国連本部ビルに来ていた。

レイテ元帥は徐に口を開いた。

「君達に新たな任務だ」

任務？ 数ヶ月前に明星作戦があつたばかりで？

「どの様な任務ですか？」

梅麗が質問する。

正直、今の所、各国は間引き作戦などの比較的消極的な防衛線を行っているはずだが……

正直、何処の軍隊もカツカツで厳しい。

未だに俺達の所に補充要員が来ないのは何も政治的なモノではない。優秀な衛士はどの国でも財産だ。

残り少ない財産を手放す奴はいない。

オペレーターもこの人手不足で確保が難しい。

まあ、全体的に人手不足だ。

若い男も女も戦場じゃあ仕方がないだろうよ……

それに伴い出生率の低下や産業界のエンジニアの軍への流出。
拳句の果てに16歳の子供まで戦場に出そうな勢いだ。

「今回の任務はある施設の護衛だ」

「ある施設？」

俺が聞き返すと元帥は静かに頷いた。

「ああ、今回、君達の護衛対象はアラスカのユーコン基地だ。旅団規模のベータが迫ってきている。君達の任務は基地の護衛及び旅団規模のベータ郡の掃討だ。ユーコン基地の護衛にはプロミネンス計画に参加している各国の衛士も参加する。君達は旅団規模のベータ郡の掃討を行いつつユーコン基地を死守してもらう。何か質問は？」

俺は静かに問う。

「現在、防衛線を行っている部隊は？」

俺の問いかけに元帥は答える。

「現在、ソ連陸軍第18師団がスクランブルにより防衛を担当している。しかし、現在の戦況は防衛線をエヴァンスクまで引き下げている。正直、旗色は悪いよ」

抜かれるの時間の問題か……

「了解しました。部隊を即時展開、防衛線を押し上げます」

レイテ元帥は頷きながら答える。

「連戦の所すまない……しかも状況が悪くなって君達に頼る事になつてしまった……今回もユーコン基地と言う独自の基地が絡んでいる……プロミネンス計画の尊い志も今では国家の利権が絡む計画に成り果てた……今ではその概念を外れ、戦術機をMS並みの性能に引き上げると言う計画になっている……全く……各国もやり方が露骨だよ……『ラグナロク機関が出撃するまでも無い』と啖呵を切っておきながら、状況が悪くなって掌返した様に救援要請だ……おおっとすまない……君達に愚痴る積もりは無かったのだが……」

俺は目を伏せながら首を横にふり答える。

「いえ、今回は仕方がありますまい……ユーコン基地事態が特殊ですから……」

国家が集まって何かしようと言うのだ。
何が起こつても不思議じゃない。

俺達は箱舟に戻り、今回の任務を武と孝之に説明することにした。

ブリーフィングルームには俺と梅麗、武と孝之がいた。

「さて、今回の任務だが、アラスカのユーコン基地の護衛と迫り来る旅団規模のベータ郡の掃討戦だ」

俺は任務の詳細についてレーザーポインターで指しながら大型ディ

スプレーでせ説明していく。

今回は孝之も参加する。正直、楽になる。

「今回の任務は俺達の目的はあくまで旅団規模のベータ郡の掃討だ。頭数の少ない俺達はユーコン基地の要請で遊撃隊としてソ連陸軍第18師団との共同戦線となる。武と孝之はロシア語が喋れないから通訳ソフトを予めインストールしておいた。常時、通訳のモードをオンにしておけ。言葉が解らなくて命令系統が混乱しましたでは話にならんだろう?。」

続いて梅麗が喋る。

「今回の勝利条件はベータ郡の掃討、敗北条件は防衛ラインを抜かれる事、シンプルで解りやすいけど正直、ソ連軍は旗色が悪いわ。防衛ラインは頭にしっかりと叩き込んでおいてね。後ソ連軍の動向もしっかりと把握しておいて」

武と孝之は夫々答える。

「了解!」

さて、必要物資をラーカイルムに詰め込みますか……

アラスカ ユーコン基地

ある会議室に3人の男達が顔を突き合わせていた。

一人はプロミネンス計画最高責任者のクラウス・ハルトウィック大佐。

一人は国連太平洋方面第3軍ユーコン基地司令ジョージ・プレストン准将。

最後の一人はユーコン基地東側代表ソ連軍のヴァジリー・アターエフ大佐。

今回、彼等が一同に会した原因はやはり旅団規模ベータ郡の出現とラグナロク機関の対応だった。

まず口を開いたのは、ユーコン基地司令プレストン准将だった。

「今回の旅団規模のベータ郡の掃討は思いのほか手間取っているようだ」

その言葉にソ連軍のアターエフ大佐が反論する。

「我々として予想外の襲撃だ。コレを退けるのは正直、ホネだ」

今まで黙っていたハルトウィック大佐が口を開いた。

「問題はソ連が後どれ位持ちこたえられるかが問題だ。ラグナロク機関が到着した時には既に防衛線は抜かれていたでは話にならない。ソ連は自軍での防衛を強く押したからこそ我々もラグナロク機関の出撃を打診しなかった。だが、蓋を開ければソ連軍は敗走寸前だ。正直、我々として面子がある。だが、死ぬよりマシとの判断で要請した」

アターエフ大佐は内心苦い顔を隠し平然としているが正直、ココでの立場はカナリ弱まっている。

プレストン准将が追求する。

「如何するのかね？ ソ連は？ 今回の事態が続けば我々はソ連を信用できなくなるぞ？」

アターエフ大佐は弁明する。

「今回の判断は私個人の判断では御座いませんよ。あくまで党上層部の判断です。だが、ココでその様な責任追及は正直意味を成さない。問題はラグナロク機関がどれほどの戦いをしてくれるかによって我々ユーコン基地もそれ相応の準備をしなければならぬ」

プレストン准将が口を開く。

「かの『国連の白い悪魔』と『国連の紅い斬殺姫』が失態するとは思えんよ。そうでなければこんな所で暢気に話などせん。今頃大慌てで出撃準備をしてる所だ」

ここでもアメリカとソ連の仲は相当悪い。

資本主義と共産主義、民主主義と社会主義、2つの相容れない体制

とベータ大戦の戦後を見据えたビジョンを夫々が持っていた。

アメリカはベータの直接侵攻を受けておらず、対ベータ戦における軍事力の消耗もほとんど皆無である点や、戦術機に代表される兵器開発においても他の追隨を許さず『米国は人類の兵器廠』と揶揄されるほど国力が安定していることから、世界最強の座をほしきままにしている。

ソ連はその領土にハイヴを数多抱えながらも人の多さとパレオロゴス作戦の失敗を機に戦力を消耗するのは得策ではないと方針を転換し、戦力を温存しながら極東地域まで後退し東シベリアやアラスカの租借地で国力を維持また、全人民軍属化政策によりいまだ強大な軍事力を有しており、中国と並んで対ベータ戦闘の経験が最も豊富な点や、ソ連と同様ベータによって壊滅的打撃を受けたユーラシア諸国に接近し、安価で高性能な戦術機を提供などの支援活動を行っていることもあり、国際社会での政治的影響力も大きい。また、日本帝国とともに極東防衛を担っている関係から、極東地域のハイヴに対する漸減作戦などにおいて日ソ間で共同作戦を行うことも多い。戦術機生産量はアメリカに次いで第2位の国なのだ。

そんな国同士が角突き合わせているのがこのユーコン基地の歪さを助長させていた。

更にここに各国が加わり一つの力オスな空間が出来ている。

しかし、アメリカやソ連にとっても歪で恐ろしい存在が突如として登場した。

ラグナロク機関である。

彼等の開発したMSは戦術機を遥かに凌駕した兵器なのだ。

それが戦術機よりは高いが小国でも頑張れば買えるし、大国なら頑

張れば生産できるとあり各国が注目を集めている。

彼等の牙城たる機動兵器市場に強大なライバルが現れたのだ。心中穏やかでは無いことは簡単に察することが出来る。

彼等が手を組んでプロミネンス計画の方向性を変えたのも頷ける話だ。

しかし、所詮は上辺だけで、状況は右手でにこやかに握手しつつも左手には何時もナイフを隠し持っているのが現状だった。

（角つき合わせるのは勝手だが、此方まで振り回さないで欲しい…
…）

ハルトウィック大佐は胃が痛くなるのを堪えながら口を開く。

「ラグナロク機関が防衛を成功させるにしろ失敗するにしろ我々は後者を前提に動くべきでは？」

この言葉に2人は頷き、ようやく部隊編成を行い始めた。

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 21話

ラーカイルム隊長室で俺と梅麗が話していた。

「今回の任務もそうだけど、いい加減散発的な戦闘が多いわね……正直、元を叩かないことには同じことで何度も出撃する羽目になるわ」

梅麗の言いたい事はもつともなのだが……

正直、俺達は一応、国連と言う枠の中にいる以上、国連軍として行動しなければならぬ。

しかし、国家としては国連、いいや俺達、ラグナロク機関には黙っていて欲しいのだろう。

俺達が幾らハイヴ攻略戦を打診しても突っぱねられるのがオチだ。

今更、ベータに蹂躪されて暢気なものだと思いつつも、国家は面子にこだわる連中の集まりだ。

政治的な思惑も往々にしてある。

その象徴たるユーコン基地を防衛とは……

「正直、大規模作戦を展開するにしても俺達は基本的に人員が足りない。人員確保のままならぬこの状況を打開する必要があるのだろうが……武や孝之は例外中の例外だ……何せ孝之は公式記録ではMIA、武にいたっては国籍無しだ……まあ、武にかんして言えば俺達と同じ方法が取られたが正直、何処の国も何処の部隊も圧倒的に人数が足りないのさ……」

梅麗は溜息交じり呟く。

「無い袖は振れないものね……」

更に俺達の立場を弱くしているのが前の査問会での判決だ。

俺達の独立作戦行動は制限がつくわ、人員補充は却下されるわ、その癖、技術はよこせとカナリの制約がついた。

アレは正直、負け戦だよ……

そんな事で頭を悩ませていると梅麗がそつと俺の手に自分の手を置いた。

「安心しなさい。私がいるから……例え世界の全てが敵になっても私と貴方がいればどんな奴だって倒せるよ!」

全く……コイツには何時も助けられる……

俺が萎えそうな時に俺の欲しい言葉をくれる。

「ああ……」

俺は唯そう言い彼女の唇を奪った。

戦場は地獄が広がる世界だった。

戦術機の大部隊がベータと入り乱れての乱戦だった。

『司令……本気でこの乱戦を戦うんですか？』

孝之が俺に質問を投げかける。

正直、コレでは戦線を押し上げるのも一苦労だ。

「ハア……仕方あるまい……ソ連軍が引かない以上は近接戦闘するしかないだろう？」

ソ連軍も何を考えている？ ココまで乱戦して成果が上がらないなら体制を立て直すのが常識だろうに……

俺の言葉に梅麗がウキウキしながら言う。

『接近戦〜♪ 接近戦〜♪ ジャスティスの得意な接近戦〜♪』

しかも鼻歌交じりだし……

何時もは砲撃戦ばかりだったからな……

フラストレーションがたまっているのだろう……

ベッドの上でも凄かったし……

『蹴り切れ〜♪ 足刀〜♪ グリフォンブレイド〜♪ 今だ〜♪
出すんだ〜♪ ラケルタサーベル〜♪』

な！？ マ○ジン○Zの第一期のオープニングの替え歌だ！？
何か知らんが、ヲタクの俺が反応している！？

静まれ！！ ヲタクの俺！！

『ふ、副司令が壊れた……』

『余りに接近戦が出来なかったからかついに……』

お前達……気持ちには解るが……仮にも彼女、大佐よ？ 俺の副官よ？ 俺の恋人よ？

……可哀想な目で見てやるなよ……
俺まで虚しくなるから……

……もういいや……これ以上梅麗が壊れないうちに戦闘するか……

「梅麗！！ 浮かれてないで孝之とフォーメーションを組め！！
孝之！！ ガンダムでの出陣は初めてだ！！ 気は抜くな！！ 武
は俺とエレメントだ！！ 梅麗並みの事は期待しない！！ 自分の
思った通りにやれ！！ ケツはしっかり拭いてやる！！」

『『『了解！！』』』

いい加減、ゴチャゴチャ戦うのも飽きただろう？ ソ連軍もベータ
も？

ココで幕引きだ！！

「梅麗！ 孝之！ スペースが開いた！！ 割り込んで引き剥がせ
！！」

『『了解』』

梅麗サイド

さうて!! お楽しみ of 接近戦の時間がやってまいりました!!

私はラケルタビームサーベルを引き抜き連結させアンビデクストラ
スハルバードモードにして突っ込む。

うん……頭部の14mm2連装近接防御機関砲と胸部の17.5
mmCIWSで牽制射撃したいけど、あのチェルミナートルごと蜂
の巣にしそう……

というか……戦術機の装甲、紙屑すぎ! だって……牽制用のバル
カンで蜂の巣って……

ジンでも持ちこたえるよ……

仕方がない……牽制無しで突っ込むか……

私は操縦桿を操作しながら地上に降り立つ。

ラストチカが接近戦を仕掛けようとしていたが知るもんですか。

そのまま要撃級の間割って入り、ラケルタで要撃級をズタズタに
刻む。

いい加減、鬱陶しくなってきたのでオープンチャンネルで通信を開
き、ロシア語で命じる。

「ソ連軍に通達！！ 全機！！ 後退しなさい！！ この戦闘はラ
グナロク機関が預かる！！」

その瞬間、あちらこちらから通信越しにロシア語の音が聞こえてくる。

「な！？ ラグナロク機関！？ 何で国連の実験部隊がココに！？」

「アレは！？ ガンダム！？ 紅いガンダム……」
「国連の紅い斬殺姫」か！？」

「な！？アレが国連軍ナンバー2の衛士！？」

『国連の白い悪魔の紅い片腕』……『

「アレが……」
「殺戮の紅姫」……」

『血塗れの紅い貴婦人』……

『斬殺の紅い女神』……

ちよ、ちよつと~~~~~!!!!!!

何！？ その物騒な異名の数々は！？！？！？！？！？！
 ？！？

こんな花も恥らう乙女に向かってつける異名がそれなわけ！？！？

! ? ! ? ! ?

全然！！ 納得いかないんですけど！！！！！！

しかも、何！？ 中二病みたいなネーミングセンスは！！！！！！

もっとこゝ可憐な名前とか、美しいあだ名は無かった訳！？

「あー！　武！　孝之！　アンタ等なにウンウン頷きながら肯定してるのよー！！」

「事実だろ……」

「ブルータス……お前もか！？！？！？！？！？！？！？」

……もういいもん!!
いじけてやる!!
ベータに八つ当たりしてやる!!

付きあってもらうわよ……アンタ等!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

よかった……秘匿回線に切り替えて……

アレは見せられんな……

梅麗がいじける所は……

あんなにトキメイタのは俺が5歳のころ八口を見た時以来だ……

兎に角、ソ連は撤退行動に入ったか……

よし、作戦がやりやすくなる。

俺はビームサーベルを引き抜き、桃色の刃を展開させる。

「邪魔は無くなった!! ココで終わりだ!!」

ラトロワサイド

ラグナロク機関が強引に割り込んできたお陰で何とかこの乱戦から抜け出すことが出来た。

しかし……何て連中だ……介入僅か10分で乱戦の混乱を収拾し、そこから防衛ラインを押し上げ始めた……

!? 呆けている場合ではない。

部隊残存数の把握を行わなければ。

私は通信を開き、ターシャに繋げた。

「ターシャ、残存兵力を纏めて第二防衛ラインまで後退する」

『了解！』

ようやく戦闘が終了し、ラーカイルムに積み込んで箱舟に帰還しているときだった。

レイテ元帥から緊急入電が入る。

「レイテ元帥？ 何事ですか？ 先ほど任務の報告書はお送りしたはずですが？」

俺の疑問にレイテ元帥は静かに、だが、その内心は慌てていた。

『緊急事態だ。君達にはハンガリーに飛んでもらう。ブダペストハイヴのベータ郡が活発化、間引きを行っていたヨーロッパ連合及びヨーロッパ国連軍の救出を行ってもらう』

は、ハンガリー？

反対方向じゃないか……

しかも、ブダペストハイヴのベータ郡が活発化している？

「現在の戦況とベータの規模は？」

『戦況は五分五分だが正直、押されている……此の俣ではフランスは再びベータの支配下になってしまふ。それだけは避けたい』

「解りました。急行いたします。各部隊に通達をお願いします」

『解った。頼むぞ』

全く……過度な期待をしてくれる……たった4人しかないんだぞ？

それを世界中飛び回れと言うのがどうかしている……

しかし……俺達の軍としての扱いは国連海軍の扱いだ。

正式名称が国連海軍独立特務任務MS開発設計機関である。

元々は海軍預かりの兵な訳だ。

まあ、制服も国連海軍の制服だ。

形としては肩と袖の所が繋がっているのと肩賞と袖賞がある事くらいか……

武は兎も角、孝之は国連陸軍の部隊だった訳でカナリ戸惑っていた。

敬礼からして違ふのだ。

それこそ戸惑うだろうな……

武にしても最初は陸軍の敬礼をしていた。

どちらにしろ形だけだな。

2時間後、どうにか到着したはいいが……

何処もかしこ地獄だな……

仕方がない……何時もの事だ……

俺はH i - v のコックピットの中から地獄を見ていた。
部隊は撤退している。

これはもう生存部隊はいないだろう

そう思った時だった

ノイズ交じりの通信が耳に入る。

『……………ら……………ぶ……………』

ノイズが酷い。

ミノフスキー粒子を散布している訳でも無いのにこのノイズ……

……まさか……戦闘中に通信システムがイカれたのだろうか……

コッチか……

俺がアームレイカーを操作し、電波が出ている発信源まで向かう。

そこには4機の小隊がベータに囲まれていた。

「アレか！！　しかし、囲まれている！？　しかも弾切れに接近戦兵装が壊れてるだ！？」

俺はビームライフルではなく腕部マシンガンを選択する。

正直、かすめただけでMSの装甲すら熔解してしまうビームライフルは使えない。

大口径マシンガンが右手から火を噴く。

小隊の周囲にいたベータは蜂の巣になり死滅する。

俺はオープンチャンネルを繋ぎ叫ぶ。

「援護する！！　早く撤退しろ！！」

戦術機小隊は大慌てで撤退を開始した。

それに追いつがってくるベータ群

「行かせるかよ！！」

俺はHi-Vを小隊の後方につけ、ビームライフルのモードをセミ

オートからフルオートに変更しばら撒いた。

ビームの弾丸は幾多にも礫を作り、ベータに肉薄した。

ベータは蜂の巣どころか吹き飛ばされ、焼かれ死体が滅茶苦茶になる。

それでもまだ来るベータの群を見ながら俺はビームライフルのビームを出しっぱなしの状態で左右に振る。

「いい加減しつこいぞ!!」

横薙ぎになぎ払われたビームはベータを焼き切りながら吹き飛ばした。

俺は再びオープンチャンネルで通信する。

「12時の方向！ 距離3000!! ラーカイルムがある!!
緊急救艦しろ!!」

俺はそう叫びながら命令する。

『……援護……感謝します……』

『り、了解!!』

『……了解……』

『了解……!!』

夫々4人が答え走ってラーカイルムまで移動した。

推進剤すら切れた状態か……よく持ったものだ……

俺は残る残敵を掃討した。

さて……今日は帰るか……流石に疲れた……

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 22話

正直、ココまでベータに振り回されるとは思いもよらなかった……

いや……人間同士のイザコザにも巻き込まれてる。

正直、俺達にとっては国の利権や思惑やらはどうでもいいのだ。

それを気にする必要があるのはやはりソレが足枷になって重たくしているからなのだろう……

俺が4人を保護し彼等はラーカイルムの仕官食堂で食事をしている所だった。

彼等の話ではそれぞれ違う部隊にいたが、自分一人を残して部隊は全滅したらしい。

F-15はもう推進剤も弾薬も切れ、接近戦兵装も壊れ、いよいよベイルアウトの時に俺が現れたと……

しかし、凄い勢いでメシを食う連中だ。

俺が仕官食堂に入ると彼らは立ち上がり敬礼しようとした。

「あゝいい……状況にもよるが俺の場合はメシ食ってる時には敬礼はいらん」

俺が英語でそう話すと彼等は途中で敬礼をやめメシを食い始めた。

食べ終わり、一息ついた所で彼らの所属を把握することにする。

「さて、君達の所属は？」

俺の質問に濃い金色の髪青年が答える。

「国連軍欧州方面第138戦術機機構師団所属！ ジャック・ウィルソン少尉であります！」

フム……アメリカ英語……北部の発音だな……

続いて、くすんだ金髪の青年が敬礼しながら答える。

「国連軍欧州方面第58戦術機機構師団所属！ ラスヴェイエット・ラズレーヴォ少尉であります！」

発音がネイティブでない、名前からロシア系か……

次に銀色の髪をオールバックにした青年が答える。

「国連軍欧州方面第12連隊所属！ イマヌエル・ケプラー少尉であります！」

名前と発音からしてドイツ系か……

最後に髪は茶色で瞳が青の青年が答えた。

「国連軍欧州方面第15連隊所属！　アーサー・ブレイン少尉であります！」

発音からイギリス英語か……アメリカ英語に比べたら上品だ……

しかし、4人共若い……新任の少尉か……
哀れだな……着任早々部隊が壊滅とは……

4人の紹介が終わると今度は俺が身分を明かす。

「国連軍ラグナロク部隊所属のレイジ・タカツキだ」

その瞬間、4人がざわつく。

「な！？　ラグナロク機関のトップ！？」

「噂名高き『国連の白い悪魔』に会えるとは……」

「貴方が……『史上最強の衛士』……」

「『国連軍最高の開発者』が俺の目の前に……」

どうやら俺は世界中の衛士からそう呼ばれているらしい……

まさか俺が異名をもらう事になるとはな……

しかも、アムロさんと同じ異名とは……

複雑な気持ちだ……

嬉しいのは嬉しいが……あの人と同じ異名と言う重圧が嫌に押し掛かる……

「とても言いにくい事だがハッキリ言おう。君達の所属していた部隊は壊滅した。君達の預かりは国連欧州方面軍だからドーバー基地に送ろう」

部隊の全滅を聞いた瞬間、4人は悲痛な顔をした。

その時、ウィルソン少尉が質問する。

「我々の部隊は本当に壊滅したのでしょうか？」

俺はその質問に静かにだが確実に肯定した。

「ああ、君達の部隊は君達を残し壊滅した」

その瞬間、ウィルソン少尉は足元から崩れた。

他を見るとラズレーヴォ少尉は天を仰いでいた。

ケプラー少尉は下を向いて震えている。

ブレイン少尉は目を伏せて泣いていた。

俺は言葉を掛ける事無く彼らが落ち着くのを待つ為、食堂を後にした。

暫くして俺が食堂に戻ると4人は俺を待っていたと言わんばかりに俺を見た。

最初に口を開いたのはウィルソン少尉だった。

「俺達4人で話し合ったのですが、貴方方の部隊に入隊したいのです」

俺はウィルソン少尉の言葉に驚いた。

「理由を聞こう」

俺がそう言つと今度はラゾレーヴォ少尉が発言する。

「私達は確かに新任少尉です。ですが、新任なりに戦争を考えています。この戦争、もっと根本的な所を解決しなければ人類は敗北します」

俺は彼らに尋ねる。

「その根本的な問題とは？」

ケプラー少尉は意を決した様に言う。

「国家間の連携が出来ていない事が1つ、2つ目は国家間の利権であります。コレを何とかしないことには私達は敗北するでしょう…
…人類が一丸となって事に当たらなければこのベータ大戦は勝利できません」

最後にブレイン少尉が言う。

「その為には国連の中でも国家と言う垣根を超えた部隊、ラグナロク機関で戦う事がひいては祖国を守る事に繋がると思ったからであります」

コレは…俺にとっては渡りに船だ。

丁度、補充要員が欲しかった所だ。

「いいのだな？ 我が部隊に入隊すると言うことは良くてMIA扱いになるんだぞ？」

ウィルソン少尉がハッキリと言う。

「構いません。どうせあの時、バイルアウトしていても結果は戦死です。敵のど真ん中に取り残されてた訳ですから」

全員が頷く。

「いいだろう。貴官等の入隊を許可する」

全員が俺に対し一斉に敬礼する。

「『有難う御座います！』『』『』」

兎に角、新しい部下が出来た訳だけど……

正直、俺は忙しいし……

仕方ない……武と孝之に訓練を頼むか……

機体の開発は梅麗に頼むとしよう……

新人が育てば俺と梅麗の仕事量が減るかな……

そんな事考えながら俺は梅麗と武に連絡した。

あの出会いから3ヶ月がたった……

正直、武達、6人が来てから俺と梅麗が実戦に出る事は殆ど無くな
った。

その代わりデスクワークがやたらと増えた気がする……

俺も梅麗も……

まあ、コレが正常なのだろう……

准将や大佐などの上級指揮官が現場にホイホイ出るものでもないし。

その代わり武や孝之の現場指揮官が良くやってくれている。

アイツ等、今では武が中佐で孝之が少佐、つまり、佐官に昇進した。

そして、新人少尉たちは今では中尉殿だ……

出世が早すぎる気もしないでもないが、連日連戦を繰り返して生き残り、戦果を挙げれば出世も早いだろうよ。

アイツ等の機体が出来上がった。

先ずはジャックの機体は

バスターをベースに頭部のセンサーユニットを改良した。狙撃時にV型アンテナの中央のセンサーのカバーせり上がるようになった。

バスターの350mmガンランチャーと94mm高エネルギー収束火線ライフルをジャイアントガトリングとメガビームランチャーに変更した。ガンダム4号機と5号機のアレだ。

性能では問題点の多かった外部ジェネレーターでは無く、機体から直接エネルギーをドライブする方式が取られた。更に狙撃用にスコープセンサーユニットを改良した。リミッターを解除した状態でも安全に撃てる様に改良、大出力を長距離でも使用できるようになった。

ジャイアントガトリングは外部からの給弾式ではなくグフカスタムのガトリングの給弾方式が取られた。

両脚にはビームナイフが装備され、不意の接近戦も出来る。

ジェネレーターはミノフスキー・イヨネスコ型熱核反応炉としたのと、ミノフスキーフライトを装備した。

名をグリーンバスターと改名した。

次にラスヴェイトの機体だが、ラスヴェイトの戦闘データ元にブルデュエルをカスタマイズした機体に仕上がった。

改良点は左肩部にも対ビーム、レーザーシールドとスコルピオンレールガンが追加されたのと右肩部にもステイレットが追加された。

此方もジェネレーターはミノフスキー・イヨネスコ型熱核反応炉と、ミノフスキーフライトを装備した。

名前もブルーデュエルと改名する。

次にイマヌエル機体だが彼のデータを元にカラムティをベースに改造をした。

改良点は両肩上部装甲に二連ビーム砲を装備したのと、シールド先端部にビーム発生デバイスを取り付け、接近戦が出来るようにした。と言ってもあくまで緊急回避的な装備ではあるが、突撃級の装甲は軽く切断が可能だ。

此方もジェネレーターはミノフスキー・イヨネスコ型熱核反応炉と、ミノフスキーフライトを装備した。

名前もジェイドカラミティとなった。

アーサーの機体はフォビドゥンを参考にカスタマイズと最適化を行っていた。

改良点は誘導プラズマ砲、フレスベルグを左右に取り付け計3機搭載した。

後、ニーズヘグをビームスピアに変更した。

アーサー曰く、『大嫌なんて使い辛い』との事。

此方はミノフスキー・イヨネスコ型熱核反応炉の装備だけに留まった。

機体名をダークフォビドゥンとした。

計4機が完成し、4人に受領された。

さてさて………実戦でどれだけやれるかな………

後は梅麗が考えた『アストレイ計画』を進めるか……

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 23話

俺と梅麗はニューヨークの国連本部ビル、元帥の執務室に来ていた。何故来たかといえば、ハンガリーにあるブダペストハイヴの陥落作戦を愚進しに来た。

俺は今回の作戦の説明を元帥に行っていた。

「……この事から、ヨーロッパの早期安定を図る為にはブダペストハイヴの陥落は必要不可欠であると考えます」

レイテ元帥は目を瞑り、何かを決意する様に言う。

「解った。今回の事で欧州連合は大打撃を受けた……これ以上のヨーロッパの兵力を減衰させる訳にもいくまいよ。欧州連合は二つ返事で了承するだろう……問題はだ……アメリカだ……彼らが何か圧力を掛けてくる……だが！今回は奴等の好きにはさせんよ！この作戦は欧州の安定が掛かった作戦だ！アメリカには口出しささんよ！」

あの温厚なレイテ元帥がここまで力強く確約してくれるとは……

ヨーロッパはよほど危機的状況なのだろう……16歳の彼等が戦場に出るほど異常だろう……

俺達は箱舟に戻り、今回の作戦の大まかな概要を決める。

「今回は武と新人5人だけで任務を遂行させるの!？」

梅麗の驚きに俺は頷いて答える。

「と、言っても実戦部隊の指揮だ。流石に全体指揮を取る訳ではない。今回の任務で武の現場指揮官としての能力のスキルアップを図る」

梅麗は静かに言う。

「確かに……武が大規模での現場指揮能力を身に付ければ私達の負担も減るわね……」

俺達は大まかな方針を決めた後、細かな作戦を決めた。

武サイド

俺達はソラ（宇宙）にいた。

そう、俺達はソラ（宇宙）からのダイブにてハンガリーへ侵入、ブ

ダペストハイヴの制圧を行う作戦を決行しようとしていた。

「フェンリル1から各機！ 後5分で作戦開始時刻だ！ 準備はいいか？」

俺の通信に5人が返答を返す。

『フェンリル2、何時でも！』

『此方フェンリル3準備完了！ 降りられる！』

『フェンリル4、行けます！』

『フェンリル5、準備完了！』

『フェンリル6、いけるぜ！』

夫々が答えていく。

よし……後は作戦開始時刻に降りるだけだな……

『しかし、隊長……本当に再突入殻が無くても本当に再突入できるんですか？』

『後、管制ユニットの温度調節とか装甲温度とか……』

孝之とアーサーの質問に俺は答える。

「安心しろ、ガンダムがそこらの情けない機体とは訳が違う」

その言葉にジャックが言う。

『何て出鱈目な……』

俺は簡単に言う。

「まあ、訓練通りやれば違う所に落ちる事はないだろう」

その時、通信が副司令から通信が入る。

『作戦開始1分前！　クソ共！！　金玉無くしたみたいに喋ってんじゃないよ！！』

「『『『『『了解！！』』』』』」

俺はアーサーに通信を繋ぐ。

「アーサー！　手筈通りだ！　先陣は貴様が行け！」

『了解！！』

さて降りますか……

俺達は重力の底……ハイヴと言う名の地獄へ舞い降りた。

大気圏の灼熱の赤いカーテンを抜けると俺の視界は赤から青へと移り変わる。

その瞬間、無数のレーザーが俺達を襲う。

アーサーはフォビドウンのゲシュマイディッヒ・パンツァーを正面に展開し、最大出力に切り替える。

『効くかよ!! そんなもん!!』

俺達はそれぞれ回避行動を取りつつ、攻撃に入る。

「当たらなければどうと言う事は無い!」

俺は三のビームライフルを乱射する。

『手前等はココで終わりなんだよ!!』

孝之はビームライフルショットターとバラエーナプラズマ収束ビーム砲を撃ち込む。

『狙い撃つ!! そこだ!!』

ジャックはメガビームランチャー撃ちながらジャイアントガトリングを乱射する。

『落とすよ!!』

ラスヴェイエットは350mmレールバズーカ、ゲイボルグを2丁構えながら乱射する。

このゲイボルグはブルーデュエルの追加兵装だ。

『甘い!!』

イマヌエルはジェイドカラミティの全兵装を撃ち込んでいく。

『遅せーよ!!』

アーサーはフレスベルグを3機ともに撃ち込む。

中央は上に山なり、右側は右にカーブする様に左側は左にカーブする様に撃つ。

「地上のレーザー級を優先的に叩け!! 油断するな!!」

『了解』『了解』『了解』

俺達はレーザー級を優先的に叩きながら突き進む。

「ファンネルミサイル!」

俺の言葉と共に肩部前方の装甲が開き、左右から2機の計4機が飛び出す。

俺は司令のように薄目で気配を探る。

「……ッ!! そこ!!」

ファンネルミサイルは俺の意思に導かれる様にベータ目掛けて突き進む。

レーザーがファンネルミサイルを撃破しようとするが甘い。

「落とされるかよー!!」

俺は思考制御でファンネルミサイル操作し、レーザーをかわす。

俺は武達の作戦をラーカイルラムのブリッジで見ながら呟く。

「フム……まだまだだな……」

梅麗は呆れた様に言う。

「アレで……？ 普通に通用すると思うけど？」

俺はその言葉に呆れて言う。

「普通じゃあ意味無いだろ……俺達が月や火星の制圧を考えたら普通じゃあ話にならない……大量破壊兵器が生産できれば話は別だが今の世界が俺達にそれを作らせてはくれない……」

梅麗は溜息を吐きながら呟く。

「結局……人類の敵は人類……か……よく言ったものね……人類に絶対的敵は存在しない。あるのは相対的敵しかない。と……敵の概念が時代によって、いいえ、戦場によって変化する……たとえば地球外生命体に侵略されても人は同じ人を敵と見る……それこそが人

類の矛盾……カルマ……」

俺はその言葉に自分の考えを述べる。

「それでも……俺は信じたんだ……人類は何時か自分自身のエゴさえ乗り越えられる……」

その言葉を呟いた時、武達は反応路を破壊した。

アメリカ某所……

「彼等はとうとう強行手段に出たな……」

一人の男が静かにそう言う。

「ああ、レイテめ……まさか我々を押さえ込むとは……」

また、違う男が呟く。

「しかし、欧州連合め……存外に不甲斐ない……ラグナロク機関に泣きつくとは……」

ある男は侮蔑を込めて悪態をつく。

「だが……ココで欧州に倒れられては我々が困る……なればこそ、今回のラグナロク機関の出撃は歓迎すべきでは？ 何せ、我々の人員や財布が傷んだ訳ではない。最終的に我々が勝者になればよいのだ」

ある男は鼻を鳴らしながら嗜める。

「だが、彼等にこれ以上に活躍されても困る……彼等はただ、我々の要求通りにMSを作ればいいのだ。彼等は厄介だ……我々のMS輸入数が0になった。コレでは我々のMS保有数が各国に引き離されてしまう」

ある男は溜息と共に現状を嘆く。

「それだけではない……ビーム兵器の購入すら止められた……MSを含むラグナロク機関の兵器は全てブラックボックス化されている……我々を含む各国でもその解析は不可能だ……クソ！！レイテめ！！あの狐がラグナロク機関の販売を全て独占している。しかも、国連共通の技術の為、我々は手が出せない……もし、我々が何かをすれば各国が黙ってはいないだろう」

ある男は罵りながら現状を嘆く。

「我が社としては、我が国独自のMS開発計画が遅れば各国の企業に遅れをとる。それだけは避けたい」

ある男は溜息混じりに今後の展望について述べた。

「何としても彼等を縛る鎖を用意せねば……」

俺達は今回の任務の報告の為、国連本部を訪れた。

「正直、俺達の独壇場だった事に驚きは隠せませんでした。レイテ元帥、今回の件有難う御座います」

レイテ元帥は気にするなと言いながら今回の事について話す。

「今回は欧州連合が我々に泣きついてきたのだ。それにアメリカとて欧州が落ちれば次は自分達と解っているのさ。現状ではリヨンハイヴ陥落以後、それを維持する為に間引き作戦を継続してはいるが欧州半分の安定とまではいかないのが現状だ……リヨンハイヴ跡地に基地が建設中だがそれすら遅れている」

俺は疑問に思った事を口にした。

「ワルシャワ、いいえソ連の動きは？」

「現在、秘密裏に我々ラグナロク機関に出撃の打診をしている所だ。彼等とて領土奪還と回復は絶対だ。死にもの狂いだよ」

次に俺は各国の動きを聴くことにした。

「現在の各国の動きは？」

「ああ、それなんだが現在、注目を集めているのが日本の横浜に基

地が出る事だ。かの香月博士と日本帝国政府たつての願いと、国連のアジア方面での戦略が合致する事から、オルタネイティヴ第四計画権限で基地が建設中だ」

国連もあざとい……アジアの防波堤代わりにする気か？

日本も中々どうして……利用されていると知りながらも自分達の戦力強化の為に国連を受け入れたか……

「日本を防波堤にする気ですか？ 国連もあざといですな……それに日本帝国からの要求は何です？ 無償で土地を貸してやる程甘い連中でもないでしょう？」

鼻を鳴らしながらレイテ元帥は言う。

「“アジア開放の為の橋頭堡”、と言ってもらいたいな。我々国連とて遊んでいる訳ではないのだ。確実なる戦果を挙げる為に我々はアジアに軍を派遣しなければならない。ヨーロッパばかりに目は向けてられんよ。それにアジアやユーラシアには未だ大規模ハイヴが健在だ。それを撃滅するには先ず日本の佐渡島を落とす事が先決だよ」

「で？ 彼等は何を要求してきたのです？ タダで土地を貸す訳が無い以上、何らかの要求はするはずですが？」

俺の質問にレイテ元帥は口を開く。

「ジェガンに変わる新たなMSの配備が条件だ……つまり彼等は我々に土地を貸してやるから新型MSを配備しろ。それと斯衛軍の新たな機体を要求する。勿論、前払いで」

前払いね……

現金な話だなオイ……

「日本帝国の現在のMS配備の現状は？」

「現在、ジエガンタイプのMSが帝国本土防衛軍帝都守備部隊に配備完了している。訓練機にはジム？が配備されている。今の所、戦術機とMSの混成部隊が主流だよ」

まさか……『アストレイ計画』のテストベースが取れる事になるとは……

「良いでしょう。要するに一般兵用と斯衛用に一機づつ新型を作れという事でしょう？ それなら出来ますよ」

レイテ元帥は頭を下げた俺達に詫びた。

「すまん……君達には無理を強いる……」

梅麗は笑いながら言う。

「無理や無茶は何時もの事ですょ」

俺もそれに付け加える。

「それに日本に行ってみたいと思っていた所です」

こうして、俺と梅麗と武の3人が日本帝国に向かう事にした。

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 23話（後書き）

次回、あの人登場！！ かもしれない……

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 24話

俺と梅麗と武の3人はラーカイルムから夫々のガンダムで発進する。

ジャスティスとミには斯衛軍への“プレゼント”を運んでもらっている。

俺はその護衛の為、全集警戒を行っていた。

暫く飛んでいると日本帝国からの通信が入る。

『此方、日本帝国本土防衛軍、ようこそ、ラグナロク機関。殿下がお待ちです。此方の誘導にしたがっていただきます』

「了解した。案内を頼む。水先案内人」

武サイド

色々あったが、日本に、あの懐かしい日本に戻ってきた筈なのに……

望郷の念が余り湧いてこない……

それがどうしてなのかがようやく解った。

基地に案内された途端、多くの戦術機やMSが勢ぞろいしていた。

銃口は上に向いてはいるが何時でもロックオンして撃てる状態だろう……

ああ……そうか……

この日本は俺にとって他国なんだ……

家族もいなければ、知り合いもない……

例え知っている奴がいてもアチラは俺の事など知らない……

俺は戸籍の上ではゴースト……

存在しない人間……

“白銀 武”という人間はこの世にはいない……

俺自身が偽者で経歴もレイジさんが偽装したモノだ……

俺が存在していた証明がレイジさんとメイリーさんしかない……

嗚呼……何て不条理……

俺達は機体を優しく着地させる。

振動は余り感じない、優しい着地。

コレが中々難しい。

しかも俺はメイリーさんとタイミングを合わさなければならない。

更に“プレゼント”に影響が出ないように操作しなければならない。

途轍もなく神経を使う。

俺は久しぶりに“他国、日本”に降り立った。

???サイド

アレがガンダムタイプ……

世界最強の機体郡にして国連軍の象徴……

ガンダムを得るという事は国連軍の衛士にすれば自分が世界最強と

認められること……

機体に統一性が無いのは試験機と言う事もあるが、その衛士の為に製作されると言う事。つまり、自分専用の機体が与えられると言う事……

あの白と青紫の2色の機体はH i - v ガンダム…… “国連の白い悪魔” か……

あの紅い機体…… インフィニットジャスティスガンダム…… “国連の紅の斬殺姫” ……

それにあの白銀と蒼の機体…… ミガンダム…… “国連の白銀の閃光” ……

ラグナロク機関のトップ3が揃い踏みか……

ワイヤーラダーから降りてきた。

私の目はミガンダムの衛士を見た途端固まった。

そして、その人物を望遠レンズで拡大した。

サングラスをかけているが間違いない。

「タ……ケル……」

私は不意に呟いてしまった……

タケルの名を……

武サイド

何か俺を呼ぶ声がした……

いや、そう感じたと言った方が正しいのだろう……

未だにニュータイプ感覚に慣れない……

純夏から貰った力……

レイジさんが用いる力……

人類の革新たる力……

……ッ！？ 今考える時じゃ無いだろ！！ 俺！！

今は任務に集中しないと……

俺達は応接室に案内され、お茶を飲みながらその時を待つ。

中々の玉露だ……流石、城内省……いい茶を出す……

日本じゃ早々お目にかかれなйдらう玉露を飲みながら待つ事10分、ようやく謁見の準備が整った。

謁見には殿下とその横にはマツチヨな赤い斯衛の服を着たムサイお
つさんと青を着た青年が立っていた。

その両サイトには真那さんいや、月詠中尉と月詠中尉に似た眼鏡を掛けた女性が立っていた。

俺達は静かに礼をして頭を垂れら。

「そなた等がラグナロク機関の使いの者か？」

そう問いただしたのは青を着た青年だった。

「ハッ！ 国連海軍独立特務任務MS開発設計機関、ラグナロク機関所属、高月 玲人であります！」

玲人さんがそう言った瞬間、辺りからざわめきに似た呟きが聞こえてくる。

「な！？ ラグナロク機関の最高司令官！？ 准将自らだと！？」

「ガンダムの開発者が!？」

「アレが 国連の白い悪魔」……」

などが言われる。

「静まれい！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

赤を着たゴツイおっさんが怒鳴りつける。

何て覇気だ……周囲が揺れてる……

俺達は全然動揺しないが辺りは蒼然として口を噤んだ。

「失礼した……」

おっさんが詫びると玲人さんも静かに「いえ」言う。

続いてメイリーさんの挨拶が終わり、いよいよ本題に入るべく移動しようとした時、俺だけ呼び止められ、応接室に通された。

何だ？　といぶかしみながらも応接室で待っていると戸が開き声が出た。

「白銀 武……であろう？」

！？

な！？

俺はその声に聞き覚えがある……！！

俺はこの声を知っている……！！

その声の主が殿下のいる壇上の横の幕から静かに出てきた。

青の斯衛の軍服を着た、青い髪を後ろに結い、殿下と瓜二つの顔をした女性が現れる。

「……冥……夜……」

俺は上擦った様に彼女の名を言った。

冥夜サイド

あの者、タケルは驚いて私を凝視していた。

当然だな……私でさえ最初に見た時などあり得ないほど驚いた。

嗚呼……タケル……会いたかった……

「久しいな……あの時以来か……」

私がそう言つたあの者ははぐらかした。

「……誰の事を言っているのですか？ 私はマーシャル・シルバー・ホワイトと言つ名があるのだが？ 人違いでは？」

捻りがなさ過ぎる……

マーシャル……武勇とかの意味がある。更にシルバーホワイトなのそのまま白銀と訳す事が出来る……

「嘘だな……そなたが嘘をつく時、眉根が微妙に上がる。他の者は誤魔化せても私は誤魔化せぬぞ。タケル」

ニヤリと私はそういう。

武サイド

バレテル……

マジかよ……

クソ!!

如何する!?

……

あの目は……誤魔化しが効きそうに無いな……

諦めるか……

俺はサングラスを静かに外し、素顔をさらした。

「……相変わらず突拍子も無いな……久しぶり……と言つべきかな
こういうのは……」

ああ、畜生！ 涙が出そうだ。

「……ああ、久しいな……武……」

何て再開だ……

それから俺と冥夜は自分達の身に起きた出来事を語る。

その話では冥夜は俺に撃たれた時、殿下と会い、気が付くと布団に
寝ていたと言う事だ……

そして、頭の中で自分が御剣家当主として生まれた事、自分が斯衛
の青で大尉だった事、等を話してくれた。

そして、俺も自分の身の上を少し嘘を交えながら話す。

「……そうであつたか……鑑がそなたを……」

「ああ……俺は結局、純夏を死なせてしまった……」

俺がそう言つと冥夜は叫んだ。

「違うであろう！？ そなたは鑑を開放したのだ！！ 忌まわしき
状況から！！」

俺は静かに首を横にふつた。

「俺は……純夏を殺した……それに変わりはない……俺が背負い続ける罪さ……」

「タケル……」

そう言いながら俺は冥夜に抱き寄せられた。

「例え誰からも許されなかつとも……私がそなたを許そう……だから……抱え込むな……私はそなたの戦友なのだぞ？」

ああ……そうか……冥夜は俺にとって尊い人なんだ……

今更ながらそれを理解した……

ならば……俺は彼女に力を与えよう……

冥夜サイド

暫くそうしているとタケルは私から離れ、懷から携帯型通信機らしき物を手にする。

「レイジさん？俺です……ええ、例の機体のパイロットをある人物にしたいのですが……ええ、有難う御座います。必ず結果は出します……ええ……有難う御座います」

そう言っているとボタンを押し、通信を切ると私に向き直り、「こう言った。

「着いて来て欲しい。冥夜に渡したい物がある」

そう言い歩き出す。

暫く歩いていると、戦術機滑走路横の格納庫に到着した。

タケルが中に入ると私もそれに続いて入る。

そこには20m位の大きさの金属の箱が立てつていた。

タケルが金属の箱に近づき、金属の箱に着いているコンソールを弄る。

その瞬間、金属のシャッターが上がり、MSがその姿を現す。

その顔を見た瞬間、私は驚いた……

2つの目、2つへの字の排気口、青い口、そしてV字型のアンテナ

……

「……ガン……ダム……」

私はその名を呟く……

世界最強の機体郡……

国連の象徴がそこに鎮座していた。

「ガンダムアストレイブルーフレーム高軌道ユニット……君の機体だ……」

私の……機体……？

タケルは尚も喋る。

「兵装は75mmCIWSバルカン砲塔システム、イーゲルシュテルンが2門、ビームライフル、接近戦ビーム長刀ガーベラストレート改、アンチレーザシールド、高軌道型ユニット搭載型ビーム砲だ。このガーベラストレート改は刃の部分にビーム発生デバイスが内蔵されている。これにより刃こぼれや刃の使用劣化を遅らせる事が出来る。装甲素材はガンダリウム合金が使用されている。ガーベラストレート改にも使われている」

な！？ ガンダリウム合金！？ その製造は途方も無い技術が必要とされる合金と聞く。

現在、精製できるのはラグナロク機関しかあり得ない。そんな合金を装甲素地とこの刀に似た長刀に使用しているだ！？

「さらにOSにはXMM4が使われている。コイツは俺が作ったOSでコマンド入力を行うと俺達ガンダムの衛士の動きを再現できる様になった。継続してキャンセルとコンボもある」

タケル……そなたこの様な物を何時の間に……

私は新たな私の機体を見上げながらそう思った。

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類 24話（後書き）

ブルーフレームにガーベラストレート……

我ながらセンスが微妙……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4004m/>

マブラヴオルタネイティヴ 逆襲の人類

2010年10月9日14時22分発行